
怪盗『砂時計』と僕

式織 檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗『砂時計』と僕

【Nコード】

N1396N

【作者名】

式織 檻

【あらすじ】

クラスメイトの橡彩くぬぎあやに人知れず思いを寄せる高校生、加賀原元かがはらはじめ。悩み惑い、ウジウジとした日々を送る彼だったが、無理やり連れ出されていた怪盗『砂時計』討伐が、新たな展開を見せ始め……。

プロローグ

『その日』について僕が覚えていることといえば、それが三年前の梅雨の頃だったこと、僕が家に傘を忘れたこと、そして夕飯にカレーが出たことくらいである。

それ以外の記憶はほとんどない。

もちろん、その日が平日だったことや、当時の僕が中学生だったことくらいは容易に類推できる（元々僕は天気の悪い休日にはほとんど外出しないたちであり、また、現在の僕は高校に入学して半年なのである）——しかしそれらの情報は、残念ながら、たいした意味を持たないだろう。重要なのは修学中の話ではなく、あくまで〈帰宅途中〉の話なのである。

下校の最中、僕は濡れ鼠だった。

これはただ単に、今朝の天気予報で「夕方から雨が降る」と言っていたにも関わらず、傘を持っていくのを忘れた僕が悪かっただけのことだ。別に、誰のことを恨んでいるわけでもない——けれど、髪から服から靴からビショビショになって喜ぶような人などそういるものではなく、僕も内心で泣きながら、カバンを頭の上に乗せて帰り道を急いでいた。

——脇を通り過ぎる車がはねてくる水しぶきを避けて

——大きな水溜りを幾多も飛び越えて

中学から自宅までの通い慣れた道を、パシヤパシヤとただただヒタスラに走っていた。もはや鞆の中の教科書ノートが濡れてることなど気にせずに、一刻も早く屋根の下にたどり着くことだけを考えながら、一人黙々と道を進んでいた。

——そんな時だった。

雨音に混じって、ちりん、ちりんという鈴のような音が聞こえて

きた。風鈴のそれに近いが、しかしそれよりも澄んでいて、切なげで、奥深い音色。ただの衝突音だというのに、思わず聞き惚れてしまうほど、至極透明で綺麗な音だった。

ほどなくして、一つの人影が僕の横を通り過ぎていった。

そいつの服装について、残念ながらその時の僕は注視しておらず、まったく言っていないほど覚えていない。しかしその体軀は僕より少しばかり大きく、そして体格は男のそれだった。ずぶ濡れの印象はなかったので、恐らくそいつは傘を携帯していたはずである。：

：僕と違って。

僕はカバンを頭上に置いたまま立ち止まり、振り返った。

振り返って、何ともなしにその男の後姿を眺めてしまった。

男の方も僕の視線に気付いたようで、首から上を僕の方へ向けてきて、そして——僕に向かってにこりと笑ってきた。これまた残念ながら僕はそいつの顔の造りについてほとんど覚えていないが、しかしとても柔和な微笑だったことは、何となく覚えている。

その男はまた前方へ向き直り、道を歩き出した。

ちりん、ちりと。

右耳につけた、赤い宝石のついたイヤリングのようなものを鳴らしながら。

——ちなみに、

その日の夕方に近所の美術館に怪盗『砂時計』が押し入り、ちょうどその日から公開されたばかりのイギリスの至宝『イービルガーネット』なるイヤリングが盗まれたことを僕が知ったのは、その二時間後、夕飯を食べながらニュースを見ていたときのことだった。

カレーを盛大に口から吹きこぼしてしまったのを覚えている。

第一話「橡彩宅にて」その一

僕が女の子の部屋に足を踏み入れるのは、実に九年ぶりのことだった。

……とはいえ、九年前と言えば、僕は小学一年生。

当時の僕は相手方をほとんど女の子として認識していなかったし、部屋に入ったことに対してもたいした感慨はなかった（本やらオモチャやらがキレイに整理され、フローリングもピカピカで、ベッドもきちんとメイキングされており、棚の上にぬいぐるみが蒼然と並べられていて、あんまり汚しちゃいけない場所だなあと思っただくらいだ）。

それにそもそも、僕がその娘に直接呼ばれたわけでもなかったのである——言ってしまうえば、母親の友人の家に一緒にお邪魔し、その子供である小学二年生の女の子の部屋で、親同士の世間話が終わるまでの一時間強、一緒にオママゴトをしていたというだけのことだ。当時の僕としては、幼稚園で遊ぶのと何ら変わらない感覚だった。

こんな些細な出来事ですら九年経った今でもしつかりきっちり記憶していることから、僕の人生においていかにへそいうチャンスが少なかったかということが容易に伺い知れてしまうが——そんなことで落ち込むのは後にして、とにかくだ。

僕は本日、女の子の部屋にお邪魔したのである。

我がクラスメイト、くぬぎあや橡彩の部屋へと。

九年前の印象が強く残っていたため、『女の子の部屋』というものに対して、僕の中に半ば一方的なイメージがあったことは否めない。——が、それにしても、である。本日伺ったこの橡さんの部屋と言うのは、何というか、明らかに——『それ』と真向かいの対極にあるような印象だった。

僕の語彙力を最大限に駆使し、できうる限りポジティブな言葉を選ぼうとすれば、いわゆる『生活感あふれる部屋』とでも表現しようか……。

本棚にはマンガ本やゲームのケースが雑多に積み上げられており（一応、マンガ本のほとんどは少女マンガのようで、そこは女の子らしいっちゃあ女の子らしいが）、床の上には空のペットボトルやらお菓子の空箱やらが放置されている。おまけに、部屋の片隅には脱ぎ捨てられた衣服が山になっていた（ところどころ水色や白のレース状のものまで見えてる気がする）。何だか、それを凝視するだけで犯罪者になったような気分になってしまい、僕は目を背けざるを得なかった。

こんな様子を平然と見せているあたり、橡さんの中における僕のランク分けというのが垣間見えるけれど（いくら橡さんと言えど、好いた男にまでこの有様を見せたりはしないだろう。それくらいはこの人を信じたい）、しかしこれはそれだけで救われる話ではない気がする。

僕は周囲をあまり見ないようにし——代わりに、目の前の二人の人物へと視線を向けた。

この部屋の主たる、肩上まで伸ばした髪を犬の尻尾のように後ろで一つに縛っている女子、橡さん。

そしてその友人たる、銀縁眼鏡と目元のホクロが印象的なクラスメイトその二、佐々谷響子^{ささやきひびこ}。

二人は現在、フローリングの床にひかれたカーペットの上に座り、一生懸命かりかりと、丸テーブルの上で古典の宿題の〈模写〉を行っている——この二人が手本として写しているのが、何を隠そう、実は僕のノートなのである。つまり、僕は『提供者』としてのこの部屋に呼ばれたのだ。

正直、ノートを貸した時点で僕のすべきことは何もなくなり、実際僕は

「じゃあ、明日学校で返してくれればいいよ」

と言って帰ろうとした。……のだが、その際、目の前のセミロング髪少女、椽さんが

「あたしの速記をなめるなよっ！」

と、さながら邪眼使いのようなセリフを吐いて、僕を部屋の中に押し込んだのだ。そしてドアの鍵を閉めてしまい、僕を軟禁したまま模写を始めてしまったのである。そんな速記スキルがあるなら授業中から発揮しろこの誘拐犯というツツコミを飲み込んだ僕は、そのまま黙って座り、テーブルに出されたウーロン茶をちびちび飲みながら、二人の模写が終わるのを待っている次第である。

腕時計をちらりと見ると、もう六時だ。

僕は高校からここまで直接連行されてきたわけで、帰りが遅くなることを家族の誰にも言っていない。家に帰ってもゴロゴロする以外に別段することはなく、遅くなること自体は別に問題ないのだが、あまり遅くなりすぎると夕飯を片付けられてしまう恐れがある。それだけは避けねばならない。

あと十分したらこのドアを強行突破して帰ろう——と、ようやく僕が腹を決めたところで、

「……ふい、終わった」

僕の目の前、椽さんが手を止め、ノートから顔を上げた。そして、その真円にほど近い丸目でもって僕の後方の壁がけ時計を見やり、

「今回のタイムは一時間五分か……。ふん、どうだ！ 自己ベストを更新したよ！ これなら、次回は一時間を切れそうだね！」

にんまりと、まるでフルマラソン完走者のような、やり遂げた感をかもしだした微笑を僕に向けてくる橡さん。

次回もあるのかよっ！　———というツツコミを飲み込んだ僕は、

「そ、そう……よかったね」

と、愛想笑いと共に、至って穏やかに返事をしておく。……実際のところ、僕は今まで橡さんとそれほど会話を交わしたことがなく、少なくとも僕の方としては、まだまだ直情的なツツコミがはばかれる間柄なのである。そんなクラスメイト（しかも男子）を自室に軟禁するこの人の性格は、まあ、各々推して知るべしと言ったところだろうか。これまで半年ほど同じ教室で授業を受けている僕ですら、どうにもこうにもよくわかっていないというのが本当のところだが……。

橡さんは自身のノートをパタンととじると、僕の方に視線を向けてきて、

「というか、そもそも、何であたしらは古文なんてものを勉強しなきゃなんないんだろうねえ？　そこが甚だ疑問だよ。数学とか英語ならともかく、こんな数百年も前の言葉なんて、将来どうやったって使いようがないし。これならまだ、クラス対抗大食い大会でも開いてた方が数倍有意義だよねえ」

……週三でフードファイトの方が数百倍ハードだと思うけど。

「……ふむ？　考えてみれば、このカリキュラムなら、給食の時間が丸々浮くんじゃないか？　おまけに生徒の健やかな食生活をサポートできるし！　一時間目から催されるなら、朝食もいらさないじゃないか！　家計にも優しいじゃないか！　欠点が何も見当たらない

！ これはすごいぞ！ 素晴らしいぞ！」

……いや、クラスに肥満が増えるだろうし、おまけに給食費がバカにならなくなる。

「もしかしたら、あたしは今世紀で一番素晴らしい——いや、恐ろしいことを考え付いてしまったんじゃないのか？ これは世紀の大発見なんじゃないか？ ……ふーむ、これはやばいな。やばやばだな。さっさと特許出願なり商標登録なりしておかないと、誰かに取られてしまうじゃないか——」

……大丈夫、世界人口六十億人、誰一人として奪わないから。

「よし、加賀原。この素晴らしい発明の瞬間に運よく立ち会えたあなたにも、一つ、メニュー拒否権を与えよう。ニンジンでもピーマンでもセロリでも、何でもルールから外してやる。それを世界標準ルールにしてやる！ これは発明者たるあたしだけの特権だからね！ 今のうちだぞ。さあ！ あなたは何を取り除きたい？」

「……………え？ ええ？ えと、い、いや、僕は、まあ、別に、いいよ。好き嫌いとかあんまりないし。橡さんの好きにすれば——」

「——だ、だめだあああ！」

橡さんは急に叫び、ばたんと後ろに倒れた。そして四肢をばたばた動かしながら、

「だめだだめだだめだだめだ！ なってない！ なってない！ まったくもってなってない！」

「……………え？ な、何が？」

「あんたはツツコミがなってない！」

橡さんはがばりと上半身を起こすと、そのウサギのような寄り目でもって僕を見据え、びしっと人差し指を僕に向けてきた。

「そんなありきたりな返事じゃ、何も盛り上がりやあしない！もつとマシな返答はできないの！」

僕は、橡さんに対してこれまでもすでに心の中で四つほどツツコミを施していることは言わないでにおいて、

「……え？　じゃ、じゃあ、例えば、どんなツツコミをすればよかったの？」

「そんなの『お前、まだ隠し芸大会の方がおもしろいだろうっ！』とか、色々あるでしょーがっ！」

人差し指を左右に振りながら、僕を諭すように言ってくる橡さん。……ええと、それはボケ返しになってるね。

「他にも色々あるっての。誰だって一つや二つ思いつくもんなんだから」

橡さんはくると首を回し、いまだカリカリと模写に精を出している佐々谷の方へ視線をやると、

「ほら、響子、あんたも一例出してあげなさい。この迷える憐れな子豚に、道標を一つ与えてやっ——」

「——うるさい、殺すわよ」

ノートから顔を上げた佐々谷は、そのロングヘアーを蛇のように

ざわざわと逆立て、おどろおどろしい声で言ってくる。

僕と橡は同時に肩をびくつかせ、石にでもなったかのように固まった。

初セリフが「うるさい、殺すわよ」である女子高生は一体小説至上何人目だろうという疑問を飲み込んだ僕の前、ひやりと冷や汗を一つ垂らした橡さんは、ひきつった笑顔とともに僕の耳元にそばだててきて、

「……ほ、ほら、加賀原、今のが佐々谷先生直伝、『巨人の一撃』トールハンマー

とさえ呼ばれる、世界最強の攻撃力を誇るツツコミの一つよ。何でも、このスキルを発動すれば、男ですら誰一人として寄り付かなくなるという……。そのせいで響子は、『彼氏欲しい、彼氏欲しい』とやたらにわめいているにも関わらず、いまだに一人身——」

「——ああっ？」

『一人身』という単語に反応するように、またしても睨んでくる佐々谷。

ぞくりっ——と、僕と橡さんは再度固まる。

橡さんは肩を震わせ、どもりながら、

「……一人、み、見事に世の荒波を乗り越えていて、その生き様はすばらしく、べ、勉強になるなあって、は、はははは。……じゃ、じゃあ、あたしは、ちよっと、トイレに、行こうかなー。……加賀原、あんたは、しばらく、人生の自主学習を、しておく、ように……。じゃっ」

橡さんはあたふたと立ち上がると、その後ろ髪を闊歩する猫の尻尾のように左右に揺らしながら、逃げるように廊下へと出て行った。……出て行ってしまった。

おかげで、完全アウェイなこの場所で僕を一人にするなこの拉致犯という僕の魂の叫びは、僕の反応がコンマ一秒遅かったばかりに、モノローグだけで終わってしまったのだった。

第一話「橡彩宅にて」その二

かくして、部屋の中には僕と、僕の目の前でいまだに黙々と鉛筆を動かしているメガネ装備少女、佐々谷という図。

佐々谷は顔も上げず、ロングの髪の手先でテーブルを撫でながら模写を続けている。なので、僕は今度こそ完全に手持ち無沙汰になり、しかたなくウーロン茶を減らしていく作業に専念することになった。

——と、程なくして、

「……ふう。何とか、私も終わったわ」

佐々谷もため息をつきながら顔を上げた。そして、眼鏡越しに僕をじろりと睨みつけてきて、

「……というか、加賀原、あなた、字が汚いのよ。解読するのに時間がかかっちゃって。おかげで遅くなっちゃったわ」

口を尖らせながら言ってくる。

僕は、だったら僕のノートを強奪するなこっちが頼んだ覚えはないってのにこの誘拐魔という正論を飲み込み、

「……悪かったよ」

と肩をすくめる。……我ながら実に弱気な対応であるが、佐々谷とは橡さん以上に疎遠なため、余計に接し方がわからないのである。佐々谷は僕の返答にふんと鼻を鳴らすと、脱力するように背後に手をつけて、そこに体重を預けた。そしてそのままテーブルのウーロン茶を一息で半分ほど飲むと、

「……でも、あなた、私に感謝しなさいよ？」

ふいに、ホクロの張り付いた口元をにやつかせながら、僕に言うてくる。

「私の手引きのおかげで、あなたの〈念願〉が叶ったんだからね」

「僕の念願？ ……って、何だ、それ？」

「ふふ、ふふふふ。まったく、もう、何言ってるのよ？」

佐々谷はふふんと勝ち誇ったような顔をして、

「全部バレバレなんだから。今さら隠さなくてもいいわよ。取り繕っても無意味。本当は今、あんた、すぐくすぐくすぐく嬉しんでいるでしょう？ 舞い上がってるんでしょう？ だって――

――『愛しの』橡彩の部屋に入れたんだから」

「な……！」

僕は思わず前屈みになった。そして何とか言い繕うと思って口を開く――が、次の句が思いつかず、

「あっはは。ほら、やっぱいい」

口をパクパクさせるだけの僕は、けらけら笑って僕を指さしてくる佐々谷に、完全に主導権を奪われるままになってしまう。

「わかりやすいのよ、あなた。教室じゃあ、他の人は興味なさげに眺めるだけなのに、彩のことだけは一生懸命目で追ってるんだから。

私みたいによく彩の周りにいる人間には一目瞭然なのよ。あなたが、彩に気があるんだってね。……しかし、あなたも変わった男よね。よりによって彩を気にするなんて。半年もクラスメイトやってきて、彩の性格が理解できてないわけじゃないでしょ？」

「……そ、そりゃ、わかってるけど」

「大体、あんたと彩じゃ性格が釣り合わないのよ。彩みたいな能天気で明るい子っていうのはね、同じように明るい性格の男にしかないの。……だって、当たり前でしょ？ 自分よりローテンションな人間といったら、気が重くなってしょうがないじゃない。そんな男といっても楽しくないのよ。例外は顔がいい男か金持ちな男だけど、残念ながら、あなたはそれらにまったくもって当てはまらないしね。だから——あなた自身がどうかはともかくとして——彩があなたについて幸せに感じることをなんてまずないと思うけど」

……な、なんって言われようだ。ただのクラスメイトに、そこまでなじられる筋合いがあるのか？ ここまで人の人格を否定する権限があるのか？

……が、しかし、いかんせん、今の佐々谷の言い分は、どこを切り取っても正論のように思えてきてしまう。ツツコミどころが見つからない。僕には言い返せない……。

「というわけで、残念ながら私はあなたを応援する気はさらさらないわ。望みが極細なのに応援しても、こっちが疲れるだけだからね。そんな無益なことは私はしないの。今日あなたをここに連れてきてあげたのはね、単にあなたに恩を売っておくためよ」

「恩を売る？ 僕に？ ……何のために？」

「決まってるじゃない！ 決まりきってるわ！ 紀元前から決まりきってるわよ！ みなみかわ 南川君のことよ！」

……南川のこと？

「そうよ！——ああ、ああ、私の私の私だけの白馬の王子様！ 南川準様！ 知的で優しくて笑顔が麗しい世界一の殿方！ 我が高校に舞い降りた神の使い！ 私の未来の旦那様ああ！」

佐々谷は胸の前で両手を握り締め、虚空を見つめて声を張り上げている。鼻血でも流さんばかりの発狂振り。……というか、そんな大声で叫んで、ここがよその家だということを忘れてないか、この人？

「そんな素敵な南川君が、なぜかなぜかなぜなか、よくあなたと一緒にいるじゃない？ 絵面的にはまったくもって釣り合っていないけれど、二人でよく話してるじゃない？ だったら仕方がない。南川君のことを知るために、より深く知るために、私はあなたとも少しばかり話をする必要が出てくるじゃない？ だから私はあなたをここに呼んだのよ。そして聞くのよ！ 南川君はどういう女の子がタイプなの、と！」

「……知らないよ」

僕は即答した。

実際、僕は南川と女性のタイプについて話し合ったことなど一度もなく、本当に知らないのだが、たとえ知っていたとしても、今までの会話の流れからして教える気にはならなかっただろう。当たり前だ。

僕は脱力しながら、

「そんなの、本人に聞けばいいだろ」

「聞けるわけじゃないじゃない！」

佐々谷はまたも叫んだ。

「私が直接聞いたら、優しい優しい南川君のこと、きっと『オレのタイプは髪が長くて絹のように綺麗で、メガネが知的に素敵で、そして口元のホクロがチャーミングな娘かな。……そう、君みたいに』って言うってくれるに決まってるじゃない！　そう言って私に微笑んでくれるに決まってるじゃない！　そんなこと、そんなこと言われたら、私は！　私はあああ！」

「——うるさい」

ばたんとドアを開け、椽さんが帰ってきた。

「響子、さっきから何叫んでんの。あんたが学校でいくら叫ぼうが構わないけど、ここがあたしん家だってこと忘れないでよね。近所迷惑になっちゃうでしょ。ただでさえ、うちはご近所さんに『カラオケ無法地帯』の名で知れ渡ってるのに。余計に怒られちゃうっての」

「あ、ごめんごめん」

佐々谷は平静を取り戻し、頭をかきながら素直に謝った——
が、一拍おいた後「ん？」と眉を吊り上げながら、

「……ちよつと待ちい、彩。今の話を冷静に聞くと、どうもあなたに私を糾弾する権利はないように思えるんだけれども」

「なーに言ってるの。あんたがあたしん家で迷惑かけたんだから、謝るのは当然でしょ」

「そりゃそうだけど、でも、現時点であんたん家は最低評価をくらってるじゃない。残念ながら、私には『カラオケ無法地帯』を越える称号を承るほどの力量はないわよ」

「すると、何かあ？　影響が小さければ罪は罪でないとお前は言う

のか？ 例えば、他人のプリンからカラメルだけを盗んで食した場合、プリンのプリンたる本体は無事なんだから無実だと、お前はそう言うのか？」

「……い、いや、プリンからカラメルを抜き取るのは、神の冒瀆にも等しい大罪よ。死罪以外が言い渡されようものなら、裁判官が死罪をくって然るべき罪状よ」

「ほら見ろ！ つまり、たとえどんなに小さい罪だとしても、その深刻さは人によって千差万別、罪は罪なんだよ！ 許されるものじゃないんだよ！」

「……………うぬぬ」

言い返せなくなり、唸り始める佐々谷。僕の方に一瞥をくれ、「お前はこれでもこいつに惚れるのか！」と言わんばかりに睨みつけてくる——が、どうしたらプリンからソースだけを抜き取れるのかその手法はいかなるものかと考えることに忙しかった僕は、やんわりと無視した。

橡さんは、なおも今この場では自分が最もまともな人間であるとも言っているような真面目くさった顔のまま、

「——というか、あんたたち、終わったんなら早く帰りな。もう六時過ぎてるよ」

「……………そうね、私もそろそろ帰らないと。プリン談義してて冷蔵庫にストックしてあるおやつをプリンを食べ損ねたら元も子もないわ」

佐々谷はよっくらと立ち上がり、テーブルの上のノートをカバンにしまった。そして肩に掛けると「じゃね、また明日」と手を振りながら部屋を出て行った。程なくしてトストスと階段を降りていく音が聞こえてくる。傍から見ると何ともさっぱりした去り際だが、この二人はよくよく一緒にいることが多いので、家に遊びに来るの

も行くのも帰るのも珍しくもないのだろう。二人の性格のせいもあるだろうけど。

僕も僕で、テーブルの上に残された古典のノートという名の我が人質を取り戻すと、

「じゃ、じゃあ、僕も帰るね」

「ああ、加賀原、今日はサンキューね。助かったよ」

橡さんはぽんぽんと僕の肩を叩いてくる。

「また何かあったらよろしく頼むよ。ウーロン茶ご馳走するからさ」

いつもの屈託ない笑顔の橡さん。その眩しい笑顔と叩かれた肩の感触に僕は変に動揺しながらも、佐々谷と同じように「また明日」と言いながら部屋を出て、階段を降り、玄関を出て行った。

そしてとばとば家路を急ぐ。

……僕の時給はウーロン茶一杯か、というツツコミを飲み込みながら。

第二話「教室にて」その一

「加賀原、お前、何で昨日来なかったんだ？」

我が二年三組の教室にて、昼休憩のチャイムが鳴り終わるか終わらないかの頃合、茶髪を耳下まで伸ばしている、色白で女顔の男――南川は、弁当を握り締めながら僕の横の席に移動してきて、開口一番、いきなり僕を糾弾してきた。

「放課後、図書室で作戦会議を執り行おうって言っただろ？ 俺はずっと待ってたんだぜ？ おかげで、俺は一人で三十分待ってたんだから。勉強するわけでもないのに読書するわけでもないのに図書館で一人ぼっちとか、切ないったらありやしない。……まったく。ほんと、何で来なかったんだ？」

「……強制連行されたんだよ」

僕は自分の弁当の包みを広げながら、ため息交じりに答えた。

「はあ？ 強制連行？ ―――って、お前何か犯罪でも犯したのか？」

「いや、僕は無実だ。つまるところ、拉致にも似た状況だったのかもしれない」

「はあ、そうなのか。まあ、無事なようだなによりだ。……つか、お前の犯罪の話はどうでもいいんだ。コイントスでコインが真横に立つ確率くらいどうでもいい。俺達が追ってるのは、もっと重大な犯罪者だろ？ ここで話題にすべきはそっちだ」

ハンバーグを口に運びながら、パクパクペラペラと器用に話を続ける南川。

「昨日できなかった分、今から会議を進行させようぜ。期限は一週間後に迫ってるんだから。それまでに作戦を考えなけりゃならねえ。一刻を争うんだよ。だから、ほれ、早く案を出せ――」

――どうすれば怪盗『砂時計』を捕まえることができるのか？」

南川は、左の掌でベチンツと机を叩きながら言ってきた。

この発言が南川流のジョークであるとか、はたまたこの『怪盗』なる単語が『解答』とか『解凍』とか実は僕の勘違いであるとか、そんな一縷の望みを託しながら、僕は南川 of その顔を見返した――
――が、至極残念なことに、南川はいたって真面目な表情のまま、その二重の眼でまっすぐ僕を見つめてくる。両の黒目に『本・気』と浮かび上がってきそうなほどの眼光である。

僕はため息を吐き、半ば冷めている白米を口に運びながら、

「……ちゅうか、何度も言うように、そもそも僕達に『砂時計』を捕まえられるわけがないだろう？ 警察だってこの五年間取り逃がし続けてるんだから。何の能力も知識もない高校生にできるわけがない」

「諦めたらそこで終わりだろ！」

机を拳でドンと叩きながら叫ぶ南川。……つか、この机は僕のなんだから、もう少し労わってくれ。

「警察が手も足もでないからこそ、俺達の出番なんだろうが！ 世界中の芸術品をことごとくかっぱらっていく泥棒！ 日本の名を汚す怪盗！ こいつをどうにかしないことにゃ、安心して美術品鑑賞できやしない！」

南川は僕の机をツバで汚しながら言い聞かせてくる。

……ああ、もう、どうしてこいつはへこうなのだろうか？ あの高飛車な佐々谷がお熱になっていることからわかる通り、こいつのルックスは学年屈指のものだ。眼も鼻も口も輪郭もすべてがすつきりすらつと収まった、男も女もこれぞ理想といわしめるほどの顔立ちなのである。女友達を作るのにはまず苦労しないだろう。素直にガールフレンドと遊び興じる高校生活を送っていれば、もっと幸せになれるだろうに。

——なのに、なぜかなぜかなぜなか、こいつは怪盗『砂時計』にご執心なのである。

この怪盗『砂時計』というのは、近年日本全土に出没している大泥棒で、美術館に侵入しては美術品を盗み続けている犯罪者である。その盗難の手法は至極高度らしく、完全に締め切った館内にも簡単に侵入するし、ショウケース以外には何も痕跡を残さず中身をつぱらって行くそうだ（噂では、ショウケースを映している監視カメラの映像も、ある瞬間を境にへ壊されたショウケースへとへ空になった展示台へを映し出すというもので、画像解析ですらまったくわからないらしい）。こいつが一体どんな手を使って美術館の中に進入しているのかさえ謎だという。警察も色々な最先端の科学的捜査を行っているが、一向に成果が上がらず、こいつは超能力者の類なのではないかという噂まで広がっているくらいなのだ。

——あるいは、この怪盗が有名になったもう一つの理由として『予告状』がある。

どの漫画にインスパイアされたのかは知らないが、この『砂時計』は美術館に「いつ」「何を」盗むのかを記した『予告状』を送りつける。そして、そこに書かれている通りに盗みを犯すのである。予告されてるんだから警備も万全のはずだが、やはりこいつはその警備網をかいくぐり、美術品を盗み出していくのだ——ちなみに、この『砂時計』なる名称も、この予告状に砂時計の絵が描いてあったことから名付けられたものである。

盗みが成功するたびにその美術館の係員や警備員なんかが疑われたりしているが、結局最終的にはその人達も全員シロであるという結論が出る。そして外部犯以外に容疑者はいなくなる。しかし、盗難が可能な外部の人間というのがまったく見当たらない。見つからない。かようにして、怪盗『砂時計』は捕まらないまま、この五年間、盗みを繰り返しているのである。

そして、この二枚目男南川準と僕の接点も、この怪盗『砂時計』なのだ。

美術品鑑賞マニアである南川は、僕と知り合う以前から一人で『砂時計』を追っていたそうだ。犯罪予告がニュースになるたび、現地に赴いて一人黙々と捜査を重ねていたらしい。しかし、その捜査もまったく前進せず、盗難の頻度が増すばかりで、そろそろ協力者の一人でも欲しいと思っていたところに――――今年度から同じクラスになった僕が、こいつに、何ともなしに言ってしまったのである。

「……僕、中学の頃にこの『砂時計』とすれ違ったことがあるんだ」と。

そこに、南川は食いついてきた。

そして、僕を強引に引き込んだ。

僕だって怪盗『砂時計』に興味がないといえば嘘になる――――が、その度合いはあくまで興味程度。捕まえたいと切に願うほどではない。僕は、こんなわけのわからない犯罪者のために週末を潰す気はさらさらないのである。

だのにこの南川は、自分から『砂時計』の話振ってきた（誤って振ってしまった）僕を、水を得た魚のように引き込んだ。犯罪予告があるたびに何かしらの作戦を勝手に立案し、僕を無理矢理

引き連れて予告現場に赴くのである。

——そして現在も、隣県の美術館に、来週の金曜を予告日とした予告状が届いたものだから、南川は躍起になっている最中なのである。

南川は沢庵をパリポリとかじりながら、

「……先週の日曜にこの美術館を下見してきたんだが、やったらと広いところだった。んでもって、周りは四メートル近いレンガの塀が囲ってて、とても人間が越えられるようなもんじゃなかった。超えるには何かしらの道具が必要だろう。空を飛べるような何かがない。恐らく警察も、空中からの進入を考えてるんだと思う」

僕のくたびれた表情に気付かないのか無視しているのか、南川は昼食を口に運びながらトクトクと話し続けている。

「しかし、俺はそこが『砂時計』の狙いだと思うんだ。つまり、警察の目を空中に向けさせておいて、それとはまったく別の場所から進入する。『砂時計』はそれを企んでると考えられる。空中とはまったく別の場所——つまり地中だよ！」

いい加減僕は南川の発言をすべて聞き流しているのだが、その僕の心境に南川はまったく気付いてくれない。どころか、テンションがどんどん上がっていく次第で、

「てなわけで、今度の捜査じゃあ、付近のマンホールを監視しようと考えてる。恐らく『砂時計』はそのマンホールから地中に入って、地下から美術館に侵入するに違いない。というわけで、南側と北側のマンホールを俺達で手分けして監視することになるわけだ。……」

ほれ、これがその美術館付近の地図だが、まず俺は――」

ずっとA4の紙切れを差し出してくる南川。そこには美術館を中心とした二千分の一の地図が印刷されており、さらに十数個のバツテンが書かれている。恐らくこれがマンホールの場所を表しているのだろう。ようは、南川は日曜に美術館周辺を歩き回り、マンホールがある場所を全部調べてきたのだ。まったく、よくやる……。

「というわけで、お前も、明後日までにこの地図とマンホールの位置をすべて頭の中に入れておくように。あと、当日は夕方五時半に駅前集合だからな。遅れるなよ」

そう言って、南川は弁当を包みにしまいながら（いつの間に食い終わってたんだ？）「じゃ」と僕の席から離れていった。最終的には何だか命令口調で宿題を出してきたが、一体どこに僕がこいつに命令されるいわれがあるのだろうか？　僕は一度も捜査と一緒にしたいと言った覚えはないのに……。

そもそも、僕だってそこまで暇じゃないんだ。僕は現在、悩み多き年頃たる十六歳なのである。怪盗『砂時計』のこと以外にも、悩まなければならぬことだって沢山……はなくとも、いくつかはある。ちゃんとある。しっかりある。日々、きちんと悩んでいる。今現在だって悩んでいる最中なのである。

僕は弁当を口に入れる作業を継続しながら、ちらりと、教室の後ろ側に目をやった。

第二話「教室にて」その二

昼休みで、和氣藹々とした雰囲気の教室後方。

そこでは、四人の生徒が談笑している。そのうちの一人が女子生徒で、残りの三人が男子だ。みんなで笑い合って、小突きあって、また笑いあって。楽しい高校生活っていうのはきつとこういうものなんだろうというお手本のような風景だった。

そしてこの中の唯一の女子生徒というのが、首元まで伸びた黒髪をゴムで一つに縛っていて、ウサギみたいに笑っていて、そして強く輝いた目をしているクラスメイト——橡彩なのである。このクラスで楽しい会話が行われている場合、たいがいはその輪の中に彼女がいるもんだ。起爆剤になっているのか促進剤になっているのかは知らないが、とにかく橡さんがいれば、周りの男子も女子も楽しく話をする。彼女はそういうノリとペースを持った人間なのだ。

そして、残りの三人の男子のうちの一人。

清潔感のある短髪で、バスケ部所属だからかややしっかりした体格。南川ほど端正な顔でもないが、しかし人のよさが全面に滲み出したような微笑が張り付いている男。クールな男好みが南川を支持するなら、明るい男が好きな女子に人気がある生徒——たかのり鷹野則唯である。

僕も今までに二、三度話したことがあるが、まるで数年来の友人であると同様覚してしまうほどに、彼は自然に当たり障りなく僕のパーソナルスペースに入ってきた。どうせ友人に持つなら、わけのわからん怪盗の捕獲に躍起になっている南川より、鷹野の方が断然いいと思わしめる雰囲気をかもしだしていた。その齒切れのいい性格からして、女子からだけでなく男子からも支持されるクラスメイトである。

そんな男が、橡さんと楽しそうに話している。

お互いアハハハハと笑いながら、時に叩いたり、時にどついたり、

時にヘッドロックをかけたりしている。それはまあ、何てことはないコミュニケーションの一種でしかないのだろうが——しかし僕にとっては、どうにも虚しくなる光景だ。

僕が椽さんにヘッドロックを掛けようとするなら、数分間の心の準備と気持ちの整理とそれ相応の覚悟が必要なものだ。反射的に、当たり前前にそれをやろうなんて不可能に近い。ときに、名前を呼ぶのですら躊躇するくらいなのだ。

そんな、僕には決して超えられないハードルを、小石をまたぐかのようにいとも簡単に越えていく男。本心としては苦々しい限りだが、だからといって鷹野をライバル視する気にもならない。嫌いになる気にもならない。つまるところ——勝負にもなりはしないというところなんだろう。

鷹野は、特に何か卑怯なわけでもない。ズルをしているわけではない。彼が彼であるからこそ、そういうことができるのだ。そういうことが許されるのだ。そういう次元の問題なのだ。そういう次元での僕の敗北なんだ。

——このもどかしさはどこへぶつけるべきなのだろうか？

——一体全体誰を恨むべきなんだろうか？

これが、今年の四月に椽と初めて出会ってから、僕がずっと反芻している悩みである。

「……はあ」

嘆息しながら、僕はようやく五割り増しでおいしくなくなってしまった弁当を食べ終えた。そして弁当を包んでいると、横から、

「——まったく、また彩のこと見てるの？」

と、至極とげとげしい声が投げかけられてきた。

首を回すと、腰に手を当てた佐々谷が僕の横に立っている。背中

まで伸びた黒髪を後ろに払いながら、銀縁の眼鏡の奥から呆れたような視線を僕に向けている。

「……やれやれ。あなただったら、休み時間のたびに一人で席に座ったまま、彩の観察ばかりしてるんだから。傍から見ると、気色悪いったらありやしないわよ。そんなに気になるなら話しかければいいのに。彩はそんな壁を作るような女じゃないのはわかってるでしょうに」

「……そんな、簡単に言うなよ」

「あからさまに簡単なことじゃない！ ただ単に『こんにちは。何の話してるの？』って言えばいいだけなんだから。これほど簡単なことはないわよ。まったく……あ、言っとくけど、そんなコソコソ観察ばっかしてて、ストーカーなんかにならないでよね？ そんなことになったら、私の責任になっちゃうじゃない。そんなことさせるために家に連れてったわけじゃないんだから。気をつけてよ？ ……とは言っても、現時点ですでにストーカーみたいなものだけどね」

うるっさい！ ———と叫びたかったが、もはや叫ぶテンションも維持できてなかったので叫べなかった。代わりに、僕は佐々谷をジト目で見返すだけに留める。

佐々谷はそんな僕の視線を気にすることなく、僕の隣の席にどっかりと腰を降ろしながら、

「……そうね、ここで一つ、あなたにためになる話をしてあげましょうか？」

「……ためになる話？」

「そ。あるいは興味深い話と言ってもいいかもね。いいからありがたく聞いておきなさい。もちろん見返りはきっちり要求するけど———ところで、あなたは映画とかドラマとか見るほう？」

「いや、まったくもって見ないな。テレビ自体あんまり見ないし」
「そんなんだから友達が誰もいないのよ」

誰もいないって、一応、南川は友人と呼べなくもなくもな……
：いや、あいつは怪盗『砂時計』にかこつけて絡んでくるだけだし、
確かに友達とは呼べないのかもしれない。

反応できずにいる僕を、佐々谷はふんと鼻で笑いつつ、

「……まあ、あんたに友達なんてできたら天変地異が起こっちゃうわね。世界平和のために、あんたはいつまでも一人寂しく生きてなさい。とにかく、そんな些事はいいとして」

よくねえよ！

「そういうフィクションの物語にも、いわゆる『元気な女の子』っていうのが主役として出てくることがよくあるわ。もちろん、そういうキャラクターを前面に出すことで作品を明るく前向きなものにするっていう意図もあるだろうけど。……でも、そういう元気なキヤラを出すメリットっていうのは、それだけじゃない。より作品を味わい深いものにする手法が簡単に使えるのよ。それはつまり——
——ギャップよ」
「ギャップ？」

いまいち話が繋がらず、僕は聞き返しながら首をかしげた。

佐々谷はこの僕のリアクションに対して、にやけ面になり、何だかの優越感を持ったような表情になって、

「そう、ギャップ。もつと言えは、内面と外面のギャップよ。つまりね、いつもは明るく振舞っているけど、内面はすごくナイーブで、
気を使い過ぎてて、寂しがりで、でもそれを隠すために、人に嫌

われないように、演技で明るいキャラを演じている。そういう内面と外面の差異。これが、フィクションの明るいキャラが魅力的に仕上がる理由の一つよ」

「……まあ、話はわかるが、それで僕に何が言いたいんだ？」

「うっふふ。で、ここからが本題なんだけど——あなた、彩の家族構成って知ってる？」

「家族構成？　椽さんには兄弟姉妹が何人いるか、とか？　いや、知らないけど……」

「この前あの子の家に行ったけど、実はね、あの子、今、両親と一緒に暮らしてないのよ」

「……………えっ？」

僕は思わず素っとな狂な声を上げてしまった。上げてから、他の人に変な目で見られてないかと周りを見回し、どうやら他の人はまったくもってこちらを気にしていないようで少々安心しつつも、再度佐々谷の方を見て、

「……両親と別居って、どういうことだ？　離婚とか？」

「いや、単に仕事で外国に行ってるだけよ。だからあの家では彩と、お兄さんと、妹の三人だけで暮らしているの」

……そ、そうか。そうなのか。そう言えば確かに、彩さんの家の玄関じゃあ皮靴やハイヒールなんてのは見なかった気がする。

「……まあ、そのお兄さんがしっかり者な人だからね。生活で困るようなことも全然ないみたいよ。私も何回か会ったことあるけど、すっごく生真面目な人だった。おまけに、彩と妹の男友達の選別について、両親から全権を託されてるって話だし。だから、あんたの最終目標は、その人にちゃんと気に入られることになるかもね。無理だろうけど」

……最後の一言が余計だ。

「とにかく、そんな非現実な希望から話を戻すけど——彩はしばらく両親と会ってないってことなのよ。あの子もあんな明るい性格してるけど、その実は両親がいなくて寂しい思いをしてるんじゃないかってね。それを隠すためのあの突拍子もないキャラとか。……そう考えると、辻褄が合う気もするでしょ？」

——橡さんのあの性格が、演技？ 造られたもの？

僕はその思いがけないアイディアに驚きながら、ちらりと教室の後ろを向いた。

そこではまだ、橡さんと鷹野が談笑を続けていた。そして、その談笑の内容が耳に入ってくる。

「——そういやさあ、橡、昨夜の九時からやってた特番見た？」

「特番？ いんや、あたしは見てないけど……。何かおもしろいのやってたの？」

「いやー、おもしろいつてか、オレ、気味が悪かったんだけど。最近の最先端技術ってのが紹介されてさ。何でも、『ナノ・マシン』ってのが実際に開発されて、実用化されてるらしいんだ」

「な、なにに！ な、『ナノ・マシン』だってっ！」

「そう、そうなんだ。医療現場じゃあ、実際に人間の体内に注入されてるとか。そういう映像が流れてた。……でもさあ、実際自分が注入されることを思うと、少し気味悪いよなあ。そんなもんが自分の体に入るなんて。自分の体が内側から操られるみたいで」

「……確かに、恐ろしいもんだね。まさか『ナノ・マシン』とは。……その名前から察するに、その効力ってのは、注入されたが最後、語尾に『くの』という愛くるしい助詞がついてしまい、生粋の萌え系に生まれ変わってしまうところだろう。響子のツン

デレですら台無しではないか。現代科学の何と恐ろしいことか。恐ろしい、ああ恐ろしい、本当に恐ろしい……」

腕を組み、時代の行く末を案ずる薩摩藩主のような真剣な表情で「うゝむ……」と考え込んでいる椽さん。

………うゝん、演技？

むしろこれが演技であった方がどれだけありがたいことかと思いつながら視線を佐々谷に戻すと、

「……ま、例えばの話よ」

佐々谷は取り繕うような顔で答えてきた。

「つまり、背景を考えるとそういう可能性もあるってこと———そんなでもって、前述の明るい女の子が主人公の物語ではね、王子様役っていうのは、その女の子の寂しさをわかってあげることができて、さらに癒してあげられるような男なのよ。つまり包容力。それがあなたにあるのかってこと」

………包容力、ねえ。

「ノリも金もルックスも包容力もありゃしないあんたに、一体全体どうやって彩を射止めることができるのかって話。……いえ、彩だけじゃなく女性一般についても同じよ。あんたに、一体何ができてっていうの？ その人のために、あんたができることって何？ あんたにしか出来ないことって何？ 何か一つでもあるの？」

………僕にできること。

………僕にしかできないこと。

「…………ほら、反論できないでしょう？ 何一つ思い浮かばないでしょう？ だから、あんたもさっさと考えを改めて——」

——キーン、コーン

黒板の上のスピーカーから鐘の音が響いてきた。時計を見ると一時十五分。五時限目は一時二十分からなので、つまりは予鈴だ。あと五分で授業が始まってしまう。

「あ！ やばい、昼休みがあと五分しかないじゃない！ まったく、くだらない話してて時間を無駄にしたわ！ どうしてくれんのよ！」

……満場一致で僕の責任じゃないだろ。

「私がわざわざあなたに話しかけたのは、こんな意味のない話をするためじゃないの！ もっと大切に有意義な情報を共有するためよ！」

「……有意義な情報？」

「そっ！ つまり——さっき、あなたは南川君とどんな会話をしてたのかってこと！」

バシンツと、南川ばりに僕の机をはたく佐々谷。

何も悪いことをしていないのにさっきから叩かれ続けている僕の机が不憫になりながらも、僕は肩をすくめて、

「……別に、いつも通りだよ。いつも通り、『砂時計』についてさ」「ああ、やっぱいい！」

表情をころっと変え、両の手を胸元で握り締める佐々谷。

「そりゃそうよね。あの南川君がこんな冴えない男と交わす話題なんてそれくらいよね。当たり前前よね」

なんだとこのやろー。

「……うふふ。それにしても、南川君ったら、相変わらず正義感に熱い人よね。そこがまたいいのよ。あの悪を憎む真剣な眼差しにシビれるの」

「……だったら、君も来りゃいいじゃないか。何なら、僕の代わりに参加すればいい。怪盗『砂時計』討伐に、加賀原元はじめの登録名で参加してもらったって一向に構わないよ」

「そんなヤボなことできるわけじゃないじゃない。私はただ、あの人の悪に立ち向かう横顔を眺めてられればそれでいいの。そつと見守っているだけでいいのよ。……ああ、なんて健気な私！」

そんなことを叫びながら、くると舞い踊るように自分の席へ帰っていく佐々谷。

実際問題お前の方がストーカーじゃないのかという僕が呈すべきだった質問は、残念ながら、彼女に届けられる機会をしばし失なってしまった。

第三話「路地裏にて」

僕は、電柱に寄り掛かって体育座りをしていた。

腕時計を見ると、六時四十分。太陽は半刻ほど前に地平の下へ沈んでしまっており、辺りはすでに薄暗い。この付近には民家しか見当たらないせいで、ネオンのような光源がまったくと言っていいほどなかった。おかげで、見えるものと言えば、明かりが漏れている家やマンションの窓ガラスくらいのも——ただ、僕の真上には蛍光灯があるため、この周囲だけは十二分に明るかった。

僕は、とうに一時間以上こうしている。

いい加減、コンクリートの硬い地面のせいでお尻が痛くなってきた。しかしだからと言って、立ったままにいるのもそれはそれで辛い（最初の二十分は僕も立っていたのだが、足が痛くなってきたために地べたに座りこんだのだ）。一体全体何がために僕はこうしているのか自分でもよくわからなくなるが、ある種の諦めのような感情と共に、僕はここで独りへ待っていた。

本日は四月の第四土曜日であり、何の変哲もない週末である。僕も今日は十時まで寝ていたし、朝食と呼べるのか微妙な食事を食べ終わったのは十一時半だったし、その後もだらだらと寝転がってマンガを読んでゲームをしておやつを食べてという日中を過ごしていた。一昨日に僕は十六歳の誕生日を迎えているが、今日は特に何の記念日でもない。本日何か特別なことがあるというわけでもなく、今日を境に何かが変わるというわけではないのである。

しかし巷では、今日という日を少しばかり騒ぎ立てていた。

テレビや新聞や雑誌なんかでは、二週間ほど前から、まるで年末のカウントダウンの如く、今日が訪れることを待ち構えていた。直接の関係者は恐れていただろうし、無関係者はおもしろがっていただろうし、メディア関係者なんかは待ち望んでいたのかもしれない。それぞれがそれぞれの立場で、今日という日を待っていた。そう――

——今日が、怪盗『砂時計』の予告日なのである。

そんなわけで僕は、夕方四時頃に我が家を訪れた南川に、半ば無理やり部屋から引っぱり出されたのだ。

快適なマイルームにしばしの別れを告げ、身銭を切ってここまでの電車賃を払い、美術館の最寄り駅にたどり着いたのは夕方四時半。電車を降りるや否や、さながら福袋目当ての来客が集中した年始のデパートのような人ごみが目に入り、僕は思わずのけぞってしまった。

美術館以外に目立った集客施設もない田舎駅だというのに、やたらと人がごった返していたのである。ここに来たのは初めてだったが、この人ごみが完全なる場違いであることは容易に見て取れた。狭いホームに百人を超える人が立ち往生しており、改札出るのも一苦労だった。おまけに半分以上の人が手に何かしらのカメラを持っていて、彼らの目的がみな怪盗『砂時計』であることは誰にだって一目瞭然だった。

人の波をくぐり抜け、駅から徒歩五分の場所にある美術館の入口にたどり着くと、南川はさっそく、

「よし、じゃあ、お互いの持ち場へばらけよう。……いいか？　ちよつとでも怪しそうな奴がいたら、とりあえずそのカメラに取っておけ。もしそれっぽいと判断できそうだったら、すぐに俺に電話しろ。わかったか？　じゃあ、ほれ、早く行け」

と、僕を付近のマンホール十五個の見回りへとけしかけた。

……というか、南川にこんな命令口調で指示を受けるいわれなんて、僕にはまったくない。あるわけない。いっそのまままっすぐ家に帰ってやろうか——とも思ったが、そうになると、僕がわざわざこんなところまで来た意味がわからなくなる。理由が分からない

くなる。そんなわけで僕は、地図を片手にそれらのマンホールを一通り見て回ってはみたのである。

――が、さすがに南川の言いつけ通り何周も巡回する気にはなれない。

だからと言って南川を独り見捨てるわけにもいかず（明日学校で南川に何を言われるのかわかったもんじゃない）、僕は仕方なく『ここ』に来て、座りこみ、時間が過ぎるのを待っているのである。

さすがに、一時間座っているのは手持無沙汰だった。

携帯ゲーム機でも持ってきてくりゃよかったと後悔したが、先に立たないからこそその後悔であり、帰って取ってくるわけにもいかない。しょうがなく電柱に寄り掛かりながら、僕は手元のパンフレットを見た。

南川が買ってきた、あの美術館のパンフレットである（余談だが、怪盗『砂時計』に狙われた美術館のパンフレットは、予告が公表されて数日のうちには大体完売してしまう。なので、このパンフレットも現在結構貴重なのである）。

表紙にでかかど、黄金色の水差しの写真が載っている。目映い――というよりも眩しいくらいに光り輝いた光沢。その表面には至極微細な白鳥が描かれている。くちばしから尾っぽまで、ぶれることない滑らかな曲線で記された絵。もはやそれだけで、絵画と同じくらいの価値がありそうなものだ。この写真でも、視線を合わせると、僕ですら数秒は目が離せなくなってしまう。

……ここまでのものなら、そりゃあ『砂時計』だって欲しがるだろう。

本物を見た時の感動なんて、これの比ではないだろうし。

残念ながら、僕はその本物を見たことがない。今もまだあの美術館に置いてあるだろうけれど、本日は緊急閉館。チケットを発売していないかった。……まあ、当然だ。本日中に盗難があるっていうのに、悠長に商売なんてしてる場合じゃない。スタッフも警察も、何とかこの水差しを守りきろうと必死に走り回っている最中だ。

しかし恐らく、今日中にあそこからなくなってしまうだろう。

『砂時計』に目をつけられた時点で、それはもはや確定事項。

どうせなら僕も、一度くらい間近で見とけばよかった……。

少しばかり後悔しながら、僕はパンフレットから視線を外した。

そしてそれをカバンにしまいながら、考えを戻す。ついさっきまで僕が考えていたこと。一時間弱、ずっと一人で考え込んでいたこと。電柱に寄り掛かったまま、ずっとふけていた思考。考えに考えに考えていたこと。つまり――

――橡彩さんのこと。

先日佐々谷に言われたことが、思いの他僕の内面に食い込んでいた。そのセリフを一通り反芻してみるが、彼女の言い分を完全に理解できてしまうし、納得してしまうし、反論の言葉が見つからない。反論できない。覆せない。つまるところ、それらの注意と忠告が正しいということ、彼女の結論――『橡彩と僕が結ばれるなんてことは確実にありえない』という結論が、僕をしても〈真実〉で〈現実〉だということに他ならない。

佐々谷の問いかけが、今も耳に残っている。すなわち――

――彼女のため、『僕にできること』があるのか？

――『僕にしかできないこと』なんてあるのか？

そもそも、橡さんのためじゃなくても、僕が誰かのためにすることなんて何かあるのだろうか？ 他人に誇れるようなものがあるのだろうか？ 他の誰にも不可能で、世界でただ一人、僕だけに可能な事象なんてものがあるのだろうか？ そんなものが一つでも存在するのだろうか？

僕は、橡さんのように人を楽しませることなんてできない。南川のように、女子を虜にできるルックスを持ち合わせていない。佐々

谷のように（南川のことは置いておくにしても）筋の通った性格はしていない。鷹野のように優しい柔和な性格はしていない。

じゃあ、他に何かあるだろうか？ 他に何かあるだろうか？ 一体、『僕にできること』は、『僕にしかできないこと』は――

――と、その時、後方から足音が聞こえてきた。

こつりこつりと、等間隔で。焦燥感も倦怠感もない、まるで散歩のような、呑気で優雅な足取りだった。

そして十五歩目を歩み進んだところで、僕の横にのそりと影ができた。

僕は首をわずかに回し、〈そいつ〉の風体を視界の端に捉える――〈そいつ〉は、こげ茶色のジャケットに黒のジーンズ、黒い革靴をぴしりと着こなしていた（光量が光量だけに、正確な色合いまではよくわからないが）。上背が僕より少し高いことや骨格がやや逆三角であることから、〈そいつ〉が男であることも見て取れた。そして、夜だというのにサングラスをかけていた――もちろん服装こそ違っているが、僕はこいつのこの風体に見覚えがある。体格にも、顔の輪郭にも、おぼろげな記憶がある。

〈そいつ〉はふっと僕に気付き、僕を見降ろして、

「……やあ、君、そんなところで何してるんだ？」

やはり、何となく聞き覚えのある声で、そう僕に問いかけてきた。僕は顔を上げることなく、何ともしようないような声音で答える。

「……………出待ちです」

「出待ち？ ……って、誰の？」

「怪盗『砂時計』の、です」

僕の発言に呼応して、〈そいつ〉がひゅうと息を吸い込んだのが聞こえた。そしてグラサン越しにまじまじと僕を見てきて、

「……………どうしてまた、こんなところで待ってるんだ？　〈奴〉が現れるっていう美術館は、もっとずっと西の方だよ？」

言いながら、〈そいつ〉は西の空を見上げる。

「ほら、ここからでも見えるじゃないか。あっちの空がやたらに明るい。警察やら何やらが厳戒態勢を敷いてるせいで、ライトが四方に照らされてるんだ。『砂時計』に会いたいなら、もっとあっちの方に行かないと——」

「確かに、美術館の周辺を張ることも必要なんでしょうが」

僕は半ば強引に、そいつの言葉に被せるようにして言う。

「しかし、それは警察が公共機関であることのデメリットでしかないですよ。今までの五年間、怪盗『砂時計』がどうやって盗みを働いてきたのか、その手法がわかっていない。どう考えても、誰が考えても、どうやって物理的に不可能な犯罪だ。それを一生懸命、物理的に解釈しようと躍起になっている。物理的に解釈しなければならぬ。……本当に、本当に本当に、辛いところですよ」

「……………どういふことだい？」

「怪盗『砂時計』は物理的解釈が困難な手法を用いている———ならば、〈怪盗『砂時計』は物理法則をある程度無視できるんじゃないか〉って前提に立ってもいいと、そう思いませんか？」

僕は視線をかすかに〈そいつ〉の方へ向けた———が、〈そいつ〉は口をへの字にして黙り込んでいる。

僕は構わず言葉を続け、

「……ふふ。そうですね。警察がそんな前提に立てるわけもありますね。警察は公共機関として成り立っている。国、あるいは国民に説明ができないような捜査にお金と人を投入できるわけがありません。そんな非科学的な前提を元に捜査を行えるわけがない。そんなのは考えるまでもないことです」

〈そいつ〉は一向に言葉を発しない。発しようとしなない。

僕はそれを気にすることなく、

「しかし、僕なら——何の責任も咎もない高校生たる僕なら——そういう論拠に基づいた行動をとることができる。……ふふ、逆に言えば、僕なんかにはできないでしょうね。おおよそ、あそこの美術館で盗みを働いた人間が、最も現れるはずのない〈こんな場所〉に網を張る、なんてことは」

暗闇の中、〈そいつ〉が口元にうっすらと笑みを浮かべたのが見えた。

「ここは、あの美術館から一キロも離れている。警察の警備網の範疇外です。おまけに、僕の後方の路地。この先は行き止まり。数年前に潰れた町工場があるだけです。用があつてここに入る込む人なんていませんし、ここから出てくる人ならなおさらです」

僕は唇を湿らせ、話を続ける。

「そして逆に、あの美術館から一キロの範囲内で、ここまで人気がない場所ありません——もし、怪盗『砂時計』に〈他人に気付けられることなくある程度の距離を移動できる能力や手段がある〉としたら、そいつはこの場所まで来るんじゃないか？　ここにたど

り着いて安堵するんじゃないか？ そう考えても、考えすぎでもないと思いますか？ 逆に、怪盗『砂時計』がわざわざ予告状を送りつけるのは、できる限り警備を現場に集中させるため、できる限り一キロ離れたこのような場所から、周囲の視線をそらすため——そう考えるのも、ある意味自然だと思いませんか？」

ちらりと目線を上げ、〈そいつ〉に問いかけてみたが、ノーリターン——僕は仕方なく言葉を繋いで、

「…………ふふ、いや、そうですね。これだって、確率で考えれば、そこまで高いものでもないでしょう。他の可能性だっていくらでもあります。僕も、よくて十パーセントくらいだと思ってました。そこまで期待していませんでした。だからこそ、一緒に来た友人すらここに連れては来なかったわけですからね。もし『砂時計』がここに現われなかったらそいつに怒られてしまいます。『こんなくだけない推測で、折角のチャンスが無駄にさせやがって』ってね。僕はそっちの方が嫌だった。そっちの可能性の方が高いと思っていた。圧倒的に高いと思っていました。……けど、そんな低い確率に賭けることができるのもまた、僕が高校生である特権でしょうね」

僕は自嘲気味に笑いながら、ここでもうやく一息ついた。

僕の斜め後ろに立ち、腕組みして僕の話聞いていたその男は、ふむと頷き、

「で？」

と、尋ねてきた。

「思わず聞き惚れてしまうほどの素晴らしい考察を披露してもらったけれど、それで、君はどうするんだい？ 俺を捕まえるんでもい

うのかな？」

「いえ、別に」

僕は肩をすくめ、何ということもなく答えた。

「残念ながら、僕は運動神経がからつきしでしてね。スポーツテストでブービーを取ることが高校三年間の目標になってるくらいです。なので、力づくであなたをどうこうすることはしませんし、できません」

僕は再度、とすりと電柱にもたれかかる。

「他の誰かにこの考察を放してみたところで、それを証明することはできません。証拠がありません。それは即ち、あなたを捕まえるための助力を得られないということ。手段を集められないということです。……僕にあなたを捕まえることは不可能です。なので、どうぞ、このままご自由にしてください」

「そうかい、そりゃよかった」

その男はふふっと笑うと、再びすたすたと歩き出した。そして、六歩ほど進んだところでくりりとこちらを振り返り、

「……なるほどねえ、確か〈それ〉は、見覚えがある服装だよ。何となくだけど、合点がいった。……ふふ。それじゃ、さようなら。五月とはいえ、夜はまだ寒いから。風邪を引かないようにね。それじゃあ、また会えるといいね」

そう言って、〈そいつ〉は住宅街を歩き去っていく。周りが暗いせいで、その後姿はすぐに見えなくなってしまった。

「……ふー」

僕はため息をつき、電柱にもたれかかる。もたれかかりながら、顔を夜空へと向ける。三日月はかろうじて見えたが、星は見えない。空が警察の照明に照らされているせいだ。

僕はよっこらせと立ちあがった。そして、あの男が去っていった方向を見やる。見やりながら、思う。

『僕にできること』とは何か？

——怪盗に出会えること、くらいだ。

第四話「テーマパークにて」その一

例えば、林間学校の帰りに遊園地のようなテーマパークで五、六時間遊ぶ機会があったとして、園内にはアトラクションが数え切れないほどあるにも関わらず入口の建物にあるゲーセンで丸一日ゲームに興じるような人間も学年に一人くらいはいるものであり、この羽根鳥高校第二学年においては、何を隠そう、僕こそその立場を担っているのである。

別に、ナンセンスなどとは思わない。

ゲーセンだって立派なアトラクションだ。僕もしっかりとアトラクトされるのだ。それなら近所のゲーセンに行けばいい入園料が無駄になるじゃないか——というツツコミもどうでもいい。高校生にとって学校行事は強制であり、その強制力の中でいかに人生を楽しむかという選択した結果、こうなるのだ。僕はしっかりと最善の策を弄している。人生を楽しむために百二十パーセントの力を出し切っているのである。後悔も戸惑いも何もない。

そんなわけで、その日の僕は気合が入っていた。

この日のためにストックしておいた百円玉の山をポケットに忍ばせてあるし、皮製のマイグロブも持ってきた。おまけにこの遊園地内での班分けでも、僕は他の仲良し四人組に無理矢理一人だけ交ざるということになっている。すなわち、僕が一人班から離れても、告げ口をするような人間はいない。かくして、この五時間をフルにゲーセンに使う準備は万端なのである。

そんな僕は、入場口で付き添いの先生方の注意事項を聞かされた後、皆と同様に中に入るような振りをしながら、教師陣のマークが離れたことを感じてから、真っ直ぐ急ぎ足でゲーセンへと向かった。これは時間との戦いでもあるのである。一分一秒も無駄にはできない。

途中、鷹野と並んで談笑しながらウキウキした表情で観覧車へと

向かう橡塑さんを見て（そう言えば二人は同じ班だった）そのデートでも思わせるような情景に少々気分がブルーになったり、あるいはトイレに寄るところだったのだろう南川に

「おい、加賀原、明日、昨夜の反省会やるからな」

と釘をさされて思い出したくもない明日の予定を思い出してゲンナリしたりもしたが、それでも何とか胸に湧き踊っている闘志をくすぶらせることなく、僕は筐体の密集している楽園^{パラダイス}へとたどり着いた。

建物内に入り、中の筐体を一通り見回してみると、僕の日頃の行いの良さ及びゲームにかける情熱をゲーセン神様も認めてくださったのだらう、僕の目当てのゲームがしっかりと導入されていた。なので、僕は通路から死角になっている場所を選び、腰を構え、「いざ！」と投入口へと百円玉を流し込んだのである。

——それからの戦いは、それはそれは過酷を極めるものだった。

今までまだ使ったことがなかったキャラを使いこなすことを本日の目標に掲げていたのだが、そいつがまたやたらに機動性が悪いもので、さらには技のコマンドも複雑かつ困難なものばかりだったものだから、モノにするどころかバトルに勝利するのすら一苦労だったのである。特に後ろ斜め下から前へのレバーの回転が、この筐体の反応が悪かったという部分もあっただろうが、やたらに利きが悪く、それだけでこっちはミスを誘発されて結構不利——（中略）——比較的一撃一撃のダメージは大きいのだが——（中略）——どんな攻撃も当たらなければ意味もなく、逆に下手をすればこっちがサンドバック状態に陥ってしまう。敵が空中戦を得意としている場合はなおさ——（中略）——こんな奴を使いこなしたところでこの先何かいいことがあるなどとは微塵も思えず、つまりは一度こいつの

エンディングを見ればそれだけで用が済んでしまうようなもので、強いて言うならこいつの弱点を見出しておけば敵として相対した時にいくらか有利に勝負を運ぶことが――

「――あら？　あなた、こんなところにいたの？」

眼前の勝負に専心している僕に精神に、氷水を差すような声がかつてきた。その主は顔を向けるまでもなく声だけで十分判断できるもので、つまりは佐々谷響子である。

僕は画面から顔を上げることなく、

「……ああ、そうだけど。何か文句でもあるのか？」

『オラァ！　オラァ！　業火蹴りい！　オラララァ！』

「……見ての通り、今の僕は武の道を極めんとする強敵達としてのぎを削ってる最中だ。だから、あまり声を掛け――」

「呆れるのを乗り越して、もはや感動すら覚えるわね」

佐々谷は僕の言葉を颯爽と無視し、銀縁眼鏡をくいと持ち上げながら、隣の椅子にどっかりと腰を降ろした。

「折角のクラスメイトとの遊園地だったのに、一人でこんなところで遊んでて、虚しくないの？」

「……うるさいな。虚しくなんかないよ。僕だって十分楽しんでる」

『オラァ！　灼熱落とし！　業火蹴りい！　業火蹴りい！』

「楽しんでる？　……ふん、まったく、今頃彩は、鷹野君と二人仲良くコーヒークップでも乗ってるのかもねえ」

『オラァ！　……ぐふう！　オ、オラァ！　オラララァ！』

「おっと、そろそろお昼の時間ね。ってことは、二人でランチでも食べてるのかしら？　デザートなんか食べてるかもね。アイスを二人で半分ずつ食べたりにして」

『オララア！ 業火げ……ぐふう！ オ、オラア！ ぐふう！ ぐふう！』

「もしかしたら、二人の仲が縮まりすぎて、ラブラブに手を繋いだりもするのかもね。そして、そのまま一緒にお化け屋敷に入った」

『ぐふう！ ぐふう！ ぐふう！ オ、オラ……ぐふう！』

「お化けに驚かされて、思わず彩が鷹野君にしがみついたりして。彩もあれはあれで見てくれは悪くないからね。あんな真っ暗な場所でそこまで近づいたら、その先どうなることや」

『ぐふう！ ぐふう！ ぐふうう！ ぐ、うわあああああ！
！ ——ユー、ルーズ！』

「この遊園地を出る頃には、二人の間には昨日までなかった感情が芽生えてて、帰りのバスでも——」

「——う、うるっさいな！」

僕はコンテニューのカウントダウンを写している筐体をばしんと叩きながら叫んだ。

「な、なんなんだよ、もーっ！ どこで何しようが僕の勝手だろう！
！ いっつもいつも僕に絡んできては、テンションが下がるようなことばかり言って！ 何っ？ そんなに僕の心を折りたいのかわ？
まさか、君が僕に気があって、ヤキモチでも焼いてるってオチじゃ——」

——ガシィッ

いきなり、僕は襟首をつかまれた。おかげで、続きを発声できなくなる。

ぎちぎちと僕の首を締め上げている佐々谷は、ロングヘアーをわざわざ逆立て、邪神のごとき冷笑を浮かべながら僕を睨みつけてきて、

「――あのね、世の中にはね、笑って許される冗談と、死で償うまで許されない冗談ってのがあるの。覚えておきなさい……」

「す、すいません……」

僕は、それだけ喉から搾り出すのが精一杯。

佐々谷はようやく僕の気管支を解放してくれて、

「そうじゃなくて、単に、私はこれでも結構な友達思いつてことよ」
「……どういふことだ？」

「あなたのその恋心なんて、『口下手な男が、自分にも分け隔てなく話しかけてくれる女の子に、自分に気があるんじゃないかって痛い勘違いをしてる』っていう、ありがちなダメパターンでしょうに。そんな無益な災害で、友人を被災者にできないわよ」

ぐさりという、胸に深々と刃物が刺さったような効果音が聞こえてきた。

「何かの拍子に彩まで勘違いしちゃって、あなた達が結ばれるようなことになったら、彩にとっては人生転落の危機以外の何ものでもないわ。あなたを彩の部屋に連れて行った時の、あなた達のノリの合わないやり取りを見て確信したわよ。こんな何のとりえもない人間と結ばれて幸せになれる女性なんて、アリンコのメスまで探したっていやしないって」

……なんか、もう、生きるのが嫌になってくる。

「大体、彩も彩で、あの性格は世界中を探し回ったってあの子だけのだからね。珍獣みたいなものよ。希少価値はあるけど、決して真っ当に評価されるようなものでもないの。つまり、あなたにしても、

犬にかまれたようなものなのよ」

珍獣って……。僕の想い人をそこまで言わなくてもいいだろうに。大体、君にとっても友人じゃないのか？

「そんなわけで、あなたのその幻想はさっさと忘れるのが世のため、人のため、私のための。不幸坂を転がり落ちていく友人なんて見たくないのよ、私は。わかった？　というか、わかっておきなさい」

そんな捨て台詞と共に立ち上がった佐々谷は、ようやくゲーセンから出て行ってくれた。

第四話「テーマパークにて」その二

佐々谷のスピリチュアルアタックによるダメージから立ち直るのにいくらか時間を要したが、しかし三十分後には僕の気分も何とかニュートラルに戻った。

前述のキャラのエンディングも先ほど見れたし、そろそろ僕もお腹がすいてきたので、ゲームを一時中断、レストランにでも行こうと立ち上がった、そんな時だった。

『チャレンジャー、カミン！』

いきなり、目の前の筐体がロック調の効果音を奏で、こちらを挑発してくる女性キャラが画面に映し出された。

「……やれやれ、この僕に挑戦とは、ね。今までの僕の戦闘を見ていなかったのか？ ふん、まったく………この身の程知らずが！」

僕は呟きながら、再度椅子に腰を落ち着けた。そして姿勢をただし、構え、ボタンの連打を開始したのである。

――が、

「あ、悪魔か……！」

三分後の僕の口からこぼれたのは、そんなセリフだった。

今まで僕は何百戦もの試合を経験しており、各地域で名を馳せるプレーヤーとも拳を交えてきたのである。負けることもたまにあったが、しかしそれはすべて紙一重の差。彼らとも、それほど大幅な実力差はなかった。これらの戦績からして、僕の実力も国内トップクラスであることを自認しており、そして僕に簡単に勝てる人間な

どいやしないということをや心の底から確信していたのである。

しかし、この挑戦者は、僕に何もさせることなく勝利を収めてしまった。

小さな隙を見逃さずについてきて超必殺技を打ち込んでくるし、その後も簡単にコンボをつなげられてしまう、逆にこっちの攻撃はすべてガードされ、さらにはこちらのコンボは簡単に崩されてしまう。手も足も出ないという表現を最初に考案した人物はもしかしたらタイムトラベルでこの時代に来てこの試合を見て思いついたんじゃないかとさえ思えるほどの僕の負けっぷりだった。

目の前につきつけられた現実を受け入れられぬまま、今だわなないている膝に力を入れて立ち上がり、僕は向かい側に座っているこのチャレンジャーの容姿を視界に入れた。

その人は、

「……あっははは。まだまだ甘いねえ」

有名ハリウッド俳優並みのハードボイルドなニヒル笑いを浮かべている――

――橡彩だった。

「く、橡さん！ な、何でここに！」

「いやあ、ちよつとね」

立ち並ぶ筐体を回り込んでこっちにやってきた橡さんは、鼻を斜上に持ち上げながら、

「……しかし、ふふん、わざわざこんなところに入り浸ってるから、どれほどの腕前かと思えば、その程度とはね。少々期待外れだったかな」

「……………くっ」

「はん、才もなく、せいぜいの努力を積み重ねてもその程度の実力とは。何と虚しい人生か。あたしなら、そんな生き方は全力で却下だけれどね。自殺でもしてしまうかもしれない。あっははははははは」
「……………お、おのれえ、貴様」

僕は歯軋りしながら呻いた——が、想い人に「…………お、おのれえ、貴様」とかいふセリフを吐く男は一体どうなんだという部分に僕はようやく気付き、気を取り直して、

「……………というか、橡塑さん、何でこんなところにいるの？ 他の班員は？」

「いや、それが、ちょっとはぐれちゃってね。仕方なく一人でぶらしてたところなんだよ。あっははははは」

……………はぐれた？

いやまあ、確かに園内は結構広いし、今日はなかなかの人数が来場している。はぐれてしまうことも無きにしも非ずだろうが、いくらにはぐれたって、橡塑さんも鷹野も携帯は持ってたはず。あれだけ仲がいい二人だ、お互い番号も知ってるだろうし（僕は知らないんだけれど）、連絡を取り合って落ち合えばいいだけの話だ。簡単に解決できる問題である。それなのに、一人でぶらぶらしてたって——

「……………ねえ、橡塑さん、まさか、まさかだけど……………君、もしかして班から『追い出された』んじゃない？」

「それでトイレに行こうとそこを通ったら、ちょうど加賀原が見えたじゃない？ 何してるのかなあって覗いてみたら、一人寂しくゲームなんてやってたもんだからさ、あたしが構ってやろうと」

「ちょ、ま、まさか、本当に見放されたの？ ってか、それって、鷹野君にまで見放されたってことだよな？ それって——」

「ほら、あたしって、和を大切にする女の子じゃない？ 悲しんでる人を放っておけないタチじゃない？ だからさ、あんたのことを見捨てておけなくて」

「だ、だって、鷹野君って言ったら、世界の人の良い人間トップ100を集めて煮詰めてろ過して固めたような性格の人だよ！ 大概のことを笑って流してくれる人だよ！ そんな人に見捨てられるって、椽さん、一体彼に何をし——」

「わかってる、わかってるから、加賀原。強がってるけど、本当はあんたも寂しいんだよね？ 誰か構ってくれる人が必要なんだよね？ だから、お姉さんが一緒に遊んであげるから。安心してつきなっさい」

「一体、鷹野君達に何をしたんだああああ！」

そんな断末魔と共に、僕はずるずると引きずられながら、園内へと連れ戻されていったのである。

第四話「テーマパークにて」その三

さて。

その後の一時間、一体僕の身に何が起こったのか、なぜだか僕はまったく思い出せなかった。思い出そうとすると、僕の頭に黒いモヤがかかったようになり、記憶が一つも掘り起こせなくなってしまうのである。……まあ、「忘却こそが人が幸せに生きるための最重要なツールである」とかいう話も聞いたことがあるし、僕の脳もよくできているんだなあという神秘的な感動と共に、僕はあまり深く考えないことにした。

一人ふらふらと売店脇のベンチに向かう途中、地上二十メートルのところから一気に落下するアトラクションが視界に入った際、なぜだか僕の体が勝手にガタガタと震えだしたのだが、これは一体なぜだろうか？　もしかしたら、その忘却の一時間と何か関係があるのだろうか？

とにもかくにも、今まさに乗り込んでいる人たちに、たとえ係員が安全レバーをきちんと確認してくれていても隣に座った傍若無人な奴が勝手に安全レバーを持ち上げていないことを確認するまでは決して安心しないように、というわけのわからない助言を心に浮かべながら、僕はベンチに腰を降ろした。

「……はあ、やれやれ」

何だか命の危機をすんで乗り越えた後のような、そんなくたびれきったため息が僕の口をついて出てくる。何でここまで精神的に疲れているのかはやはりよくわからないが、いずれにせよ、僕が疲れているのは確かだ。

椽さんは現在、ブランコのようなものに乗せられて空中をぐるぐる回るアトラクションに夢中になっている最中である。僕が分かれ

た時点で四回目を並んでいたが、あの分じゃああと十数回はチャレンジするだろう。あと数十分くらいはここでゆっくりする時間があるはず。

「……生きてるって、すばらしいなあ」

なんていう、これまたわけのわからない悟りを眩き、言い知れぬ安堵感に包まれながら、ふうと嘆息する。そして気分がようやく落ち着いてきたところで、周りの喧騒を他人事のように眺めながら、どさりと背もたれに体重を預けた。

眼前には、売店の棚が並んでいる。

店内には、お菓子やキーホルダーが所狭しと並べられていた。そうだ、記念にお土産の一つでも買って行こうか———と思ったところで、ふと、棚の中段に並べられた商品群が目に入った。手のひらサイズの置物が十個近く並んでいる。値札は八百円。少しばかり高いなあ、と思ったそのお土産は———

——砂時計。

イルカの造形があったり、あるいは蛍光だったり、様々な種類がある。こういう観光地では売店にあまり立ちよらない性質なので知らなかったが、こうやって改めて眺めてみると、そのバリエーションは本当に多彩だ。多彩すぎて、どっちつかずな性格の僕では相迷ってしまうだろう。土産選びで何十分もかけてしまう人たちの気持ちもわからないでもない。

——しかし、

しかしやはり、この「砂時計」というワードを心に浮かべた際、僕の中に沸き起こってしまう思考は、どうしても先週の日曜のことになってしまう。住宅街のT字路で出会った人物。

怪盗『砂時計』

その日、僕は人生二度目の邂逅を果たしたわけだが、彼は一体僕のことを覚えていたのだろうか？ 去り際、あいつは僕の服装に見

覚えがあるようなことを言っていたが……あの頃と昨夜、何か同じ服を着ていたんだろうか？ 正直、前回のときのことはよく覚えていないため、整合のしようがないんだけど。

……とはいえ、彼は微妙にもったいぶったような言い方をしていたために、彼が本当に怪盗『砂時計』であるという確証は、残念ながら持っていないのだ。証拠はまったくくないのだ。彼がわけもわからず僕の話に無理やり乗っかってきた通りすがりの一般人である可能性も否定できないのだ。

——しかしまあ、僕自身は確信している。彼こそがこれまで五年間様々な美術品をかつさらっている怪盗であり——そして先週もまた、一千万程の値打ちがある宝石をまんまと美術館から盗み出した張本人であること。あんなタイミングで偶然通りかかった人がそんなトーキングスキルを有している可能性の方が、明らかに低いだろう。

正直、彼が実際に使っている手法というものを知りたいという欲求もあるのだが、それを知ることとはやはり困難だろう。なんせ、それがばれてしまえば、彼の生業も今までの成果もすべておじゃんになってしまうのだ。彼がどんなにお人好しだったとしても、教えてくれるとは思えない。本当に知りたければ——やはり、彼を捕まえなければ。

次また南川に連れだされることがあれば、今度はそれを目標にしてみるのもいいのかもしれない。昨夜のことを南川に言うとなんを言われるかわかったもんじゃないので言えないし、言う気もない。なので、あいつの助力を請うことはないだろうけど、それでも独りで

「——加賀原？」

僕は思わず体をびくつかせ、背後の壁に思い切り後頭部をぶつけ、悶絶しながら頭をさすりながら目に涙を浮かべながら首を回すと、

「何やってんの」

と、腰に手を当て、あきれ顔を僕に向けている橡彩だった。

「もーっ！ あんた、いつの間にかいなくなってるんだから！ 左に座ってた人に『あと何回乗る？』って聞いたら、見ず知らずのおじさんでびっくりしたよ！ まったく！ せめて一言言ってきなさいよ！」

腰に手を当て、頬を膨らましながら言ってくる橡さん。

腕時計を見ると、文字盤は現在時刻が二時半だと言っている。つまりは、僕がドロップアウトしてからゆうに二十分経っていることになる。その間自分が取り残されていることに気付かない橡さんにも幾ばくかの責任はあるんじゃないかと思いつつも、

「……いや、悪かったよ」

と、殊勝に謝った。

「で、あのアトラクションはもう気が済んだ？ だったら、少し喫茶店で休憩でも——」

「さ！ 次行くよ！ 次！」

そう言って、僕の肩の服を握りしめて歩き出す橡さん。
僕はよろけながら、

「次って、ど、どこ行くの？」

「お化け屋敷」

椽さんは歩みを止めることなく首だけ回し、にたりという効果音が聞こえてきそうな笑顔を僕に向けてきた。

「あんた、そういうの苦手そうだからね。あたしが直々に特訓してあげるよ。さっ！ ついきなっさい！」

第四話「テーマパークにて」その四

その後の展開は、僕にとって驚愕だった。

この遊園地のお化け屋敷は国内でも三指に入ると言われるほどのもので、禍々しい雰囲気漂うその洋館に初めて相対した時には、僕自身も血の気が引いてしまったほどだった。これまで三つほどお化け屋敷というものを体験したことがある僕だったが、これほど近寄りがたいと思ったものは今までなかった。

正直腹痛でも訴えて逃げ出そうかとも思ったが、先刻のようにそっと離れようにも、なぜか橡塑さんはずっと僕の袖口を握りしめている。その握力たるや、まるで手錠のようだった。おかげで僕は飲み物を買に行くことはおろか、列からはみ出すことすら許されなかった。

結局僕は逃亡を泣く泣く諦め、橡塑さんと共に列に並ぶこととなった。そして十五分ほど待ち（その間、橡塑さんは自身が今までどれだけの数のお化け屋敷を攻略してきたかということと、とくとくと僕に語りかけてきていた）、元々ピンクだったことがよく見ないとわからないほど黒ずんだドレスに身を包んだもぎりのお姉さん（ご丁寧）に青白いメイクまでしている）にチケットを見せ、いよいよ僕たちもその洋館の中へと入って行った。

ぎい、ぎい、という、わざとらしいとすら思えるほど大きな音を立てて大きな木製ドアを開き、僕たちは真つ暗な通路に降り立った。そして一步目を踏み出したところで、急に——ボタンツとドアが閉じられた。思わずその音に飛び上がりそうになったが、僕は何とか叫ぶのを我慢して、再度前を向き直した。

しかし、前が全く見えない。

外からの光が完全に遮断されているのである。目が慣れてきた頃合いで、ようやくと足元がかるうじて見えるくらいだ。これじゃあ進行方向すらわからない。

僕は慌てて入り口で渡された懐中電灯を点け、斜め後ろを振り返り、

「じゃ、じゃあ、行こうか、橡塑——って、え、ええ？」

僕は驚いた。

三秒前までそこにいたはずの橡塑さんが、なぜか見えないのだ。首を百八十度回してみたが、周囲に人っ子一人見当たらない。これは橡塑さんの悪戯なのかそれとも何かの演出なのかと思ったが、視線を床に向けて、見つけた。

そこに、丸まった背中があったのである。

ダンゴムシだってここまで丸くなれないだろうと言うぐらいに屈み込み、膝を抱え、肩を震わせている女性。その服装（水色の長そでTシャツ）とぴよこつとした一本縛りの後ろ髪からして、明らかにそれは橡塑さんだった。

「……く、橡塑さん？」

僕は呼びかけながら、そっと肩を叩いた。途端、

「ひっ……な、何するのよ、加賀原」

顔を上げ、首を回し、うつすら涙を浮かべた瞳で僕を睨みつけてくる橡塑さん。

「……な、何って、ほら、お化け屋敷始まったから、は、早く進まなきゃ」

「わ、わかってるよ！」

震える声でそう言いながら、橡塑さんもゆっくり立ち上がった。そ

の表情はやたらに険しく、頬は引きつりっぱなしだ。

「じゃあ、行くよ？」

そう言って、僕は懷中電灯を握り直して再度歩き出した。

木製の廊下をぎしぎし言わせながら、歩いていくこと十数メートル。ボロボロの窓枠の横を通りかかったところで、急に――

――びかつ

窓が光った。

前方ばかり気にしてた僕は不意を突かれ、思わず後ずさってしまった。後ずさった後、窓を見直し、それがトラップの一つであることを理解した（つまりは、雷の時のように窓を光らせて通行者を驚かせるという、雰囲気作りのためのものだろう）。

「……び、びっくりしたあ。……たく、さすがうまくできてるもんだねえ」

僕は早くなった鼓動を落ち着けながら、

「最初からこれほどとは。この後どれだけのものがあるか、ほんと怖いよねえ、橡さ――」

くるりと後方を振り返った――けれど、またも、そこに橡さんが見えない。

視線を落とすと、やはりそこにはダンゴムシ。

「もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理――」

さっきより余計に縮こまりながら、呪詛のようにぶつぶつ言う橡塑さん。

「……ちょ、ちょっと、橡塑さん、ほら、立ってよ。早くしないと、次の人に追い付かれちゃうよ」

「もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理――」

「ちょっと、ここに行こうって言ったのは橡塑さんでしょう？ お化け屋敷、得意じゃなかったの？」

「もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理――」

「ねえ、ねえってば、早く、早くしないと」

「もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理、もう無理――」

橡塑さんは丸まったまま震えるばかり。僕の声なんか聞いている素振りもない。

その後五分間ほど説得してみたが、一向に橡塑さんは立ちあがる気配はなかった。なので僕は仕方なく、橡塑さんの襟首を捕まえて、彼女を引きずって出口に向かうこととなったのである。

おかげで、僕にはもはやアクションに驚いている余裕なんてなかった。途中、追い付いてきた後発グループの中の数人にお化けと間違われて発狂される始末だったが、そんなのを気にしているどころでもなかった。もっと言えば、引きずっている最中、伸びた橡塑さんの襟と首の間から水色のレースの布切れが僕の視点から丸見え

だったのだが、それすらも問題にしている余力はなかった。

結局、一時間近くかけて、僕はどうかこうにかお化け屋敷から
椀さんを連れ出したのである。

「いやーははは。ちよつとお腹が痛くなっちゃってね」

お化け屋敷から連れ出して十分後、自販機の横の木製ベンチに腰
掛けながら、椀さんはいつもの大音量で言ってきた。

「いやー、あたしがあのお化け屋敷をどれだけ優雅に軽やかにクリ
アーしていくのか、お手本を見せてあげたかったんだけどねえ。い
かんせん、タイミングが悪かった。まさか、あのタイミングで持病
の癩が発症するなんてね。本当、あんたもついてない。あつははは
は」

そう言いながら、いつも以上に高らかな笑い声と共に僕の肩をば
んぽんと叩いてくる。

僕は缶コーヒーをすすりながら、「ははは……」と愛想笑いをす
るのが精一杯だった。腕といい肩といい足腰といい、椀さんを数百
メートルにわたって引きづり続けたおかげで、ぴきぴきと痛いので
ある。もはやこれ以上他のアトラクションにかまけている余裕なん
てないし、どころか僕は今日ちゃんと我が家にたどり着けるのかさ
え不安なのだ。

僕はハアと肩を落とし、

「……まあ、いいや。……とにかく、椀さん、もう充分楽しんだで
しょう？ 集合時間まであと一時間もないし、どこかの休憩所でゆ
っくりとし——」

「なにい！ あと一時間しかないのかっ！」

橡さんは突然叫び、自身の腕時計を見た。そしてがばりと僕に真顔を向けてきて、

「しまった！ このままではデザートを食べ損なってしまう！」

「……デザート？」

「ああ！ 最後まで食べ残してたんだ！」

橡さんは僕の袖口をむんずと掴むと、有無を言わず僕を引っ張り出した。

「ちょ、ちょっと、橡、さん。どこへ連れていく気？」

「もちろん、デザートの在りかだよ！」

僕をずりずりと引きずりながら、首だけ振り返ってくる橡さん。その表情は犯行現場突入前の警官隊のような真剣な表情。そして腕を振り上げ、前方をぴしと指さし、

「ジェットコースターだ！」

その一時間後、集合時間を五分ほど遅刻した時刻に、僕と橡さんは集会所たるテーマパーク入り口横の広場にたどり着いた。

僕たち二人がここにたどり着いた最後の人員であり、他の同学年全員と先生方はすでにその場にいて、僕たちの帰りを眺めていたわけだが、その際、少しだけその群集にざわめきが生まれたそうである——それというのも、帰ってくる際、僕と橡さんは肩を寄せ合い、お互いしな垂れかかるように密着しながら、まるでカニが前進歩行を覚えたかのように帰ってきたからだ。

それまで教室でだってほとんど話していなかったこの二人が、遊

園地で遊んでいる間にここまで接近したのか、と思われたそうだ。

しかし、その真実は何のことはない。橡塑さんが調子に乗ってジェットコースターに連続で何回も乗り（途中からはタイムトライアルのような体になっていた。もちろん、僕もそれに付き合わされたのは当然だ）、二十回目を終えたところで急に気分不良を訴え始め、足元が覚束なくなり、まっすぐ歩くことすらできなくなっていた。しかしだからと言って集合時間に遅れるわけにもいかないので、僕がすでに辛い体に鞭打って、橡塑さんを横から抱えながらどうにかパーク入り口までたどり着いたということなのである。

途中から僕も貧血気味になり、視界がチカチカしていたので、その時の他の人のリアクションはよく覚えていなかった。そこから自分がどうやって帰ったのかさえ、あまり覚えていないというのが正直なところだ。

第五話「橡彩宅にて？」その一

また聞きの話だが、林間学校から帰ってきた次の日の朝になんかは、クラスの中で、僕と橡さんの仲を勘ぐるような噂も立ったようである。もちろん直接僕にそれが伝わってくるようなことはなかったけれど（そこまで心安く話せる人間がクラスにいなかったというのが一番の原因だったかもしれないが）、「あの二人ってそんな仲良かったんだっけ？」とか「確かにあいつら、最近よく話してるけど」とか「そういやこの前、二人並んで下校してるとこ見たなあ」とか、そんなありきたりかつ曖昧な会話が（僕の預かり知らぬところで）繰り返されていったそうだ。

これは、僕には少し意外だった。

元々橡さんは大勢の男子とも仲が良く、男とどこそで二人きりになろうが、そんなことはまったく気にしない人である（僕をいきなり自室に引っ張り込んだのがいい例だ）。彼女が誰か男と二人で歩いていたらと言って、それは大して珍しい光景でもない。今更そんなことで噂が立つなんてどういうことだろうと思っていたのだが、聞くところによると——その相手が僕だった、というのが意外だったらしい。

クラスの団体行動の際も割と独りでいることが多い僕だったので、そんな男が誰か女子——しかも、あろうことかの橡さん——と二人でテーマパークを回っていたというのが注目を集めたそうだ。これかもしれない。僕だからこそのセンセーションだったのだろう。このことから、僕の客観的評価というものが伺い知れて、僕は少々気落ちしそうになった……。

けれど、それはさておき、だ。

内容に関して言えば、そんな噂をされて、当人たる僕は、正直なところ——何となく嬉しかった、というのが本音である。

たとえ絵空事に過ぎないとしても、仮定の話でしかないとしても、
椽さんの名前と僕の名前が並べられるというのは、僕にとって決して嫌なことではない。もしかしたら僕と椽さんと釣りあうかもしれない、という可能性があるということなのだ。この噂を耳にして、本当に自分と椽さんが付き合うようになったらどうなるだろうかということを僕が空想しなかったと言え、嘘になる。つまるところ――僕は、儚くも淡い期待を抱いてしまっていた、ということだろう。

けれど、やはりというか、その噂も永くは続かなかった。

その日の午後にはすでに下火になっていたし、次の日にはそんな噂が立ったことなんて皆に忘れ去られていた。椽さん本人や、あるいはその班員がちゃんと事情を説明しただろう。それに、椽さんの相方は鷹野であるという意見が一般的なのである。今さら僕なんかで上書きされるとも思えない。

少なくとも見てくれだけで言えば、並んでしっくりするのは誰がどう見たって鷹野の方だ。それだけは、僕にだって否定できない。僕が椽さんと並ぶことなんて、客観的に見てもあり得ないということなんだろう。恐らくツーショットで写真を撮ったとしても、切り抜いて張り合わせたようにしか見えないことだろう。僕と椽さんが並ぶなんて言うのは、結局は仮定の話でしかなかったということなんだろう。

そんな現実を改めて思い知らされ、改めて僕はブルーになってしまっていた。

おまけに、昼休みに鷹野がとこと僕の方に近づいてきて、

「いやあ、加賀原君、悪かったね。僕らが椽を置いて行ったばっかりに、君に迷惑かけちゃったみたいで。本当ゴメン」

と謝られて、何とも腹立たしかった。

何だか、椽さんの隣には自分がいることが当然だと言われてるよ

うな気がした。僕が隣にすることがミスカストだと言われているような気がしてしまった。もちろん、鷹野は根っからの善人で、心の底から僕に詫びていたのだろうが——その心底にそういう前提があったことは、やはり彼にも否めないだろう。

おかげで、僕はイライラしたような、しょんぼりしたような気分です。その後の一週間を過ごすことになった。あつという間に日々がつまらなくなり、未来がナンセンスなものになり、刻々と時間を潰すのが億劫になっていた。

このダウンー期間が一週間で済んだのは、思いがけない好機が僕に訪れたからである。

林間学校から帰ってきてから七日目の放課後、僕が帰り支度をしているとき、椽さんが僕の席に近づいてきて、

「加賀原、あんた、今日これから暇ある？」

と聞いてきたのだ。

僕が半ば驚きながらも、

「え？ あ、ああ、うん。あるけど……」

と答えると、椽さんは肩を落とし、安堵したような表情になって、

「よかった。実は、明日の古典の宿題、わけがわからなくてさ、困ってるんだよねー。おまけに、明日はあたしが指される番だからさ。ピンチで。だから、お願い、宿題見せて？ ちゃんとウーロン茶ご馳走するから」

と言ってきた。

僕は、

「え？ ……あ、ああ、うん」

と、まごつきながら答えるばかりだった。

第五話「橡彩宅にて？」その二

これで二度目の橡宅訪問だが、前回と違うのは、今回は佐々谷が同行していないことだ。

どうやら、佐々谷はすでに部活の友人に見せてもらっており、準備は万全らしい（それに、明日は佐々谷が指される番ではない）。なので、僕の古典のノートを必要とするのは橡さんだけであり、本日の僕は、橡さんのためだけに彼女の部屋にお邪魔したのである。

橡さんに促されるまま、前回以上に緊張した心持ちで、

「お、お邪魔します」

と、橡さんに続いて玄関に上がった。そして靴から出されたスリッパに履き替えた———ところで、

「ああ、ねえさん、お帰りなさい」

と、初めて聞く声が聞こえてきた。

驚いて顔を上げると、廊下に一人の女の子が立っていた。

背丈は、僕より頭一つくらい低い。服装は僕が通っていた中学の女子用セーラー服。ストレートの髪を赤い髪留めで二つに分けていて、その顔は落ち着いた印象を受けるような澄んだ造り———けれど、パツと見て、明らかに橡さんと似ている。橡さんの四、五年前の写真を見ているような気になる。どこからどう見ても、佐々谷の話にも出ていた、橡さんの妹だろう。

その橡さんの妹は、姉に挨拶をした後、僕に焦点を合わせ、そのままピタリと固まってしまった。口を丸く開け、目を見開き、まるで雷にでも打たれたかのような、信じがたい現実をつきつけられたかのような、茫然とした表情。

その変化に小首をかしげながらも、椽さんは何ともなしに、

「ああ、こいつはクラスメイトの加賀原。ちょっと宿題見せてもらうの」

と僕を紹介した。

その説明ではっと我に返った妹さんは、

「え？ あ、ああ、クラスメイトですか。そうですか。そうですね。そりゃそうですね。ねえさんに、こんなまともな彼氏ができるわけないですもんね。そんな日が来たら、世界が滅んでしまいます。いやあ、あたししたら何てイタイ勘違いを。恥ずかしいったらありはしない」

「……なんだとこのやろー！」

「それじゃあ、まあ、後でお茶でも持っていくます」

そう言って、妹さんはリビングの方へ入って行った。

椽さんは「まったくもうっ」と不機嫌そうに唸って、

「さ、行くよ」

と階段を上って行った。

どことなくどぎまぎしながらも、僕もその後について行った。

前回同様、棚と言う棚がマンガ本とゲームのケースで埋め尽くされた部屋。壁際の洗濯物の山も相変わらずだ。まったくもって片付いた様子もない—————というか、前回よりも床の見える面積が減っているような気がする。……もしかしたら、今なおこの部屋は発展（というか、悪化の）途上なのかもしれない。来年のこの場所が

一体どんな状態になっているか、想像するだけでそら寒かった……。そんなイメージしても損なだけの想像をぶんぶんと振り払いながら、僕はペットボトルとお菓子の空箱の間にどうにか自分が座るスペースを見つけ、とすりと床に腰を下ろす。そしてカバンからマイノートブック取り出して、

「はい。じゃあ、これ、古典のノート」

と、テーブルの上に置いた。

しかし橡さんは床には座らず、カバンを肩から降ろしながら、

「あ、ちょっと待ってて。冬香がもしかしたらウーロン茶以外の飲みモノを持ってきたかもしれないから。ちょっと見てくる」

と言って、僕が「いや、他の飲みモノの方が嬉しいんだけど」と意見を述べる間もなく、たったかと部屋を出て階下へ降りていってしまった。

僕は橡さんの部屋で独りぼっち。自分の部屋に男を一人放置するなんて、無防備不注意もいいところだと思うが……。まあ、逆にこれは信用はされてるともとれるんだろうか？

僕は仕方なしに、妹さんの名前は冬香というのかと反芻したり、あるいは階下から聞こえてくる、

「ちょっと、冬香、さっきの発言はどういう意味よ」

「どうって、そのままの意味ですけど？」

「こおんのー！ まったく！ なんって可愛げのない妹だ！」

「ねえさんに言われたくありません。ねえさん以上に人の期待を裏切るような性格の人間なんて、この世に存在しませんから」

「なんだとっ！ 何を根拠に！」

「だって、そうじゃないですか。先週のあたしの誕生日だって、プ

レゼントが『煎茶の六缶パック』なんて意味不明もいいところ——」

という言い合い罵り合いを聞かない振りしたりしながら、座って待っていた。

そしてふと、棚上のマンガ本とマンガ本の隙間から、何か白くて平べったいものが覗いているのを見つけた。

他人の部屋のもの（しかも、異性の私物）を勝手に見て回るなんてのはこの世で最も行儀の悪いことであることは、僕だって十分にわかっている。橡塑さんに対する罪悪感だって一応あるにはあった、が——この時ばかりは、それ以上に僕の興味が勝ってしまった。なんせ、数か月来の想い人であるにも関わらず、僕は橡塑さんについてほとんど何も知らないのだ。

趣味も知らないし、特技も知らない。どういう生い立ちなのかも知らないし、将来の人生設計も（もちろん、本人がちゃんと設計していればの話だが）知らない。日々部屋でどんなことをしているのかさえ知らないのだ。だから余計に、憑き動かされるように、僕はその平べったいものへと手を伸ばしてしまった。

僕が取りだしたものの。それは白いプラスチックでできた——写真立てだった。

写真立て自体はなかなか頑丈な造りで、高そうだなあとか、写真立てをマンガ本の陰に隠してたんじゃあ写真を立てる意味がないじゃないかとか、そんな取りとめもないことを思っていたのも束の間——僕はその写真内の人の並びに、驚愕を隠せなかった。

そこには四人、並んでいた。

一人は、当然の如く橡塑さん。赤いパーカーにジーンズという私服で、こちらにいつもの不遜な笑みを向けている。そしてその右隣りには先刻会ったばかりの冬香ちゃん。その隣にも大学生くらいの男性が立っており、どこことなく二人と顔の輪郭や目元口元が似てることから、恐らく彼が二人のお兄さんなんだろう。さらに隣には四十くらいの女性が立っていて、彼女が橡塑さんのお母さんであることも

見て取れた。

そして問題は、椽さんの逆隣りだった。そこに立ってこちらに満面の笑みを向け、びしっとピースサインを決めていたのは――

――鷹野だった。

そこにいるのが当然であるように、そこが自分の居場所であるかのように、その人当たりのいいにこやかな笑顔をこちらに向けている。まるでこの家族の一員であるかのように、その並びに溶け込んでいる。

僕は、理解が追い付かなかった。

意味が分からなかった。

息が止まった。

思考が止まった。

時が止まった。

……何だ？ 何だ？ 何だ？ 何だ？

一体全体これはどういうことなのだと、鈍くなった僕の頭がようやく再び回転し始めた時――

――がちやり

ドアが開く音がした。

僕は肩を震わせる。

驚きすぎて、呆気にとられすぎて、僕はその場に固まったままだった。固まったまま、くるりと、あるいはギクリと、入室する椽さんを見返すだけだった。

椽さんは

「おっまたせ」

と能天気な声を上げ、ウーロン茶の入ったコップを両手に持っている。そして写真立てを手にとって立ちつくしている僕を見て、

「お？ 何見てるの？」

と、ウーロン茶をテーブルに置きながら、僕の手元を覗いてきた。僕は、乾いた舌を濡らし、慌てて、

「あ、ごめん、勝手に見ちゃって」

と写真立てを棚に戻した。
椽さんは、

「ああ、その写真」

と、納得したように一つ頷き、

「よく撮れてるでしょ？ 先月……いや、二か月前だったっけ？
ハイキングに行った時にとったやつだよ。夕方から雨に振られたんだけど、冬香がそれをあたしのせいにしてくんのさ。家族旅行にあたしを連れてくといっつもこうだってね。ほんと、あったまにきてねー」

「そ、そうなんだ」

自分でも無理やりなのが分かるほどの作り笑いを作りながら、僕は相槌を打つ。次いで、

「……こ、これ、鷹野だよな？ あいつも一緒に行ったんだ？」
「ああ、実はあたしとあいつ、幼馴染でねえ。母親同士が友達だったんだ。おかげで、家族旅行の時はちよくちよくあっちの家族も誘ってんの。かれこれ、幼稚園以来の付き合いだからね。案外永いよ」

橡さんは何ともなしに答える。けれど——幼馴染、家族ぐるみ、幼稚園以来という言葉聞いて、僕は腹の奥に気持ち悪いものを感じた。単なる言葉なのに、ただの単語に過ぎないのに、単純な空気振動でしかないはずなのに、その一つ一つが、深く深く、僕の中にめりこんでいる。

視界がぐにやりと歪んだ。

今日の前にいる橡さんがあつという間に手の届かないくらい遠くに行ってしまったような、そんな感覚に襲われる。僕が過ごす二十四時間と、橡さんが過ごす二十四時間が、これでもかというほど違っていることを認識した。僕が見ている世界と橡さんがいる世界はどうしようもなく違うことを、心の奥底から思い知らされた気がした。思い知ってしまった。

——と、

「失礼します」

という声が聞こえて、再びドアが開かれた。振り返ると、冬香ちゃんがトレイを持って部屋に入ってきた。

「お茶菓子持ってきました。良かったら食べてください」

そう言って、運んできた紅茶のカップとクッキーが乗ったお皿をテーブルに置く。

橡さんは口をぷっくりと膨らまし、

「何だよ、冬香。おもてなしの品はちゃんとあたしが持ってきてるんだから。余計なことするな」

「……おもてなしの品って、もしかしてこの、氷も入ってないウーロン茶ですか？ まったく、これがおもてなしでないから、わざわざあたしが持ってきたんじゃないですか」

「なってるよ！ この前だって、加賀原はちゃんとこれで満足してくれただから！ ねえ？」

「え？ あ、ああ……」

僕はそんなことを話してる心境ではなかったのだが、取り繕うような相槌を打つ。

僕の方をちらりと見やった冬香ちゃんは、はあと溜息をつきながら、

「……やれやれ、やっぱちゃんとあたしが気をきかせなきゃならないですね。せめて、ねえさんがこれ以上嫌われないように」

「嫌われてなんかないよ！ むしろ尊敬されてるくらいだ！」

「……そうですかねえ？ あたしの見立てでは、恐らく、今この瞬間に、加賀原さんの中のお嫁さんにしたい女性ランキングで、あたしがねえさんをぶっちぎりで追い抜いてしまったことでしょう。ねえさんはどんどん最下位まっしぐら。そのうち女性としてすら見てもらえなくなるかもしれない。……ああ、何て哀れなあたしのねえさん」

「なにい！ そんなバカな！ おい、加賀原！ そうなのか！ そうなのかあ！」

そう言って、レスラー張りにぎちぎちと僕の首を締めあげてくる椽さん。

もはや精神的および肉体的ストレスをこれでもかというほど加えられて泣きそうになりながら、というか泣きたくなりながら（実際に泣いてたかもしれない……）、僕はじたばたと、

「い、いや、あの、だけど、く、椽さん、も、素敵、だよ……」
「どっちっ！」

「い、いや、椽………彩さんも、素敵、だって……」

「『も』ってどういう意味！」

「い、いや、あの、だ、大丈夫、ま、まだ、彩さんの方が、ランキングは……」

「『まだ』ってどういうことだぁ！」

「いや、だから、その、あ、彩さんが、あの、未来、永劫、い、一番、です、から……」

ここまで言うと、ふっと彩さんは首から手を放してくれた。

僕は糸の切れた人形のようにどさりと床に倒れ伏す。そのままうつむき、エホエホとえずいた。

彩さんはふふんと鼻を高々と上げ、

「どうだ？ 聞いたか、冬香？」

「……そんなの、無理やり言わせただけじゃないですか」

冬香ちゃんはすました顔で答えた。そしてすくっと立ち上がり、

「とにかく、お客様に失礼のないようにだけはしてください。……そうだ。あと、にいさん、今日は帰りが早いみたいですからね。この逢引きがばれて大事にならないよう、お気をつけあそばせ」

そう言って、お盆をかかえて部屋から出ていった。

彩さんは鼻を鳴らしながら、

「ふん、まったく、我が妹ながらなんて厭味なやつだ。誰に似たんだろうねえ？ ……さあ、さっさと宿題を終わらせよう」

テーブルに座り、宿題の模写を始めた。完全に目の前の宿題に集中してしまったようで、世界記録の更新でも狙っているんだろう。ようやく部屋に戻った静穏。

僕はため息をつきながら、テーブルの横に座り直した。そしてそろりとテーブルのクッキーに手を伸ばした――その瞬間、彩さんがいきなり顔を上げ、こちらをキッと睨んできた。

僕は慌てて手を引っ込め、ウーロン茶を飲む作業に入る。そして、半年にわたる慕情の告白を首を絞められた状態で苦し紛れに果たす男はどうなんだと自問しながら、文字通りの身も心もボロボロの状態で、マイノートが帰ってくるのを待っていた。

第五話「橡彩宅にて？」その三

橡家からの帰宅途中、いまだに治らない胸の奥の気持ち悪さに悶えながら、僕は考えを巡らせていた。

——彩さんと鷹野が幼馴染であること。

確かに言われてみれば、二人の仲の良さは高校に入ってから育んだにしては親密すぎるのも思った。まるで家族のような遠慮のなさ
が二人にはあった気がする。鷹野はあまりにも簡単に僕が入り込めない場所に入り込んでいた。そうと聞かされれば、納得しかできない。

——こんな簡単なことに今まで気づかないなんて。

バカらしくなってしまった。彩さんと初めて会ってからの半年、僕が抱いていた期待や不安や胸の高鳴りが、すべてくだらないことだった。くだらないことだったことに気付かされた。彩さんと交わした会話を今まですべてほとんど覚えていること。彼女との会話にいちいち一喜一憂していたこと。たかが肩を叩かれたくらいでどぎまぎしていたこと。一つ一つが、僕にとって大切な思い出だった。

——しかし、そんなのは、鷹野からしてみればどうでもいいこと。

僕の今までの思いは、一体なんだったんだろう？

気が重くなる。頭が重くなる。そんな気はないのに、それでも顔が俯いてしまう。

ふと、

夕焼けも消えて夜へと変遷した住宅街の十字路、僕が右に曲がろうとしたところで、

「あれ？」

視界の端に、僕の方を見て声を上げる女性が映った。

僕は顔を上げ、その人の方へと視線を向ける。その人は、制服姿で眼鏡に真っ赤な夕日を反射させた佐々谷響子——今僕が一番会いたくなかった人物だった。

「あれま、どうしたの、加賀原、そんなしょんぼりして？ そんなんじゃ、ただでさえ少ないあんたの運気が蜘蛛の子みたいに四散しちゃうわよ？」

「……うるさいな」

精一杯の反論を唱えたつもりだったが、我ながら覇気のない返事になってしまった。

「あんた、彩の家に行ってたんでしょ？ しかも一人で。だったら、うきうきで帰っててもよさそうなんなのに。一体全体何が——」

「……知ってたのか？」

「何を？」

「彩さんと鷹野が幼馴染だったこと」

僕の質問に、佐々谷さんは少しばかり怪訝そうな表情になった。そしてふう、と肩を落として、

「知ってたわよ。もちろん。……だけど、それが何だっていうの？」

「何でそれを僕に言わなかったんだ？」

「聞かれなかったからに決まってるじゃない」

当然でしようと言うように、肩をすくめながら言ってくる佐々谷。

「それに、二人はあくまで幼馴染。付き合っていないわ。……まあ、未来のことはわからないけど。だから、これは別にあんたにわ

わざわざ知らせるような情報じゃなかったでしょう」

「そうは言ったって……」

僕はぶつくさと言ってしまふ。……いや、ここで佐々谷さんを問い詰めたって意味はないことはわかってる。けれど、僕の暗澹とした心境が吐き出し口を探していた。どこでもいいから吐き出したいと喘いでいた。だから、堤が決壊するように、僕には止めようがなかった。止めようがなく、口が開いた。

「……けど、だけど、言ってくれてもよかったじゃないか。あれだけ僕に突っかかってきてたんだ。それくらい教えてくれてもばちは当たらなかつただろう。それを知ってれば、僕は、僕はもっと——」
「『もっと』、何？」

直立で、僕を睨みつけ、佐々谷は無然と言ってくる。

「それを知ってたからって、何が変わるの？ あんたに何かできたの？ それを知ったからって、単にあんたが落ち込むのが早まっただけじゃない。結果は何も変わらないじゃない。それとも、知ってたら何かできたとも言うの？」

「そ、それは……」

咄嗟に返答が思い浮かばず、僕は言い淀む。

「どうせ、あんた、自分の中で勝手な物語でも作ってたんじゃない？ あまり接点のないあんたと彩が、周りにとにかく言われようとも、私に色々言われようとも、いつか何かの機会に運よく結ばれてハッピーエンドになるような、安っぽいストーリーでもね。……ふん、能天気もいいところね」

佐々谷は俯いた僕を睥睨しながら口を動かし続ける。

「そんなの、井の中の蛙もいいところ。彩のことを何も知ろうとしない癖に、近づくこともできないくせに、勝手に妄想膨らませてるだけなんだから。あんたがそんな自分勝手な物語を描いているうちに、彩は彩で別な物語を描いてるのよ。幼馴染のかっこいい男とつかず離れずの恋愛模様を紡いでいくような物語を、ね。こっちの方がよっぽどドラマチックで、見ごたえがあるものだわ」

佐々谷の声は、止まらない。

「あの二人は幼稚園以来の幼馴染。お互い同じ場所で、同じ速さで成長してきた。お互いを男女と識別する前からね。だけど、高校に入って、お互い共が異性に人気になってきて、そこで初めてお互いを男、女と認識する。そこで、改めてお互いが向き合う。向き合って、今までとは違う感情が生まれてくる。……もしかしたら、今現在、そういう物語の途中かもしれない。あんたの役なんて、当て馬の一人に過ぎないかもしれない。彩が、鷹野と比べるその他の男子の一人にすぎないかもしれない。鷹野のいいところを発見、再認識するための、単なるモノサシの一つなのかもしれない」

僕はただただ、聞くだけになっていた。

聞きながら、肩を震わせるだけになった。

「だから言ったのよ。私はちゃんと言ったのよ。あんたと彩は釣り合わない。だから諦めなさいって。その注意を、助言を、アドバイスを聞かなかった、聞こうとしなかった、聞く耳を持たなかったあんたが悪いんでしょう。自業自得もいいところ。サーカスのピエロだってあんたなんかよりもっと優雅に踊るわよ。滑稽、滑稽。いい気味だわ」

そこまで言うと、佐々谷はきびすを返した。そして別れのあいさつもなく、すたすたと行ってしまう。

僕はふらりと、コンクリートの壁にもたれかかった。そのままずりずりと地面に座り込んでしまう。そして、星がほとんど見えない夜空を見上げた。……いや、本当は星もちゃんと見えていたのかもしれない。他の人にはちゃんと見えてたのかもしれない。

しかし、僕には見えない。

ぐしゃりと、すべてが滲んでいる。

それでも、変に期待なんかしないよう、ちゃんと生きてきたはずなのに。

自分というものを理解して、理解しつくして生きてきたはずなのに。

身の丈に合っただけの希望に満足して生きてきたはずなのに。

そうやって、できるだけ自分が傷つかないように生きてきたはずなのに。

この十六年で、どうにかこうにかそういう生き方を身につけたはずなのに。

……僕が泣くのなんて、一体何年振りだろう？

第六話「電車にて」その一

学校生活というものがこれほどつまらないなんて、今まで思いもなかった。

……いやまあ確かに、僕は決して知的好奇心とやらが旺盛な人間なんかではなく、座学で何かしらの達成感を得られるような人間でもなく、今まで一度たりとも授業で「楽しい」なんて感覚に巡り合った覚えなどないというのも事実だ。勉強なんてのは、僕にとって苦痛以外の何物でもなかった。今更こんなものに楽しさを求める方が筋違いなのは、僕だって十分にわかっている。

しかし、そうは言っても、なのだ。

今現在の僕は、それ以上の〈虚無感〉に苛まれているのである——この苦痛を耐えたその先に待っていたはずものが、今やすっかり跡形もなくなってしまったのだ。この一時間を我慢したからといって、その後の休憩時間に何か期待させるようなものが何もない。楽しいことも、嬉しいことも、何一つ期待できない。この授業時間を耐えることに、僕は何の意味も見出せなくなったのである。

席に座ったまま黙り込み、溜息をつき、項垂れ、唇を噛み、下を向き———それだけのことで、一日を過ごしていく。時間を潰していく。

ただ、時間が過ぎるのを待つだけの日々になった。
耐えて耐えて、そして耐えるだけの日常になった。

こうなって、改めて思う——僕がどれだけ、休み時間や昼休みに彩さんと話せることを楽しみにしていたか。

あの日以来、僕は一度も彩さんと話していない。
どころか、近づくことすら怖くなってしまった。我ながら自意識過剰だと思っほほどに、彩さんとやたらと距離を取ってしまう。彼女

との距離を気にしてしまう。彼女の視界に入るのすら戦々恐々としてしまうくらいだ。この変化は少々不自然だったかもしれない。もしかしたら、彩さんですら気づくほどの変化だったかもしれない。

——まあ、だからといって、彩さんの日常に支障があるわけでもないし。

彩さんは話し相手に事欠かない人だ。たかが僕一人と話さなくなったくらいで、休み時間が手持無沙汰になることなどあるはずもない。一昨日も昨日も今日も、彩さんが一人ぼっちで暇そうにしているとところなんて（まあ、授業中は除くとして）一度も見えていない。そもそも、ここ数日僕と全く話していないことに気付いていないかもしれない。彼女はそれほど忙しい人なのだ。

それはある種安堵する事であり、そしてまた——悔しくもなってしまう事実だ。

一体彩さんにとって僕はどんな存在だったのかと、寂しくなってしまう。鷹野という、いわゆる〈素敵〉な男が至極そばにいて、僕のような凡人がしゃしゃり出てきて、一体彩さんにどんな感情を喚起させていたのだろうか？ 喚起させることができていたのだろうか？ もしくは、どんな感情も呼び起こせなかったのだろうか？ 彩さんと話せなくなっただけの独り手持無沙汰な時間、僕はウジウジとメソメソと、そんな事に考えを巡らせていた。巡らせながら、気を重くしていた。

そんな中、南川から今月二度目の怪盗『砂時計』討伐の遠征の話聞いた時は、少しばかり救われた気分になった。

たといいつもは面倒で堪らない用事だったとしても、気を紛らわすのには役立つ。僅かな間だとしても、この逡巡を断ち切ることができる。

この時ばかりは僕も、初めてと言っても過言でないほどにポジティブな心持でこの遠足に赴いた。その旨を伝えられたのが予告日の

三日前で、あまりにも急に土曜を潰されたわけだが、むしろ僕にとってはそのありがたいだった。

場所は、うちから十数キロ離れた場所にある山間の博物館。

実に三時間半かけて僕らは電車でそこへ赴いたわけだが（もちろん、高校生の分際で特急など乗れるわけもなく、鈍行に鈍行を重ねた結果だ）、そこは完全絶無の田舎だった——というより、未開拓の地と言っても言い過ぎではないかもしれない。ターゲットになった博物館と、マイナーな戦国武将の生家である武家屋敷が観光地としてあるだけで、あとはただ山と田畑に囲われただけの土地。民家すらほとんど見当たらない。交通の便も悪く、運行数の少ないローカル線を使うか、あるいは車で高速を飛ばしてくるかしなければたどり着けない場所である。

そんな場所なため——そして、あまりにも急な予告だったため——今回の南川の下調べも精彩を欠いたものだった。前回のように周囲五百メートルのマンホールがすべてチェック済みの地図を渡されることもなく、僕を見回りに促す際も、

「とりあえず、何かコソコソしてる奴を見つけたら俺を呼べ」

という、忠犬だってさじを投げそうなほど曖昧な指令のみに留まった。

そんな手がかりだけで怪盗が見つかれば警察なんていらぬ。セキュリティなんていらぬ。野次馬だっていらぬ。当然の如く、半月が西の空に昇った七時半、博物館の周辺を歩き回っていた僕は、

「ぬ、盗まれちゃったらしいぞ、絵画！」

と、号外よろしく道行く人にふれ回っているおじさんに報せを受け取ることになったのだった。

「……まただめだったか」

と肩を落とす南川に、

「気にするな。……というか、もはやここまでが今日の予定だろ」

と厭味を交えた慰めをつぶやきつつ、僕らはさっさと家路につくことにした（往路に三時間半かったということは、帰りも同じだけの時間がかかるということだ。宿泊場所の確保などしていない僕らは、終電前に何としても帰る必要があるのである）。

駅の改札で警官の手荷物検査を受けた後、だっ広いホームに降りても、ほとんど人はいなかった。ここに集結している野次馬諸子は、まだ怪盗『砂時計』を捕まえようと美術館の周辺を調べ回ってるんだろう。駅の柵の向こう側にも、あちこちにかけていく人が何人か見えた。僕の隣で南川もそれに混ざりたそうな顔をしていたが、「今日中に帰れなくなるぞ」と言って諦めさせた。

ホームで待つこと十二分。ようやく来たロングシート、六両編成の列車の最後尾に、僕と南川は乗り込んだ。

「……はあ」

シートに座った後も、南川はなかなか落胆から立ち直らなかった。無口で、肩を落とし、頭を垂れて、自分の膝を眺めるばかり。……しかしまあ、これもいつものこと。今まで一度だって怪盗にかすったこともないのに、落ち込む時はいっちょ前に落ち込むのである。そして数十分程この状態が続けた後、おもむろ顔を上げて「次こそは必ず!」と勝手にわめき始めるのである。心配するだけ無駄なのだ。なので僕は南川を気にするでもなく、持ってきたマンガ本を開き、つらつらと読書を始めた。

ここは田舎のローカル線。

そのため駅間の所要時間も大きく、来る時にも大体二十分くらいかかっていた。おまけに外は真っ暗で、窓の外の景色はほとんど見えない。地蔵と化した南川の隣では、本を読む以外にすることは何もないのである。

ぱらぱらと読み進め、そろそろ肩が凝ってきたなと顔を上げてみたところで、ふと——ふと、思った。

——この電車で怪盗『砂時計』が乗ってる可能性もあるのでは、と。

しかし、すぐに考え直した——そんなバカな。だって、改札じゃあ、警察がずっと監視してたんだ。僕たちだって念入りに手荷物検査をされたんだ。貴金属を持ってたら、確実に止められ、捕まる。それをすり抜けるなんて、そんなこと——

——バサッ

手元から、マンガ本がすり落ちた。

「どうした？」

首を回し、不思議そうな顔をこっちに向けてくる南川。

僕は笑顔を作り、

「い、いや、何でもない……」

と、何ともなさそうに答え、何事もなかったかのように本を拾う。しかし——答えながらも、僕の思考はぐるぐる廻っていた。

——違う、違うだろう。目の前に警察がいようと、それをすり抜けることができるのが怪盗『砂時計』だろう。手荷物を見られることなく包囲網を突破できるのが怪盗『砂時計』の能力だろう。だか

らこそ、五年間も警察に捕まらずに盗難を繰り返してるんだろう。二週間前、美術館から宝石が盗まれた直後、一キロ離れた場所で『砂時計』と相まみえた僕には、それが断言できるはずだ。

ここは、人里離れた山間部。

あの博物館から三キロの四方には山しかない。建造物もほとんどないし、車道すら限られた場所にしかない。もしあの博物館から逃げようとするなら、その車道を使うか、もしくはこの電車を使うしかない。

逃げるというなら、車を使う方がまだ勝手がいい。

この電車は本数が限られているし、行先も限られてる。車なら、検問さえ突破すればあとは自由だ。

けれど——『砂時計』が本当に車なんて使うだろうか？

この前、『砂時計』は美術館から一キロも離れたあの路地裏から徒歩で出てきた。それはつまり、あいつは逃走の際の移動は徒歩に限られているということなんじゃないだろうか？　そういう制約があるということなんじゃないだろうか？

……いや、そんなのは憶測に過ぎないか。前回とはまたまなのかもしれない。例えば、あいつの家がそこから近かったのかもしれないし、あの時ちょうど自家用車を車検にでも出していたのかもしれない。

それにそもそも、この電車に乗っているとも限らないんだ。三十分後に発射する次の電車かもしれないし、もしくは今日はずっとあそこにとどまっていて、明日になったら帰る予定なのかもしれない。——いや、でも、この前は盗難発生直後に、一キロ離れたあの場所で僕はあいつに会ったんだ。それはつまり、『砂時計』は盗んだ後すぐにその場から離れる習慣がある、ということなんじゃないだろうか？

——そんなのは仮定に過ぎない。正解の可能性など低いことはわかってる。けれど、

——そんな低確率に賭けることができるのが、僕の強みだろう。

僕は立ち上がり、椅子の上に本を置いた。

それを見止めた南川は、きょとんと僕を見上げ、

「……どうした？」

「いや、ちょっと、トイレ行ってくる。悪いけど、荷物見てて」

そう言って、僕はその場を後にした。

第六話「電車にて」その二

僕は最後尾車両から先頭車に向かって、トイレを探すようなふりをして歩いて行った。

乗り込んだ時からわかっていたが、やはりこの電車の乗客は少ない。容易に人数を数えられる———というか、全員の顔を覚えられそうなくらいの少なさだ。

ずんずん前へ歩きながら、自分が気にしているのを周りに気取られないよう、顔を動かさず目の端で乗客をそれぞれ確認していく。

こそこそと『砂時計』について話し込んでいるスーツ姿のおじさん三人。デジカメの撮影画像をチェックしている大学生くらいのお兄さん。買い物袋をぶら下げた四十くらいのおばさん。並んで携帯ゲーム機に遊び興じている小学生の男の子二人。いびきをかいてねこけているおじさん。そして、読書にふけている高校生くらいの女の子。

全部で九人だ（僕と南川を入れれば十一人だが）。

僕が通り過ぎても、誰一人として挙動不審な様子は見られなかった。無反応だった。何か隠し事をしてそうな人間などいなかった。この中に本当に『砂時計』がいるのだろうか？ いるとしたら誰なんだ？ 前回出会ったあいつの背格好からして、ありえるのは五人あいつが独りで行動しているとしたら、さらに二人に絞られることになる。

大学生と思われるお兄さんか、いびきをかいているおじさん。

この二人のうちのどちらかが怪盗『砂時計』なのか？

——と、

『まもなく、珠ノ一江、珠ノ一江』

車両内のスピーカーからアナウンスが響いてきた。

——やばい。

あと一分程度で次の駅だ。電車が止まってしまおう。扉が開いてしまおう。奴に逃げるチャンスを与えてしまおう。なんせ、僕は堂々と電車を歩き回ったんだ。『砂時計』に自分の姿を見せつけてしまったんだ。僕がこの電車に乗っていること——そして、僕がここで『砂時計』をきよろきよろ探していることを示してしまったのだ。

——いや、待て、それはつまり、次の駅で降りた人間こそが『砂時計』だということなのか？ そいつを追いかけていけばいいということなのか？

……うーむ、しかし、それも際どい推理だ。奴の都合からして、次で降りるわけにもいかないという可能性だって否定できない。それにそもそも、終電のことを考えたら、僕自身が下車できないじゃないか。

やはりこの状況で、この場所で奴が誰なのかを突き止めなければ。どっちだ？ どっちが怪盗『砂時計』だ？ どっちの方が『砂時計』である可能性が高いんだ？

——いや、違う。そうじゃない、そうじゃないだろう、考え方は。奴に対抗する思考方法は。

僕はぶんぶんと頭を横に振った。

そして、ふらふらと車両を歩き出す。

窓の外の景色がゆっくりになってきた。減速し出したんだろう。もう、時間がない。

僕は腹を決め、そして——

——女の子の隣に座った。

僕が見たこともない制服に身を包んだ高校生。ロングの髪を両脇で三つ編みにしていて、白いフレームの眼鏡をかけている。前髪もなかなか長くて顔の輪郭もあまり確認できないが、別段珍しくない格好をした女の子だ。

僕が腰を落ち着けると、その子はちらりと、いぶかしんだような視線を僕に向けてきた。しかしすぐに顔を俯け、読書に戻る。

僕はできるだけ平静を装った声音で、

「その本、おもしろいですか？」

と聞いてみた。

その子は再度僕にグラウンスすると、少し間を置き、たどたどしく、

「え？ ……ええ、まあ、そこそこ」

「何の本読んでるんですか？」

「え？ あ、と……歴史小説、ですけど……」

「何て題名ですか？」

「お、『大椰子八郎兵衛伝記』おおやしはちろうべえ ってやつですけど……」

「へえ……。それって、誰の作品なんですか？」

「す、鈴木すずかわ揺籃ようらんっていう、先生、です……」

ここまで呟くように答えると、その子は視線だけを僕に向けてきて、

「……あ、あの、す、すいません……あたしに、何の用ですか？」

と、不審げな質問をぶつけてくる。

僕はにこやかな表情を作って、

「いや、気分はどうかと思ひまして」

「……気分？」

「ええ——」

——まんまとオランダの宝石を盗み出した直後の気分はいかがですか、怪盗『砂時計』？」

僕は一言一言しっかりと発音した。

その女の子は、しばしの沈黙。列車がガタガタいう音だけが二人の周りに響く。

もしかしたらこのまま駅に着くまでシラをきり続けるのかとも思ったが、しかしその女の子は、突然その強張っていた表情を崩して、

「……うふふ、さすがですね」

と、微笑で、嬉しそうな声音で、そう言った。そう言ってきた。次いで、

「どうしてわかったんです？」

「いや、簡単なことです。さっき、僕が一人一人確認していった時、誰一人として挙動に不審な点は見られなかった。僕を不審そうに見てくる人も、あるいは僕から顔を逸らそうとする人もいなかった。それはつまり、怪盗『砂時計』はこう確信してたからじゃないですか？ 『外見だけでは、僕には絶対に判別できないだろう』と。怪盗『砂時計』にはそういう自信があったんじゃないんですか？ ……では、怪盗『砂時計』がそこまでの自信を抱く、そんな外見はどんなものか？ ……そんなのは自明です。この前会った時とまったく『正反対』の外見をしていればいい。前回会った時の奴は、僕よりも十センチ近く背が高かった。そして男性だった。ならば、僕より背の低い女性……女の子じゃないか、と思ったわけですね。その場合、当てはまるのはあなただけだった。……ふふ。普通に考えれば、そんなことは物理的には不可能でしょう。しかしそんな理由は——『物理的に不可能』なんてつまらない理由は——残念ながら怪盗『砂時計』には当てはまらない。それだけの理由では、

この選択肢を排除できない。否定できない。つまりはそういうことですよ」

「……なるほどー。いやあ、さすがです」

心底感心したように言い、その人は頭に手をやった。そしてふわっと、頭からその三つ編みの長髪をへ脱ぎ捨てる。その下から覗いた顔に、僕は――僕は、驚愕を禁じえなかった。

やや丸顔で、目尻の下がった目つき、への字の唇が板に付いた口元。そして真円の寄り目。僕にはどうしても、どうやったって――

――橡彩さんにしか、見えなかった。

僕は呆氣にとられる。視神経にこの人の情報が流れるのと、頭で認識するのに、明らかなタイムラグが生じる。思考が、理解が追いつかない。そして、追いつかないまま、

「……あ、あん、た、は、あ、あ………彩、さん？」

と、考えもせず、考えなしに、条件反射に等しい動作で、僕はそう言葉にする。言葉にしながら、目の前のこの人をもう一度よく見た。

……いや、よく見ると、少しばかり違和感がある。この人が橡彩さんだとは認識しているが、しかし、『同一人物』とはどうにも認識できない。顔の作りも声音もこれ以上もなく似ている。なのに、飲み込めない矛盾がある。

――そうだ。

僕が知っている彩さんよりも、この人は少しばかり落ち着いた雰囲気がある。そしてさらに、毎日会っているあの人よりも上背が高いような気がする。そう、まるで――彩さんの三、四年後を見ているかのように。

目の前のその人は、くすりと悪戯に笑うと、

「や、加賀原、こんばんは」

と、いつも教室で聞いているのに限りなく近い声音で、僕に話しかけてくる。

「いやー、まさかバレるとは思ってなかったよ。折角、今日はあたしがでばってきたってのに。ばれる要素が存在するなんて思いもしなかった。うっふふふ、さすがだねえ、加賀原。見直した」

僕は一瞬、反応できなかった。しかし、周回遅れで何とか思考が追い付き、

「……え？ 『今日はあたしがでばってきた』 って……それは一体、どういう、意味……」

「べっつに？ そのまんまの意味だけど。ようは、あたしがそのままの怪盗『砂時計』本人じゃないってこと。さらにもう一人、黒幕がいるってことよ」

「黒幕？ って、そ、それは誰……」

「あっはははは。そんなの、言えるわけじゃないじゃない。いくら加賀原でもね」

そう言って、目の前のその人はぱちりと僕にウィンクをしてくる。

——黒幕がいる。

その言葉に、僕は少しばかり安堵感を覚えた——ようは、彼女が怪盗『砂時計』の主犯ではないということだ。もちろん、彼女が犯罪者であることには変わらないが、彼女は主犯じゃない。彼女は首尾一貫この犯罪を意図したわけではない。その黒幕さえ止めれば、彼女の犯罪も止まる可能性があるということ。

ここで、僕はふっと思い出し、

「……そ、そうか、なるほど。この前『あいつ』に会ったときに、確か『見覚えのある服装だ』と言っていた。……それはつまり、君の家の近くで、僕とすれ違っていたってことだろう。やはりあの人も、君の何かしらの関係者だってことなんだろう」

「……そんなこと言ってたんだ」

目の前のその人は不満げに、あるいは不安げに口を尖らせ、ぼそりと呟いた。

「……………まったく、にいさんたら」

「……え？」

「いや、何でもないよ」

首をフルフルと振りながら、苦笑いで僕の顔を見返してきた。

「で、加賀原、あたしをどうする気？」

「どうするって、いや、別に、どうもしないよ—————というか、できないさ。こちらら丸腰だし……。しかも、今ここで君を捕まえようとしたって、傍から見れば僕は、年頃の女の子に襲いかかる変態にしか見えないだろうし。それじゃ逆に、僕が犯罪者になっちゃう」

「うっふふ。さっすが加賀原、よくわかってる」

その人はにんまりと笑い、うんうんと頷いた。

——と、

がたんと車体が揺れ、外の景色が停止した———目の前にはプラットホーム。ドアが開き、夜風が車内に流れ込んでくる。

「うっふふ、じゃあ、そういうことで」

そう言って、その人は立ち上がった。そして出口へと歩き出す。

「そっちのあたしによろしくね。んじゃ、お休み、加賀原」

車両からすたと降り立ち、僕にひらひらと手を振ってくるその人。

次いで、ドアが閉じられた。数秒の後、外の景色が動き出す。

僕は呆けたまま、離れていくその人の笑顔をただただ見送るだけだった。

第七話「教室にて？」その一

先日の美術館遠征以降、僕はいよいよもって彩さんに話しかけることができなくなってしまった。

元々、鷹野との関係性を知らされてからというもの、何となく避けてしまっただけなのだが——彼女が怪盗『砂時計』の実行犯の一人であるという事実を知らされたことで、余計に彼女への接し方が分からなくなってしまったのである。

教室でちらりと彩さんに視線を送ってみても、見る限りでは、彼女は楽しそうに学校生活を満喫している。授業中のつまらなそうな顔をのぞけば、大概ケラケラと笑顔を絶やさない人なのである。客観的には、それだけで人生が満ち足りているように見える。何かへの不満とか渴望とか、そんなものはまったく見えない。そんなものを何一つ抱えることなく、日常を日常として日常らしく生きているようにしか見えない。

そんな彼女が、どういう経緯で犯罪に手を貸すようになったのか？

……実際のところ、それについては少なからず予想がついている。必要以上のヒントを、僕はすでに〈あの人〉から貰っているのである。それはすなわち、〈彼女〉がぼつりとこぼした言葉——

「——まったく、にいさんたら」

つまり〈彼女〉の黒幕というのは、あの写真で彩さんの隣に立っていた男、彩さんと冬香ちゃんの唯一の男性同居人にして血縁者、そして二人のお相手の可否について一切の権限を有しているという人物——彩さんのお兄さんだ。彩さんの兄たる人物など（もちろん彩さんのご両親が今後養子でも取れば話は別だが、三人も子供がいる夫婦が今更十八以上の男を家族に迎える可能性なんて微々たるものだろう）、世界にただ一人しかいないのである。

そのお兄さんが、彩さんを怪盗の道へと引き込んだのだ。
引き込み、自身の仕事を手伝わせているのだ。

まったくもって突拍子もない事実ではあるけれど——しかし、
これで僕はようやく『合点』がいった。

数か月前、路地で怪盗『砂時計』本人と対面した時、彼は僕に対して

「〈それ〉は見覚えのある服装だ」

と言っていたのである。この言葉を聞いた当初はその意味がいま
いちよく分かっていなかったけど——そうだ。そうだったんだ。
あの時着ていたのと同じ黒のアウトターで、僕は〈彩さんの家〉に行
ったんだ。その時、僕はお兄さん本人とは対面していないけど、そ
れは僕がお兄さんを見かけなかったというだけのこと——もし
かしたら、あの時僕は、お兄さんに見られたのかもしれない。帰り
際、どこかの道ですれ違っていたのかもしれない。その可能性は高
い。なんせ、あの家は〈彼〉の家でもあるんだから。

これではようやく、一つ、胸につかえていた疑問が解消された。

けれど、まだまだ謎は残っている。残りに残っている。そうだ——
——一体どんな経緯があって、どんな目的があって、そのお兄さ
ん本人は怪盗『砂時計』なんて真似を始めたんだ？　そしてまた、
どんな意図があって妹に自分の仕事を手伝わせているんだ？　どう
いう感情でもって、あの人は仕事を手伝ってるんだ？　その辺のこ
とがよくわからない。わからないというか、想像すらつかない——

「——起立！」

突然の号令に、僕は驚いてしまった。

前を見ると、クラスメイトが皆立ち上がっている。

僕も慌てて立ち上がり、一拍遅れで礼を遂行する。そして教師が

教室から出ていくのを見送ると、僕はどさりと椅子の上に崩れ落ちた。

——あーあ、びっくりした。

熟考に浸ってしまっていて、授業の終わりの方の話を完全に聞いてなかった。板書すらしていない。……まあ、たかだか十数分聞き逃したくらいで、僕の人生にたいした被害があるわけでもない。教師がすらすらと黒板に書いていた数式なんかより、もっとずっと大きな難問が僕の頭の上にのしかかっているのである。

——これから僕は、どういう風に彩さんと接していけばいいのか？

先日対面した「あの人」は、今この教室にいる彩さんではないことはわかっていいる。外見も雰囲気も微妙に異なっていた。「あの人」の方が、全体的に少しばかり大人びていた。

恐らく、あれは三、四年後の彩さんなんだろう。

どうやってそんな彩さんが目の前に現れたのか？ どうやってこの時代に來ることができたのか？ ——なんてことに考えを巡らせるのは、ナンセンスだとわかりきっている。相手は、数年間世界中の警察を弄んでいる犯罪者だ。不可能を可能にしている存在なのだ。少々の非科学的要素を認めなければ、そんな人達とまともに向き合えやしない。この程度のことでは混乱している場合ではない。

今僕が早急に考え、できる限り早く結論を出すべき問題は——

——今現在の彩さんに「そのこと」を伝えるべきか、ということだ。

今この教室にいる彩さんには、まだそんな兆候は見られない。窃盗の常習犯に成り下がるような素振りはないし、そんなモチベーションも見られない。だから、止めるなら今ということなんだろう。

彼女が想い人だということをのぞいたとしても、少なくともクラスメイトとして、友人として、何かしら言うのが当然だろう。たとえ佐々谷の言う通り、『これ』が僕と彩さんの恋愛模様を描いた物語なんかじゃないにしても、そんな純情なハッピーエンドへ向かう物語なんかじゃなくても——せめて、せめてせめて、僕が友人を悪の道から救う、そんな勧善懲悪的な物語にする必要はあるんじ

やないか？ 未来的事実を知ってしまった僕が、それを止めるために奔走する物語にする必然はあるんじゃないか？ そんな正義感——とはいかないまでも、それでもいくらかの焦燥感を伴った義務感のようなものが、僕の中に沸々と沸き起こり、巻き起こる。

……しかし、一体、何を言っただけで上げるべきなのだろうか？ どうやって止めるべきなのだろうか？ どんな言葉で止めるべきなのだろうか？ 例えば、休み時間に彩さんが「よっす、加賀原」なんて声をかけてきたときに、一体全体僕はというリアクションを——

「——よっす、加賀原」

僕は飛び上がった。

その反動で膝を机の裏面に強打し、椅子ごと転びそうになり、「うつつ……」とうめきながら顔を上げると、

「何やってんだ？ 新たなリアクション芸？」

と、小首を傾げている彩さんだった。

僕はなるたけ冷静を装って、

「……や、やあやあ、彩さんじゃあないか。ぐーてんたーぐ。一体僕に何ようでござるかな」

と、極めて当たり障りなくナチュラルにオーソドックスに返答をした。

しかし、ナチュラル過ぎたのが逆に不自然だったのか、はたまた偶然にも読心術のスキルでも持ち合わせていたのか、彩さんは首を右に傾げ、

「なんじゃ、その、明らかに動揺を押し殺したような不自然な返事

は」

……簡単に見透かされた。

「いや、別に、用ってほどでもないけど。ここ最近、お前と話してないからさあ。どんな調子かと思ってね」

そう言って、腕を組みながら笑みを僕に向けてくる彩さん。

この数日間、僕と全然話していないことに、彩さんもちやんと気付いていたとは……。いやはや、少々驚きで、そして——少し嬉しかった。彩さんの中で、僕も話し相手の一人として数えられていたということだ。声をかけることもまともにできなかった数カ月になれば、これは大きな進歩だ。

そんな感慨に浸っている僕の目の前、

「……ところで、加賀原、一つ聞きたいんだけど」

と言いながら、彩さんは前の席の椅子をがらりと引き、その上にどさりと座った。その顔には影が入り、背後にはおどろおどろしい空気がまとわりついているのが何となく見える。どこことなく、今から彩さんの口から発せられるだろう話題の不穏さ———とか、厄介さを暗示しているようだった。

僕のこめかみをたらりと冷や汗が垂れたが、彩さんはそんな僕の反応に目もくれず、机上に肩肘をつき、手の上にあごを乗せて、

「あんた、アクセって、持ってる？」

「……え？ アクセサリー？ ……いや、持っていないけど」

「ネックレスも？」

「持っていない」

「ピアスも？」

「持ってない」

「指輪も？」

「持とうと思ったこともない」

「……………よし、うん。いい子だ」

あごを撫でられた猫のような満足げな表情になった彩さんは、ずいっと手を伸ばし、僕の頭をこしこしと撫でてきた。

なされるがまま、僕は頭をがくがく揺らしながら、

「……………というか、何で急にそんな質問を？ ……えーと、何か、あったの？」

「うむ。よくぞ聞いてくれた。あったもあった、オオアリクイだ。

実は、昨日——」

「そうか、あったんだね！ そりゃあよかった！ 本当によかった！
じゃあ、そんな素晴らしい結論が出たところで、僕からちよつとばかり新鮮で深遠な話題を振りたいんだだけ——」

「——いいから、聞きなさい」

むんずと襟首を引っ張られ、ぐえっと喉を詰まらせる僕——話の流れが変だったんで、何とか断ち切ろうと思ったのに……。僕の逃避行は甲斐なくあっけなく無駄に終わってしまった……。

彩さんは僕の襟から手を離し、再度机に両肘をつけて、

「実は、昨日、響子と駅前をぶらついてただけどさ。そこで二人組のチャラチャラした男に、いきなり話しかけられたんだよ。『今暇？』とか『一緒にお茶しよう』とか言ってきてね。ありゃあもう、あからさまなナンパだった」

「……………何か、気に食わなかったの？」

「いや、別に、ナンパされること自体は別にいいんだ。そりゃあ、

あたしみたいな麗しき少女が街中を歩いてれば、声をかけたくなるのが自然の理ってやつだからね。それは当然で仕方のないことだよ。誰も恨むことはできない。強いて言うなら、あたしという存在を創りたもうた神の罪でしかないさ」

「……あ、その人達、しつこかったとか？」

「いや、そうでもなかった」

「あんまりイケてなかったとか？」

「いや、そこまでじゃなかった」

「……じゃあ、何が不満なの？」

「そう。確かに、途中まではまったくもって不満なんてありはしなかった。少しばかり時間が無駄になったけど、それくらいで憤る彩さんじゃない。普通なら、まったくもって怒る必要なんてなかったはずなんだ。なのにねえ、あいつら、響子にしつこく付きまとった挙句に、あたしの方を見てきて——」

ここで彩さんは一息つき、急に両の眼をかつと見開いて、

「——『妹さんも一緒に』とかぬかしやがったんだっ！」

どすると、判決を下す判事がごとく、机を叩きながら言うてくる。

「だって、おかしいだろ？ あたしらは同い年！ 誕生日もほとんど変わらない！ おまけに、あたしの方が二センチほど身長は高いんだ！ それなのに、それなのに、そんなあたしを妹って！ 妹って！ どんだけあたしをなめてくれてるんだと！ おかしい、おかしい、おかしいっ！」

どんどんどんどん、暴れ太鼓のように僕の机を連打する彩さん——何事かと周りのクラスメイト数人がこっちを振り返ってき
て、少しばかり気まずい……。

「おまけに、その後から響子が勝ち誇ったような顔してきてね！
あたしに嘲るような笑顔を向けてくるんだ！ 見下したような視線
を向けてくるんだ！ 先週へあんなこと〓があつたもんだから、余
計だよ！」

「……『あんなこと』？」

「え？ あ、いやまあ、いいんだ、そんなことは。……とにかく！
あたしは考えたんだよ！ あの時、あの場所で、あたしに足りな
かったもの！ 響子にはあつて、あたしにはなかったもの！ ずつ
と考えた！ 一晩考えた！ そしてついさっき、一つの結論が出た
んだよ！」

「……それは？」

僕はすでに八割ほど興味がなかったのだが、礼儀をわきまえると
いう意味で、とりあえず聞いてみた。

彩さんは顎を持ち上げ、ちよんちよんと首元を指さして、

「これだよ、これ」

「……どれ？」

「ここ、ここ」

「……首？」

「その上だ」

「……鎖骨？」

「違う！ その上にかかってるやつ」

「……鎖骨の、上？ ああ————ネックレス」

僕の回答に、彩さんはこくと頷いた。

「そうさ。誕生日にお母さんに買ってもらったとか言ってね。シル
バーの一万くらいするやつをこれみよがしに付けてるんだよ、響子

は。そのせいで——たったそれだけの違いのせいで、あたしとあいつは姉妹に見られたってことだよ」

……なんだか、それだけじゃないような気もしないでもなかったけれど、僕はそれを口に出さず、

「あ、彩さんは、そういうのつけないの？」

「……ふんっ、兄貴の財布の紐が堅いのさ。買うのも許してくんないし。まだ早いってね。今時、どんな箱入り娘だ。まったく、時代錯誤な兄だよ。アクセの一つも持っていない女子高生なんて、この高校にだって滅多にいないよ。天然記念物だよ。絶滅危惧種だよ。お小遣いもなかなか堪らないしさあ……。ほんとに、これだから格差社会は……」

彩さんはぶつぶつ言う。

ゲームとマンガ本が積み上がったあの部屋を思い出し、お小遣いが足りないのは自業自得では？———という意見を飲み込んだところで、僕は一つ、ぽんと思いついた。

『これ』はある種の悪戯みたいなものだけど、それでも僕にとっては急を要する疑問。僕の中に巣くうモヤモヤをいくらか晴らせるかもしれない質問。彩さん自身が『こういう話題』を振ってくれたからこそ、今この瞬間だからこそそのチャンス。何だか彩さんを試しているようで少しばかり気が引けたが、しかしこれもこの人のためだと考え直し、僕は言葉を続けた。

「そうか、ふふ、じゃあ———怪盗『砂時計』にでも頼めば、いいもの貰えるかもしれないねえ？」

と、薄い笑顔を作ってみてみた。そして、じっと、彩さんの反応を見る。どんな微細な反応も見落とすまいと、ささいな違和感も

見逃すまいと、じっと視線を送る——けれど、彩さんはあからさまにきよとした顔をし、ぱちくりと瞬きをして、

「へ？ いやまあ、そりゃそうだろうけど——でも、わざわざ『砂時計』に頼むなら、おいしいものの食べさせてもらった方が数万倍得に決まってるだろう？ なんせ、あれだけ宝石持ってるんだから、きっと大金持ちだろうし」

何バカなこと言ってるんだい——とでもいうような表情で言ってきた。

多分、そういう思考が佐々谷との大きな違いなんだろうね——というツツコミをまたも心にしまい込みながら、この彩さんの反応に相對して、僕は少し安堵した。……この反応からして、やっぱり彩さんは『そういう事情』は知らなさそうだ。無関係そうだ。この表情で、この返答で、僕に対しシラをきってるとか、演技してるとか、そんなことはどうしても考えにくい。そうは思えない。十中八九、この時点の彩さんはシロだ。

やっぱりか——と、彩さんに気取られないように僕は嘆息する。

正直期待外れだと思った部分もあったけれど、これは当然喜ぶべきことだ。この友人が、現時点では犯罪者ではないということ。今はまだ止められるかもしれないということだ。

少しばかり、僕は気が楽になった。

この彩さんと話す分に限っては、何も気に病む必要はないんだ。今まで通りに接していればいいんだ。フレンドリーにしてくれた分には、フレンドリーに返せばいいだけだ。返していいんだ。難しいことを考えなくていいんだ。僕は思わず、思いもよらず、ひとりにちに笑みをこぼしてしまった。安心が顔に出てしまった。そして、何かもっと盛り上がる別の話題でも振ろうと、微笑と共に視線を上げた、けれど——

「――あ、そうだ。怪盗『砂時計』といえなさ、昨夜の特番見た？
いや、あたしも〈鷹野〉にメールもらって慌てて見たんだけどさ、
あれ、めっちゃめっちゃおもしろかったよねえ？」

と話題を振られ、一気に気分が陰った。二週間前の人生不動のワ
ーストな帰り道が、一瞬で僕の脳裏にフラッシュバックする。『鷹
野』という名前が、ワードが、単語が、当然のごとくその引き金だ
った。

――そうか、そりゃそうだ。昨日も二人はメールで楽しく話して
たんだ。

たかだか二週間ぶりに話しかけられただけで喜んでる自分が、な
んとみみっちいのかと思ってしまう。勇氣も度胸もなくこそこそと
僕が彩さんと距離を取っている間にも、彩さんと鷹野はお互いに交
友を深めているのだ。その間僕は一体何をやってたんだろうと、自
己嫌悪が始まってしまう。

もはや僕は相槌すら満足に打てる心境でもなかったのに、彩さん
ときたら、

「前、鷹野に借りたDVDでもさあ――」

「鷹野に教わったんだけど――」

「そしたら、鷹野がさあ――」

と、続けざまにあいつの名前を出してくる。こっちの心内を知る
わけでもないとはいえ、僕にとっては苦痛以外の何物でもなかった。
もう少し僕に気を使ってくれと思ってしまう。……いや、もしかし
たら、僕が意識してなかっただけで、以前から彩さんの話に鷹野が
登場する機会はこれほど多かったのかもしれない。この人とあいつ
の間柄を知らされたせいで、余計に僕がはっきりと認識するようにな
っただけなのかもしれない。

その後も休み時間の間中、彩さんは途切れることなく鷹野が登場する話を聞かせ続けてきて、僕は一本ずつ針を心臓に刺されているような気分だった。おかげで、休み時間の終盤には純然たる針のむしろ状態だった。

そして、休み時間終了一分前、ようやく話したいことを話し終わったのだろう、話が途切れた彩さんが、

「あ、そうだ、加賀原、ちょっと頼みたいんだけど」

と言ってきた。

これもまた鷹野が登場する話なんだろうと、僕は相槌を打つのすら嫌になっていたけれど、死力を振り絞って、僕は「何？」と返事した。

「これなんだけどさ」

と言いながら、彩さんは僕の机の上にことりと何かを置いた。視線を落としそれを見てみると、『それ』は——紙ぺら一枚と、筆箱ぐらいの大きさの、包装紙にくるまれた箱だった。

僕は彩さんの顔を見上げながら、

「……え、と。何、これ？」

「いやあ、悪いんだけどさ」

彩さんは申し訳なさそうにぼりぼりと頭をかいて、

「次の休み時間にさ、教室で、この紙に書いてあることを読みながら、この箱をあたしに渡してくれないかな？」

「……………は？」

意味がわからなかった。まったくもってわからなかった。……ええと、今渡されたこの箱を、次の休み時間に、渡す？ 彩さんに？ 紙に書かれたことを読みながら？ えっと、それは――

「――何のために？」

「いいから、頼むよ。お願いだから」

「い、いやあ、そう、言われても……」

済まなそうな笑顔で僕に合掌してくる彩さんに、僕は答えあぐねる。

「じゃ、頼んだかね」

僕の困惑をすぽんと無視し、彩さんは手を振り振り、自席へと帰って行ってしまった。

「ちょ、ちょっと、そりゃ、こま――」

――キーン、コーン

僕の叫びは、これでもかというほどタイミング良く鳴り響いたチャイムの音によってかき消された。

第七話「教室にて？」その二

次の化学の授業中、板書もそこそこに、僕はずっと考え込んでいた。

彩さんは何でまたこんなことを頼んできたのか？ 何で僕に頼んできたのか？ そこにどんな意図があるのか？ そこにどんな目的があるのか？ そしてまた、僕自身にはどういう影響があるのか？ だってそもそも、『あたしに渡して』も何も、この箱は元々彩さんが持っていたものじゃないか。単に一時預かって返すようなものだ。僕が受け取って、もう一度これを彩さんに渡すことに、一体何の意味があるのだろうか？

おまけに、この紙に書いてある文章もよくわからない。

一通り読んでみたけれど、そこからは何も分からなかった。何も読みとれなかった。確かに、そこに書かれている文章は純然たる日本語だ。読めないわけではない——しかし、表現が抽象的すぎて、意味がこちらに全く伝わってこないのだ。何かの映画かドラマのセリフっぽい気もするが、どんなジャンルのもので出てくるのかわからない。どんな場面で出てくるのかもよくわからない。

結局わけがわからないまま、次の授業が終わってしまった。

彩さんは、『次の休み時間に』と言っていた。つまりは、この十分の休憩の間に、僕は先刻言い渡されたミッションを遂行しなければならぬということだ。

彼女の意図はまったく理解できなかったが、わざわざ頼まれたことを黙殺するわけにもいかない。仕方なく僕は考えるのを諦め、渡された二つのアイテムを手にとって彩さんの席へと向かった。

席では、彩さんが腕を組み、目を閉じ、厳粛な表情で座っていた。まるで出前ピザが一時間経っても届かないような、イライラとしぶれを切らしているような雰囲気だった。

「え、えと、あ、彩さん……」

僕は彩さんの傍らに立つと、箱をすっと差し出し、逆手に持った紙のセリフをカンニングしながら、

「え、えと……せ、『先月の君の気持は嬉しかった……』……………いたっ！」

――机の下から向こうずねを蹴られた。

僕は紙箱を机の上に落とし、膝を抱え、「ううう……」と悶える。悶えながら、涙目で彩さんを見上げ、

「な、何するんだ……」

「もっと大きな声でっ、クラス中に響き渡るようにっ」

彩さんは僕の耳元に顔を寄せ、ヒソヒソ声で怒鳴ってきた。

「え、えっっ？ そんな恥ずかしいじゃ――」

「――きっ……」

今度は睨まれた……。

僕は仕方なく立ち上がり、こほんという咳払いに次いで、

「……………え、えーと、せ『先月の君の気持は嬉しかったよ。橡彩さん。もちろんあれは社交辞令でしかないことはわかってはいるけれど、それでも僕は本気なんだ。僕、この加賀原元に、あらん限り、精一杯のお返しをさせてください。どうぞ、これを』」

先刻よりいくらか大きな声で、書いてある通りの文章を読み上げた。いくらか棒読みだったろうけど（というか、どんな感情を込め

ればいいのかもよくわからない）、意味はちゃんと伝わったはずだ。

「うむ。しようがない。受け取ってやろう」

彩さんはどこかの王様のように仰々しく頷くと、片手でぞんざいに僕の手から紙箱を奪い取った。

渡すというより取られたという感じだが、しかしこれで彩さんの目論みは達したことになるはず。これで僕は、任務を達成したことになるはずだ。

しかし、渡したはいいけど、この後どうするのかまでは聞いていなかった。次の任務を待つがごとく、

「……………」

と、そのままそこに立ち尽くしていると、

「……………しっしっ」

と、彩さんは『あっち行け』というジェスチャー。

僕はわけがわからず、すぐごと彩さんの席を離れた。自分の席にたどり着き、ちらりと彩さんの方を振り返ってみたが、彩さんは自席で腕を組んだまま、言外に誰かに何かを誇示しているような、傲慢しているような、尊大で雄大な姿勢及び表情で座っている。

……最後まで、まったく意味が分からなかった。

ここまでの一部始終を説明されれば、もしかしたら大概の人は予想がついてしまうことかもしれない。客観的に見れば極めて明確で明白で明快なことだったのかもしれない。

しかし、その時の僕にはまったくわからなかった。これっぽっち

も考えが及ばなかった。僕がようやくその答えに気付いたのは、ふとカレンダーを見た時——その日が、三月十四日であったことを思い出したときだった。

すなわち、今日はホワイต์デー。

先月のバレンタインを単なる平日として過ごしていた僕は、返す相手などいるわけもなく、その存在を全くと言っていいほど忘れていた。今日この日こそ、一年で三本の指に入るほど、男子が女子に贈り物をして意味がある日であるということ。

その日の昼休みに、佐々谷から聞かされた話によると、つまりはこういうことだったらしい。

先週、彩さんと佐々谷を含めた女子四人で会話をしていたところ、そのうちの一人が、同級生に告白された返事をどうしたらいいのかと相談してきたのである。

年頃の女子が集まっている場だ、その話題は大変盛り上がり、流々とその類の会話が繰り広げられた。そしてついには、それぞれの過去男子に愛の告白をされた自慢話大会になったそう。

しかしその中で一人だけ、彩さんだけがついていけなかった。

別に彩さんに魅力がないとは（僕は当然）思わないけれど、一般的には珍獣とさえ揶揄されるような性格であり、さらには学年上位ランカーの鷹野と親密な人だ。わざわざこの人に真っ向から恋愛感情をぶつけようとしてくる男は今までいなかったらしい。そんなわけで、彩さんはその場で自慢できる話が皆無だった。

おかげで、彩さんは他人の自慢話を唇をかみしめながら無言で聞き続けるだけになってしまったそう。それが、彩さんにとって殊更に悔しかったらしい。

そんなわけで、彩さんは何とか他の三人を見返してやろうと画策し、その次の週に控えていたイベント、すなわちホワイต์デーに目をつけたのだ。

さらにクラスの中で目ぼしい人物として僕に目をつけ、あんな依頼をしてきたということ。……まあ、彩さんらしいっちゃあ、彩さ

んらしい。僕への被害も損害もまったく省みないところかも。

もちろん、その真実に行き当たった直後の僕は、放心し、うなだれるだけだった。

そんなつもりはなかったのに、僕は公衆の面前で堂々と彩さんに告白してしまったということになる。……そりゃあ、僕の感情にのっとれば間違ってはいない行動ではあるだろうけど、あんな告白、アホにもほどがあるだろう。そもそもセリフがバカバカしい。恥知らずもいいところだ。あの文面を僕自身が考えたなんて絶対に思われたくない。

唯一の救いは、明後日から春休みだということだ。

一カ月弱のこの休暇中に、クラスメイトにはぜひともさっきのあの出来事は忘れ去ってほしい。そして僕自身も、きれいさっぱりと忘れ去りたい。そのためには、当分彩さんに会いたくないというのが本音である。といううか、クラスメイトにもあまり会いたくない。家でひっそりとゲームに没頭していたいものだ。

なのに、その日の昼休みには、

「おっす、加賀原。お前、見かけによらず大胆なんだなあ」

と、さも感心したかのような表情で南川が近づいてきた。

「まあ、若いって言うのはいいことだ。……と、それより、見たか？　今朝の新聞？」

「……………新聞？　いや、読んでないけど、まさか——」

「そうだ。その通りだ」

南川はこつくりと頷き、

「来月、また怪盗『砂時計』が出るらしいぞ」

第八話「教室にて？」その一

「――で、昨日メールにも書いたけどよう」

始業式が終わった直後の小休憩、約一カ月ぶりに対面したというのに、南川は久しぶりのあいさつもなしに、いきなり僕に水を向けてきた。

実際のところ、南川とは春休み中も毎日のようにメールのやり取りはしていたので、僕自身も久しぶりという感覚がまったくもって無かったというのが、正直なところであり実際のところであった。というか、むしろ授業が始まったおかげで日中のこいつとのコミュニケーションが不可能になり、少しばかり自由になれたと思っていたくらいである。……まあ最も、怪盗『砂時計』の予告日が近づいてきたおかげで、その自由も至極頼りないものだろうけど。

仏頂面をした南川は、僕の前の席にどっかりと座り、

「どうだ？ 目途はついたか？」

「……なんの目途だっけ？」

「おい！ ちゃんとメール読んだんか！」

叫びながら、南川はべしんと僕の机を叩いてきた。

「そんなんだからお前は戦果がゼロなんだ！ おまけに毎回迷子になりやがるし！ この前なんか電車途中で迷いやがって！ そんなバカは初めてだ！ 怪盗より、お前の頭のネジを探す方が先じゃないか！」

……余計な御世話だ。

「とにかくだ！ ネジは俺がそこら辺の百円ショップで探しといてやるから、お前は『砂時計』探しに集中しろ！ そのために必要なんだろうが！ 手に入れなきゃならないんだろうが！ 遠野岩美術とおのいわ館のチケットを！」

……ああ。そういや、そうだった。

三学期終了間際、ニュースで取り上げられた怪盗『砂時計』の予告状。その予告日は六週間後——すなわち、今日から数えて八日後の土曜だったわけだが、その場所が遠野岩美術館という、隣町の美術館だったのである。

しかし、この美術館、我ら一般人には少しばかり敷居が高い。

そもそも、チケットが一般発売されていないのである。この美術館に入ろうと思ったら、もはや〈紹介状〉と言った方が正しいような、一見さん断固お断りな入場券を手に入れなければならない。そんなんでも美術館の営業が成り立つのかという疑問が浮かぶが、この美術館は、いわゆる金持ちの道楽——あるいは、所有物自慢のために運営されているようなものである。

遠野岩家という資産家の当主が、自分のコレクションを洋館に並べ、展示しているのだ。

この資産家、中東の辺りに相当な資産を所持しているという話で、洋館一つくらいならどうにでも運営できるほどなのだそうだ。なんだから、この美術館に施されたセキュリティもそこらの公共美術館と変わらないか、あるいはそれ以上。そして展示物も一流。怪盗『砂時計』の標的たる資格を確実に備えた場所ではあるのである。一般人がここのチケットを手に入れようとするれば、数万円はかかるとさえ言われている。

方法も完全に限られている。それなりのコネをもって誰かしらに譲ってもらうか、あるいはネットオークションで競り落とすくらいだ。……しかし、この美術館が怪盗『砂時計』の標的にされたこと、そしてさらにオーナーが『犯行予告日も通常運営する』と公言した

ことによって、そのチケットの値段はさらに高沸しているのである（まあ、そんなことができるのも、この美術館が完全なる個人私有のものだからなのだろう。あるいは、オーナーとしては、耳目を集めることでのアピール効果も目しているのかもしれないが……。警察からしたら、ハタ迷惑極まりない発言だったろうに）。

そんなチケットを手に入れるなんて、大人だって難しいのに、未成年には不可能に近いミッションだ。いい加減、今回ばかりはこいつも諦めるんじゃないかと僕は期待していたのだが―――残念ながら、そんな希望的観測は見事に外れた。

「俺も春休み中使って親戚中を当たってみたが、やっぱり見つからなかった。あとはやっぱ、オークションでも探してみるしかないな。つつても、今じゃもう百万円以上のねがついちまつてるし。うーん……。お前はどうかだった？」

あごで僕を指しながら尋ねてくる南川。

そもそも、その要件自体を忘れてたんだから、そんなもんを探してるわけもないだろうに。こいつはわかって聞いてるのだろうか？ ……まあ、忘れてなかったとしても、探していたかどうか怪しいけど。

僕は肩をすくめながら、

「いやまあ、僕も方々手を尽くしてみたんだけど、やっぱり駄目だった。十親等先の親戚にまで聞きまわってみただけだね。いやあ、本当難しい。悔しいことこの上ない」

「……怪しいな」

南川はじとりと僕を睨んできた。

「お前、本当だろうな？ 本当に探したんだろうな？」

「ほ、本当だとも！」

言いながら、僕はどしんと胸を叩く——そして、その反動でげほげほと咳き込んだ。

南川は何だか意味ありげな笑顔を僕に向けてきて、

「そうか。ふふん。……ようし、じゃあ、このクラスの全員に聞いてみる」

「……………え、な、何を？」

「チケットを持ってるかどうかだよ」

「く、クラス全員ッ？」

——いや、ちょっと待ってくれ！

僕は思わず机の上に前屈みになり、

「い、いやちょっと、それはハードルが高いんじゃない——」

「ふん、そうかあ？　だって、お前、十親等の親戚にまで聞きまわったんだろ？　それに比べたら、断然楽じゃないか。全員ここから見える範囲にいるんだから。そばに行って話しかけるだけだ。電話代すら無駄にならない。簡単で簡単だろう？　できないとは言わせねえ」

「ったって、そ、それは——」

「じゃあ、頼んだぞ」

そう言って、南川は僕の反論を無視するように聞き流し、自分の席へと帰ってしまった。

第八話「教室にて？」その二

……できるわけないだろう。

ただでさえ、このクラスになってから一日も経ってないってのに。いきなりそんなわけのわからない話題で話を聞きまわるなんて、絶対にヒかれるに決まってる。変な奴だと思われてしまう。……いきなり初日で友達作りを失敗してしまう。

——うーん、しょうがない。誰にも声を掛けないままで、明日南川に「ちゃんと全員に聞き回ったぜっ」と嘘をつこうか？

……いや、これはいかにも浅はかだ。対象はこのクラスの人なのだ。もし誰か一人に南川が確認を取れば、それだけでばれてしまう。あまりにも脆すぎる。そんなんじゃ意味がないな——

「——何考えこんでんの？」

じゃあ、南川が声をかけそうな人にだけとりあえず聞いておくとか？

……うーん、しかし、僕も南川の交友関係をすべて把握しているわけじゃない。一体誰に声をかけておくべきなのか？ ……いや、そうか。南川が友人だけに確認すると決まったわけじゃない。そうになると、一体どういう人選をすれば——

「——おい、ちょっと、何考えこんでるんだ？」

というか、そもそも、何で僕がそんなことをしなくちゃならないんだ？ 僕がそんなことをする責任もメリットもないんだ。わざわざ声をかける必要なんてないんじゃないか？ さっきのだって、わかりきったただの冗談なんだ。そこまで守る義理なんて——

「――おい、こら、元」

それに、南川だってそれくらいわかってるだろう。あいつも冗談のつもりで言ってたんだろう。うん、そうだ。きつとそうだ。だから、やっぱり、声をかけるなんてバカなこととはしなくても――

「――聞けえええええいっ！」

「いたあ！」

後頭部にチョップを食らい、僕はドリブルされるバスケットボールのごとく、ごつんと額を机に勢いよくぶつけた。

鼻と額をヒリヒリさせながら顔を上げると、

「一体何を真剣に考え込んでるんだってのっ」

肩にかかった一つ縛りの後ろ髪をさらりと払いながら、やや憤り気味の表情で、彩さんが僕を見下ろしている。

「何やら南川と話しこんでたけど、また怪盗『砂時計』のこと？」

「……ああ、そうだよ」

僕は後頭部をさすりながら答えた。

「まったく、よくやるねえ、あんたら。二年になっても相変わらずか」

彩さんはからからと笑いながら言ってくる。

二年になっても相変わらず――いや、別に僕だって、好き好んでこうなってるわけじゃない。クラス替えという折角の機会だったというのに、神は僕のことをきれいさっぱりと見離したのだ。ク

ラスの半分は知らない人ばかりだというのに、さも当たり前のように南川は同じクラスにいた。

そして、この橡彩さんも。

昨年度末、僕にとっては第三次世界大戦勃発にも等しい大惨劇が起こり、それは取りも直さず彩さんを爆心地としていたものだから、僕としてはできる限りこの人と距離を取りたかった。僕にとって想い人であるにも関わらず——いや、真の想い人であるからこそ余計に、この人の近くにいただけで、僕は精神をのしのと踏みつけられるような気分になるのだ。

僕はこの人としばらく顔を合わさなくて済むような環境になってほしかったというのに——その希望さえも、神はあっさりと無視したのだった。

「あれでしょ？ 遠野岩美術館がターゲットになってるってやつ。チケットがなかなか手に入らないもんだから、あちこちで混乱してるってね」

「まあね」

「……あ、まさかあんたもあそこのチケット探してるのか？」

「そうさ。僕……というか、南川がね。ついさっき、クラス内でもチケットを持ってる人を探し回れというお達しを受けて、頭を抱えてたところさ」

説明しながら僕は肩をすくめた。そして何ということもなく、ついでに、

「……あ、そうだ。もしかして、彩さん持ってない、あそこのチケット？ 持ってたなら、ぜひとも譲って欲しいんだけど」

「遠野岩美術館のチケット？ ああ——」

「——持ってるよ」

「……はは、わかってるよ。あんなの、大人でも滅多に手に入れないものだ。ましてや高校生が持つてゐるなんてことはありえないよね。聞いた僕が悪かった。そうだね、とにかく無駄だとはわかってるけど、他の人を当たってみ——って、え？」

僕は思わず顔を上げ、彩さんの顔を直視し、

「……あ、彩さん、い、今、なんて？」

「だから『持つてゐる』って。あたし。遠野岩美術館のチケット」

僕はあんぐりと、下あごを垂らしてしまった。

「お父さんが知り合いから貰ったらしくって、あたしにくれたんだ。二人分。冬香と行っておいでってね。だけど、冬香もあたしも興味ないからさ。これどうしようかと、二人で悩んでたところなんだ」

「……あ、あの、それ、一人分でもいいから、譲ってくれませんか？」

「ええ？ うーん、どうしよっかなあ……。だってこれ、結構貴重なものなんでしょ？ 鷹野にでも売ろうかと思ってたんだけど……」

にやりと、悪戯な笑みを僕に向けてくる彩さん。

……『鷹野』という単語に、僕の胸の中にまたどろどろとした感情が流れ込んできたが、僕は懸命にその気味悪さを押し殺し、我慢し、耐え抜き、何とか彩さんに笑顔を返しながら、

「ど、どうか、お願いします。それだけで僕の心労がだいぶ減るんだ。何でも言うこと聞くからさ」

「ふーん……『何でも言うことを聞く』ね。……ふふ、よし」

彩さんはうんと一つ頷き、

「わかった。このチケット、あんたに譲ってあげるわ。ただし、あんたに聞いてもらう願いは考えとくから。絶対、それ、順守するんだよ？」

後ろ髪をさらりと撫でながら、彩さんはやけに嬉しそうな、楽しそうな顔を僕に向けてきた。

その笑顔を見て、正直僕は後悔し始めた——この発言、早まったかもしれない、と。

第八話「教室にて？」その三

次の日の朝、僕は前日のクラス分け発表の直前以上に緊張した心持で登校した。

一体全体彩さんはどんな願い事をしてくるのか、僕にはまったくもって予想できていない。彩さんの思考パターンなど、僕ごときに読みとるのは不可能だ。もしかしたら、南川以上の無理難題をふっかけられるかもしれない。さらに僕の状況は悪化してしまうかもしれない。僕は自分で自分の首を絞めてしまったのかもしれない……。そんな不安と後悔を抱えながら、僕は我が教室へ続く廊下をとぼとぼと歩いていった。

「……あ」

教室のドアに手をかけたところでふと僕に気付き、僕の方へ視線を向けてきた女子がいた。低血圧なんだろう、普段にも増して眉を吊り上げ、銀縁眼鏡の奥の目を瞑ってるんじゃないかと思うくらいに細めている佐々谷響子だった。

「ふん。朝っぱらから景気の悪い顔してるわね。こっちの気が滅入ってしょうがないわ」

僕は、どっちの顔の方が暗いだろうかと思いつつも、

「……しようないだろ。こちとら問題が山積みなんだ」

「どうせ、彩のことでしょ」

佐々谷は教室内に歩を進めながら、つつけんどんに言ってくる。

「何て声をかけていいのかとか、どんな風に接したらいいのかとか、そんなくだらないことでぐじぐじ悩んでるだけなんですよ。そんな脳内シミュレートだけで三年間が終わっちゃうわよ」

「そんな簡単に言うなよ」

「簡単なことじゃな——」

「——簡単じゃないよ！」

僕は思わず荒げてしまった——荒げてしまってから、他の人に聞かれたんじゃないかと教室を見渡す。しかし、教室内にはまだ生徒は四人しかいなく、四人ともこちらを気にしている様子もなかった。ので、僕は少し胸を撫で下ろしながら、いくらか声のトーンを下げて、

「……簡単じゃなくなってるんだよ」

「……………何が？」

佐々谷は、僕のリアクションに驚いたんだろう、少しばかり目を開きながら尋ねてきた。

僕は両肩をすくめ、

「鷹野が彩さんの幼馴染だって聞かされてからというもの、隠す必要がなくなっただろう、彩さんの口から『鷹野』って名前を聞くことが増えてるんだよ。やたらに多くなってる。一回の会話で最低六回は口にする。その度に僕は歯噛みしてるっていうのに。……もう、精神的に辛いつてことさ」

「……一度に六回も？」

「そうさ。昨日のメールの内容とか、テレビ番組についてとか、帰り際に話した内容とか。ひっきりなしだ。その度に、二人の仲がどれだけ深いか気付かされる。僕が入る余地がないことを思い知らさ

れる。そんなことを毎日繰り返してて、暗くならない方がおかしい
だろ。……………他にも、まあ、色々、あるにはあるんだけど……………」

「……………他にも色々？」

「あ、い、いや、それはまあ、こっちの話なんだけど……………」

僕は慌てて取り繕い、

「と、とにかく、僕は現在、相当に参ってるってことだ」

「……………ふうん」

佐々谷は眉間にしわを寄せ、目元のほくろを人差し指でぽんぽん
叩き、考え込むような顔になった。次いで、

「……………なるほどね」

と、何やら納得したように頷く。

僕は小首を傾げながら、

「……………何が『なるほど』なんだ？」

「ふん。つまり、あんたも、そして彩も、まだまだ子供だってこと
よ」

「……………？ 子供って、何がだよ。君だって同い年じゃないか」

「精神年齢の話をしてるの」

「僕の精神の、どこが子供だっていうんだ」

「まんま子供じゃない。まったくもって分かってないじゃない。二
人とも。ようは、『どんな愛の言葉よりも、ジェラシーの方がずつ
と確実に明確な愛の証である』ってことよ」

「……………はあ？」

僕は上ずった声を上げてしまった。

……いやいや、何でまた、いきなり『ジェラシー』なんて単語が出てくるんだ？　今までの流れからして、まったく関係ないだろうに。

「……しょうがないわね。一つ、いいことを教えといてあげるわ。いくら幼馴染と言っても、彩と鷹野君はそこまで突っ込んだ仲じゃないわよ。それでも彩とは七年の付き合いだからね、それくらいはわかってるし。……それに、彩が鷹野君のことをいまだにいつも名字で呼んでることがいい証拠でしょ」

捨て台詞のようにそんなことを言って、佐々谷は自席へと向かって行った。

第八話「教室にて？」その四

佐々谷が言いたいことはいまいよくわからなかったが——
ようは、彼女も少しばかり僕を慰めてくれたということなのだろうか？ まあ、まったくもって慰められた気にはならなかったけれど、
ともかく、そんなことより、だ。

そんな内情的問題よりも、ずっと深刻で現実的な問題が僕の目の前に転がっている。すなわち、彩さんはどんな頼みごとを僕にしてくるのか？ 彩さんの思考回路は極めて読みづらいため、余計に恐怖心が沸き起こってしまう。

……しかし、考えてみれば、これまたおもしろい展開ではある。
僕はこれから、彩さんに怪盗『砂時計』討伐の助力を得るということ——そして、その怪盗『砂時計』の助手が、その〈彩さん本人〉なのである。言ってみれば、彩さんが彩さんを捕まえるために動いているようなものとも言えるかもしれない。

数年後の彩さんなら、この展開もちゃんと既知なのだろうか？
この時に彩さん自身が僕たちにチケットを渡すこと。そして、そのために僕と南川が美術館を訪れるということ。これから僕たちが起こす行動など、あの人たちにしてみれば単なる前提条件に過ぎないのだろうか？

……いや、それはあまり考えられないか？
だって、路地裏で出会った時、『あいつ』はちゃんと僕に驚いていた。予定外、予想外という反応だった。つまりあの人たちも、過去のすべてを知っているわけじゃないってこと。だから、僕らの行動で彼らを止めることも可能だということ——やれば、彩さんのお兄さんの犯罪を止め、彩さん自身が犯罪者になることも止めることができるということ。

……そうか。お兄さんは、彩さんと冬香ちゃんの交際に関する可否の全権を握っていると言っていた。つまり、僕が怪盗『砂時計』

を捕まえれば、お兄さんに認めてもらえるチャンスもあるということだろうか？ 『これ』をそういう物語にすることも可能だと、そういうことなのか？ 悪を挫き、ヒロインとの障害を乗り越える、そんなヒロイックな話になるのだらうか？

……いやいやいやいや、まったく言っててバカらしい。お兄さんにどころか、僕はまず、彩さんに見染めてもらわなきゃならないわけだし。そんな自信もそんな資格も、僕は一ミリたりとも有していない。妄想もいいところだ。そんな妄言より先に―――とにかくにも、まずは目先の問題だ。

彩さんは一体全体僕にどんなお願いをしてくるのか？

――その時は、昼休みに訪れた。

気が気でない午前中を送った僕は、そわそわしながら、それでも何とか心を落ち着かせて昼食のお弁当を黙々と食べていた。そして、ハンバーグの最後の一きれを口に運んだところで、

「おっす、元」

と、何やら気合の入った表情をした彩さんが話しかけてきた。僕はハンバーグを飲み込みながら、

「こんにちは……………えと、その、願い事が、決まったの？」
「その通りだ」

両目を閉じながら、彩さんはううむと頷く。そして、

「はい、これ」

と何やら僕の目の前に差し出してきた。

視線を落とし、それをまじまじと見てみると、それは———B
4サイズの茶色の封筒だった。封筒自体は、どこでも売っていそう
な、『封筒』と言われて真っ先に思い浮かべるそのままのものだっ
た。表面は黄色くまっさらで、特に何も文字は書いていない。が、
その表面が三か所だけ、四角く切り取られてきた。そして、その隙
間から何やら白い紙がのぞいている。

僕はそろりと視線を上げ、

「……えーと、なに、これ？」

「この隙間のところに、書いて」

「……何を？」

「あんたの名前」

「……はあ？」

僕は声を裏返した。もう一度封筒を見降ろし、再び顔を上げて、

「僕の名前？　ここに？　書くの？　何で？」

「いいから！　早く！」

「い、いや、だって……」

ずいど眼前に封筒を差し出されながら、僕は言い淀む。

「だって、そんな、意味が分からないし。……それに、何やら怖い
よ。だって確か、どこかの漫画じゃ、こうやって名前を書かされた
FBI捜査官は、その直後に殺されたし——」

「あ、あと、ここにはあんたの親の名前ね！」

「僕の親まで殺す気か！」

——あ、悪魔か、この人は！

「……や、やだよ、なんか怖いよ！ 不気味だよ！」

「大丈夫だ。死にはしないよ」

「ほ、本当に？」

「本当だって」

「本当の本当に？」

「ああ、本当の本当だ」

「本当の本当の本当に？」

「ああ、本当の本当の本当だ—————というか、あんた、漫画の読みすぎだ。名前を書くだけで実際に死ぬわけないだろ」

……そりゃまあ、そうだけど。

「とにかく、ここに名前を書け。そうしないと、チケットあげないからね」

「……うーん」

しょうがない、と僕は肩を落としながら、しぶしぶとその記入欄に必要な事項をつらつらと書いて行った。……まあ、さすがに命までは取られないだろう（彩さんの性格もそこまで破綻はしていないと信じたい）。それに、もしこれが何らかのアンフェアな書類だったとしても、僕自身が内容を知らされていない以上、公文書偽造とかそこら辺の罪に引っ掛かるはずだ。法的手段に訴えれば、後から無効にすることも可能だろう。ここはあくまで法治国家日本であり、僕は日本国籍なのだ。

一通り埋め終わると、彩さんは僕の手から封筒をひったくり、

「よーしよしよし、これでよし」

と、むふふと気味悪い笑顔を浮かべた。次いで、封筒の中から紙きれを取り出すと、じゃじゃじゃんと、見せびらかすように僕の目

の前に広げて見せてくる。

その一番上の文字列を読んでもみると、

「——こんいんどけ？」

「そう、その通り」

彩さんは感じ入るように両目を瞑り、深く深く頷いた。そしてぱちりと片目を開いて、

「昨日一日、この世界最高峰の頭脳を使って、あたしはずっと考えていました。考えに考えました。昨日の昼休みに、あんたから得た『どんな頼みごとにも引き受ける』という権利。これを使って、いかにして最大限の金儲けをするのかということを」

……か、金儲け？

「残念ながら、あんたにとって至極残念ながら、あたしはまったくもって愚かではない。例えばあんたに数千万円の宝物を盗んでこさせるとか、あるいは一億円が当たるまで宝くじを買わせるとか、あるいはあるいは油田を掘ってこさせるとか、そんな非現実的なことにこの権利を行使するなんてことはしません。あたしはもつとずつと着実な方法を選びます」

……愚かというか、それが普通だと思うけど。

「一般人の生涯年収は、二億円から三億円と言われています。つまり、このお金から、最大限の金額を搾取すること、これが安全で着実な方法だと言えます」

……まー、そりゃそうだ。

「そして、あんたのこの三億円を手にする権利を得るにはどうすればいいか？ その方法を、あたしはずっと考えていました。……そして、昨日の夜、というか明け方四時頃になって、あたしはついに考え付いたのです！」

……んなことで徹夜したのか、この人は？ ————というツツコミを飲み込んだ僕の目の前、彩さんは口を大きく開け、

「——保険金があるじゃないか、と！」

びしっと、彩さんが僕の鼻先に人差し指を突き立ててきた。

「もちろん、今のあんたじゃ保険に加入したところで、大した保証金は得られません。最低、就職でもない限り。しかし、そんなのを悠長に待っていたら、他の人間に取られてしまうかもしれない。先を越されてしまうかもしれない。そんなわけで、先手を打つために、あたしはあんたの自署を手に入れたの！ これが、数年の後に二億円の価値を持つようになるのよ！ どう？ 恐れ入った？」

「……そうか、そうだった、君はバカなんだった」

「な、なんだとおおおお！」

彩さんは頬を膨らまし、ぎちぎちと僕の首を絞めあげてきた。しかし、すぐにぷいっと投げ捨てるように僕の襟から手を離してくれて、

「…………ふん、まあ、いいわ。泣こうが叫ぼうが、あんたの一生はもうあたしの掌の上なんだから。せいぜい、滑稽にもがくことね。後悔したって遅いんだから。こんなもの、あたしにはもう必要ない

から、あげる」

そう言って彩さんは、ようやく僕に遠野岩美術館のチケットをくれたのだった。

第九話「美術館にて」その一

今回の怪盗『砂時計』による遠野岩美術館への盗難予告については、いつもよりも大きな騒ぎが巻き起こった。この美術館のオーナーたる遠野岩家当主、遠野岩蒼次郎氏とおのいわそうじろうによって、

「怪盗『砂時計』を発見・捕獲したものに對し、本美術館に保管されている美術品の一つを無償で授与する」

というお触れが出されたからである。

そんな報奨が出ると聞かされれば、野次馬の眼の色が変わるのは当たり前だ。彼の美術館には数千万を超える名画や彫刻がいくつも並べられているのである。人一人を捕まえるだけでそんなものが貰えるというのである。宝くじなんかよりよっぽど期待値の高い金儲けのチャンスだ。

学校でも休み時間のたびに誰かしらがこのことについて話していたし、街を歩けば一分に一回はこの話題について話す人とすれ違ったり、テレビをつければ一時間に一回はどこかのチャンネルでこの事件を扱っていた。日本中———という言いすぎかもしれないが、それでも知る限りほとんどの人がこの事件に関心を持っていた。おかげで、希少なこの美術館のチケットは（元々でさえ数万円の値打ちがあったものだというのに）ここ一週間で数十万にまで高沸したという話だ。

正直なところ僕だって、彩さんから手に入れたこのチケットも、誰かに売って儲けた方が得じゃないかと思ったくらいだ（実際に、彩さんは「こんなことならチケットあげるんじゃないかった」と何度も呟いていた）。どう考えても、そっちの方が明らかに有益な使用方法だっただろう。

なのに、南川は

「そんな一時の誘惑に負けて、未来永劫続く榮譽を投げ捨てるような真似をするな！」

と言って、それを断固拒否。そして当然のように僕を引っ張って、予告日当日、この遠野岩美術館へと向かったのだった。

この美術館は、街中の外れ、工場なんかが立ち並んだ郊外に立っている。

外見は完全にいっぱしの美術館のそれだった。やたらに高い塀に囲われ、建物自体もうちの高校なんかより大きく、壁は夕日を反射させるほどに磨かれた白色。周囲の庭もきちんと手入れがなされていて、春や秋には一時間くらい散歩できそうなものだった。聞かなければ、そこが単なる私有地であるとはとても思えない敷地だった。バスと電車を乗り継いで僕と南川がその美術館にたどり着くと、やはり周囲は人だかり——しかし、前回の博物館に比べれば、その混み具合はいくらかマシなように見えた。まあ、前回よりアクセスが悪い場所だし、中に入れる人間が限られているため、集う気になる人間も少なかったのだろう。何十万もするチケットを手に入れたまで本日ここを訪れる人間など、酔狂な物好きしかないということだ。

人ごみをかきわけ、僕ら二人も入館口へとたどりついた。

チケットのもぎりのお姉さんは僕らをじろじろといぶかしむように見てきたが、チケットは本物なんだ、問題はなかった。数秒後、お姉さんも苦笑いのような顔になって（僕たちをどこかのお金持ちの子息とでも思ったのだろうか）、普通に中へ通してくれた。

中世の城を思わせるような赤い絨毯が敷き詰められた階段を上り、左右に伸びた廊下に出ると、南川は

「よし、じゃあ、俺はこっちを見回る。お前はそっちの部屋だ。ちやんと怪しい奴を捜すんだぞ」

と言って、ずんずんと左の方へと進んでいってしまった。

取り残された僕は、ここで立ちぼうけになっているのもなんだな
と思い、しぶしぶと右側へと歩いて行った。そして、その突当たり
の部屋に入る。

そこは、宝石類をずらりと飾りたてている部屋だった。入口を入
って正面には大きなショーケースに赤や緑の宝石が散りばめられた
王冠が展示されていて、壁沿いにも指輪やらネックレスやらが鎮座
している。照明は薄暗いのに、思わず目を細めてしまうほどに、や
たらと眩しい部屋だった。

しかし残念ながら、僕はまったくもってこの建物を見回るつもり
などなかった（それに、いつまでもどこまでも南川の言いなりにな
っているのも業腹だ）。なので僕は時間潰しと言わんばかりに、単
なる来場客の如く、その展示物をぶらぶらと見回った。

……まあ、休日を潰されたのは極めて遺憾だが、ここに並べられ
ているのは、この一生では二度とお目にかかれないような展示品ば
かりだ。この際だからということで、僕は一つ一つじっくりと見て
回ることにした（周りにはきよろきよると部屋を見張っている大人
が数人おり、僕に対して疑ったような視線を向けてきた。しかし、
僕はまったく気にしなかった）。

展示品をじっと眺めて隣の説明書きを見てということを繰り返す
こと十数分。ふと、僕は一つのアクセサリーの前で立ち止まった。

立ち止まって、じっとそれを見入ってしまった。

その指輪が殊更にキレイだった——というわけでもなく、少
なくとも僕には、そこら辺の店に置いてあるものとそこまで変わら
ないように見えた。強いて言うなら、光の反射加減がなかなか強
く、その藍色の宝石が今まで見たものよりも少しばかり煌びやかに
感じたくらいである。

それは、オーストリアの王族の所有物だったものらしい。

四百年前に豪商から寄贈されたとか、戦時中に一度盗まれたとか、

そんな説明書きがプレートに書いてあるが、それらは別に僕にとって何の感慨もない。そのいきさつにも興味はなかった。ただ、単純に、僕は思ってしまったのだ。

——ああ、これはきつと『あの人』に似合うんじゃないか、と。

——『あの人』にこれを渡せば、きつと、あるいは必ず、喜んでもらえるだろう、と。

そして、さらに思ってしまった。

——もし僕が『砂時計』を捕まえたなら、これ貰えないかなあ、と。もちろん、そんな可能性は極めて低いことくらい、ゼロに等しいくらい低いことくらい、僕だってわかつている。いくら今まで二回ほど出会えたからと言って、そうそう何度も『彼ら』の手口を読めるとも限らない。それに警戒されている以上、その確率は余計に低くなる。期待するだけバカバカしい。

だけど、いくらか考えて、やはり思う——それを試みるのは僕の自由だ、と。

僕の勝手だ、と。

もしかしたら、この物語を『僕が彼女のお兄さんを捕まえ、指輪を手に入れ、それを彼女に贈るお話』に変えることもできるかもしれない。そんなハッピーエンドを紡ぐことができるかもしれない。そんな微かな期待を、しかし僕はしっかりと抱いてしまった。

僕は、もう一度チケットを見た——そこには『本チケットは記載日一日のみ有効。当日のみ、出入りは自由です』と書いてあった。

僕は再度そのチケットを上着のポケットにしまいなおし、すたすたと部屋から出ていった。

第九話「美術館にて」その二

世界の大怪盗を相手に、僕ができることなんて、そうはない。というか、一つしか思い当たらない——言わずもがな、僕が彼と最初に相見えた時に用いた手段である。

すなわち、彼が現れるポイントに網を張ること。

彼が予告状なんてものを送りつけている理由は、ようは警備をある程度密集させておきたいから。その警備の外側で自由に動きたいから。運悪く近所の警察官と鉢合わせする確率をできるだけ減らすためだ。

そこに網を張るのである。

南川から渡されたこの美術館周辺の地図をためすがえす見返し、僕が当たりをつけたのは、美術館から二キロほど離れた、閉業したホテルの駐車場。この周辺は商店もなく、田畑の間にぽつんぽつんと民家が並んでいるのみ。見る限り、この周辺でもっとも人に出くわしにくい場所である。

僕は半ば駆け足でそこに向かった。そして、七時を五分ほど過ぎた頃に、ようやくそこにたどり着いた。

その場所は、僕が地図から想定していたものとはほとんど変わらなかった。明かり一つ点いていない三階建ての旅館がのっそりと建っていて、その隣に八台ほど止められる駐車場がある。道路沿いにある自動販売機くらいしか光源がない場所だった。

やはりここなら、あいつが現れる可能性は十分ある。

しかし今回は、そのど真ん中に座り込んでおくなんて手はもちろん使えない。僕の顔は向こうにばれているのである。見つかったらその時点で逃げられてしまう。

だから僕は、塀をよじ登り、乗り越え、その奥に身を隠した。もちろん、奴が現れた時すぐに飛び出せるよう、近くにあったポリバケツの上に乗る、しゃがみこんで塀の向こうを覗き込むという体勢

をとる。これなら、ワンアクションで駐車場に飛び出せる。

その体勢のまま、僕は待った。

時折、目の前の車道を車が通り過ぎるが、それ以外は何も近づいてこない。この時間に出歩くような場所はこの付近にはないし、そもそもこの付近に住民が少ないんだろう。田んぼから虫の鳴き声が聞こえるだけで、本当に静かな場所だ。僕はいよいよもって、この場所が奴にとっても好都合であることを確信した。

あとは、奴がこの場所にちゃんと目を点けているかどうか、だ。

正直、これは確率の問題だ。奴も僕同様、地図から潜伏場所を見つけているのなら、ここを選ぶ可能性は極めて高い。もし奴が他の手段でもって潜伏場所を探しているとしたら、僕には及び知らない問題になってしまう。

とはいっても、僕にできることは、ここで待つことのみ。

腕時計の蛍光の文字盤を見ると、すでに七時半を廻っていた。ここに来た時点で携帯の電源は切っているので、急に鳴りだして折角のチャンスを潰すなんていうアホな状況は生まれないはず——ただ、一時間近く音信がないので、恐らく南川からは滝のような催促メールが届いていることだろう。この後もう一度携帯の電源を点けるのが少々恐ろしい……。

——がさっ

突然、僕の鼓膜に、草を踏みつけたような音が届た。

僕は思わず、ポリバケツから転げ落ちそうになる。

何とかバランスをとり、僕は音をたてないように息を一つ吐く。

そして、何の気配もなくこの草をかき分けるような音を立てたのは何者かと、自身の鼓動が速くなっているのを感じながら、僕は堀から頭を乗り出した。見ると、

「……ナ」

……猫だった。

歩道に立っている茶シマのデブ猫が、不審そうにこちらを見ている。闇の中でそいつの目がぎらりと光っていて、何だか怖い。

僕が

「しっしっ」

と歯ぎしり声を出すと、逃げる——というよりも鬱陶しがるように、その猫は何ともなさそうにタタタタと道路の方へ走って行った。そして再度くるりとこちらを見、もう一度進行方向へ顔を戻すと、そのまま見えなくなるまで向こうまでのそのそと歩いて行った。

……まったく、人騒がせな。

僕は肩を落とし、大きく嘆息し——

——その瞬間だった。

最初、肩に温もりを感じた。そのコンマ一秒後、首に圧迫感を覚えた。次いで呼吸が完全に阻害され、自分が首を絞められていることによりやく気付く。

首を覆うその腕を掴み、振り払おうと手に力を入れる。爪を立て、相手の痛覚を攻撃しようともがく。しかし、その腕を覆う布が厚すぎる。爪の先端が肌に届いている感覚がしない。なおも握力を最大限に発揮するが、一向に氣道に酸素が流れ込んでくる気がしない。

そして、気が楽になるのより、頭が真っ白になるのが先だった。

腕に力が入らなくなり、平衡感覚がぐらつき、世界が歪んだような感覚に陥った後——

——ぷつりと、思考が途絶えた。

第九話「美術館にて」その三

頬に、冷たくてざりざりとした感触を覚えた。

目を開けると、視界は暗い。しかし、何となく見える。それは灰色のデコボコの平面——アスファルトだ。長方形がいくつも並べられたこの白線の引かれ方からして、明らかにここは駐車場——僕が網を張っていた、ホテルの駐車場だ。

感じる重力の向きと背中との感触から、自分が地面に寝転がっていることにも気付く。起き上がろうと四肢を動かすが、うまくいかない。その原因は、手首と足首の圧迫感。両脚と両手がそれぞれまったく開かない。視線を動かすとそこには、テレビとかおもちゃ屋でしかみたことがない、銀色の鉄の塊——いわゆる手錠が巻かれていた。

「おっはよー」

ふいに聴覚に入った女性の声に、僕はびくりと肩を震わせた。そしてその声が聞こえた方——僕の背後へと首を回して何とか視界を持つていくと、そこに一人の女性が立っていた。

黒いジャケットに黒いパンツ、そしてダークレッドのインナーという、僕の同級生じゃ誰も似合いそうもないような、いかにも大人びた服装。けれど、その上の顔は、僕が毎日クラスで見ている顔——を少し時間進行させた顔。

四年後に彩さんがそうなるであろう顔。

「ふふ、ごめんねー」

その人は、しかしまったく悪気のない声音で言ってくる。

「だって、あんた、いっぱい隠れてるんだもん。それはもう、あたしたちを捕まえるつもりだって、明らかに見て取れたからね。先手を打たせてもらったわ」

「……くそつ、バレバレだったってことか」

「まあねー。なんてったって、猫がじつとそっち見てたんだもん。そりゃあ、あたしだって『そこに何かいる』って思っちゃうよ。タイミングが悪かったね、あつははは——それに、こっちは二人だからね。作戦通りあんたがあたしを捕まえに来たところで、勝ち目はなかったと思うよ」

「……二人？　ってことは、もう一人は……」

「うん、ふふふふ。今頃、美術館に入ってるはずだよ。もうお宝は盗みだした頃かな？　——じゃあ、あたしも、迎えに行かなきゃなんないから」

そう言いながら、その人は手を振り、駐車場を出ていこうとする。しかし車道へ一歩踏み出したところで、何か思い出したようにぴたりと立ち止まった。そして、くるりとこちらを振り返ってきて、

「……おっと、そうだった。言うの忘れてた。さすがに、一晚あんなをそのまま寝かしておくのはかわいそうだからね。その手錠のカギ、ナンバー合わせにしておいてあげたよ。四桁の数字を合わせれば、ちゃんと開くから。ヒントは『あたしの大切な日』。それさえ思い出せば、今夜中にちゃんと帰れるよ。ふふふ。じゃあ、頑張っ」

悪戯に笑うと、その人は今度こそ走って駐車場を出て行った。

僕は追いかけようと体をくねらせたが、体が転がるばかり。足首も閉じられているんだ。立ち上がれもしない。

僕は手首を視界の真ん前に持ってきた。見ると、そこには自転車のチェーンについているような、ドラム式のナンバー合わせのキー

がついている。手首をいっぱいまで曲げれば、薬指がどうにか届く。なんとかドラムを回せる。

今現在は、0000という、まるで回答を待つかのような番号が並んでいる。

さっさとこれを外さなければ、あいつらを追えやしない。折角潜伏場所は当たってたっていうのに、逃げられてしまう。潜伏場所が当たったのだって、よっぽど運が良かった結果だ。このチャンスを逃したら、次あいつらと会えるのはいつになるか分からない。

早く、これを解かなければ。

……ええと、確かあの人は「あたしの大切な日」とか言っていた。大切な日、彩さんの大切な日——と言われて、思い当たる日は、一つしかない。

すなわち、彩さんの誕生日。

つまりあの人は、僕が彩さんの誕生日をちゃんと覚えているかどうかを試したってことなのだろうか？ 思い出すまでにかかる時間を、時間稼ぎに利用しようとしたってことなのか？ ……ふん、あの人が一体何年後の彩さんなのかは知らないが、しかし、〈あの人〉は重要なことを知らない。というか、覚えていない。

僕は先日、彩さんの誕生日を見たばかりなのだ。

彩さんが公文書偽造したあの婚姻届には、ちゃんと彩さんの氏名および誕生日も記されていたのだ。そして僕はその日付を見たのだ。ちゃんと覚えているのだ。

十月二十三日と書かれていた。

僕はぎちぎちと薬指を動かし、ドラムを1023に合わせる。そして脇にあるボタンを押した——が、

「……あ、あれ？」

ボタンが、動かなかった。

何度も指に力を入れるが、感触は変わらない。硬いまま。再度ド

ラムを見ても、番号はちゃんと1023になっている。ずれているようにも見えない。

——ど、どういうことだ？

だって、彩さんの大切な日なんて、それ以外にありはしないだろう？ 誕生日以外ありえないだろう？ それとも、なにか？ 彩さんの勝手な記念日でもあるのか？ 彩さんが勝手に作ったっていいのか？ そんなの、僕が知るわけないだろう。

このままじゃ、番号を一つ一つ試していかないといけなくなる。

三百六十六回トライする必要がでてきてしまう。

それじゃ、遅すぎる。

——いや、待て。そうか、そうだ。そうだった。

そもそも、あの人は「あたしの大切な日」としか言ってないんだ。そして——『あの人が彩さん自身であること』も、実は確実じゃないんだ。

元々、僕があの人を『あの人』としか呼ばないのは、あの人 が彩さんであるとは限らないから。あの人 が彩さん以外の別人である可能性を捨てきれないから。排除しきれないから。怪盗『砂時計』が非科学的な何かを用いているとしたら、その非科学的な何かで『あの人』が彩さんになりすましている可能性だってゼロじゃないんだ。……じゃあ、『あの人』の大切な日ってのは？

というか、『あの人』の正体とは？

それこそわからない。怪盗『砂時計』の手品の種を知らない僕には、見当もつかない問題だ。そんなどこかの誰かの誕生日なんてわかるわけないし、それ以外の記念日ならなおさらだ。

それじゃどうしようもない。どうしようも——

「——ん？」

ごろんと転がり、頭を小石にぶつけた衝撃のせいなのかどうかはわからないが、一つ、一つだけ僕の中に、おぼろげな、頼りなさげ

な、しかし考えてみると現時点では唯一無二のようにも思える、たった一つの『ありそうな可能性』が沸き上がってきた。

それが『真実』なのかはよくわからない。

判断できない。判別できない。

けれど、それを試してみる価値はある。

僕は再び手首を折り曲げ、ドラムを回した。……ええと、確か『あの日』、僕が彩さんの家に行ったのは、十二月の最初の頃だった。そして、その時に確か『先週』と言っていた。つまり、『その日』は、十一月の最終週あたりということになる。

僕は『1130』と入力した。そしてボタンを押す———しかし、ボタンは動かない。

『1129』にする———ボタンは動かない。

『1128』にする———ボタンは動かない。

『1127』———動かない。

『1126』———動かない。

『1125』———動かない。

そして、僕がついに『1124』と入力した時だった。

ボタンを押すと、感触が明らかに違った。

明らかに軽かった。

そしてついに、ボタンが動いた。

カチリというこぎみい音が鳴り、

——ぱっかりと、手錠が外れた。

僕はふうと安堵のため息を漏らした。そして足首の手錠にも同じ番号を入れる———そっちも、同様に外れた。

僕は立ち上がった。腕時計を見ると、八時六分。

「……間に合う、のか？」

僕は呟いた。しかし呟いた後で、我ながらバカらしくなった。
間に合おうが間に合わなろうが、僕にできることは『それ』し
かないんだ。

だったら、やるしかないだろう。

可能性だけを見据えて走れる。

それが、高校生たる僕の特権だったはずだ。

高校生でしかない、僕だけの特権だったはずだ。

僕は大きく息を吐いた。

そして————思い切り、地面を蹴った。

第九話「美術館にて」その四

僕は、無我夢中で走った。

手元の地図を見ることがなく——というかぐしゃぐしゃに握りつぶしながら——ただただ前だけを見つめて走り続けた。どんな道順で走ったのかとか、どんな人とすれ違ったとか、そんなことも覚えてないくらい無心だった。

僕がようやく自意識を認識したのは、屋根の上だった。

どうやってそこに昇ったのかさえ、僕はまったく覚えていない。どころか、どんな思考でもって、どういう目的があってそこに昇ろうと思ったのかすら記憶の外だった——とにかく、見降ろした建物と周囲の庭園の形状から、ここが遠野岩美術館の屋根上であることに、僕はそこで初めて気づいた。

「……はあ、はあ」

息が苦しい。脇腹も痛い——当然だ、とにかくにも、僕があの駐車場からここまでの数キロを全力疾走で走ってきたのは事実なんだから。僕にとって、半年前の校内マラソン以来の長距離走だった。

ふうと大きく深呼吸し、冷たい夜の空気を喉の中で感じながら、僕は視線を真正面に向けた。

とさかのような形の群青色の屋根の上、その先端に立っている黒いスーツ姿の男を見据えた。

「……ふふ、くくくく」

帽子を目深にかぶっており、おまけに月光の影になっているため、その表情は見えない。しかしその息遣いや肩を震わせる仕草から、

そいつが笑っていることはわかる。楽しそうに愉快そうに、笑い声をこぼしている。

「……ま、間に合っ、た」

まだ整っていない呼吸の中、僕は呟く。そして一步前へ進みながら、

「お、追いつめましたよ、怪盗『砂時計』。……………いや——

——『橡冬香』のお兄さん！」

僕は糾弾するように言った。

目の前のその人は、ようやく笑いを止め、

「……へえ、よくわかったじゃないか。あいつ、何かミスをやらかしてたかい？」

「いえ、特に。僕にしたらノーヒントに近いもんでしたけど。……というか、そもそも、僕が『彼女』のことを『彩さん』だと思ってたのは、僕の勝手な誤解でしたからね」

僕はそろりと前へ進みながら、言葉を紡いでいく。

「今まで二回あった『彼女』との邂逅。その中からわかる事実のみをまとめて考えれば、どうしてもわかることです——『あの人』について確かなのは、橡彩さんに顔が『似ている』ということだけです。……もちろん、『あの人』が彩さん本人である可能性だって十二分にありました。しかしそれが間違いだとわかれば、答えは自ずと一つに絞られてくる。自動的にそうだとわかる。『あの人』は四、五年後の彩さんではなく——『七、八年後の冬香ちゃん』

だと、ね」

「……ふふ。まあ、そりゃそうだ。俺も冬香も、その誤解を利用させてもらったただけだからね」

言いながら肩をすくめる『砂時計』。

「しかし、よくもまあ、君が冬香の誕生日なんて覚えてたねえ？
少なくともあいつは、『この時点』で君に誕生日を教えた覚えはないと言ってたのに……。一体全体、誰に聞いたんだい？」

「別に、誰でもないですよ。たまたま偶然聞いただけです。以前彩さんの家に行った時、冬香ちゃんが彩さんに対して『先週の私の誕生日』について不満を言ってるのを、ね。そこから逆算して、なんとかわかっただけです。……今回ばかりは、本当に運が良かった」

僕はさらに一步前へ踏み出して、

「……しかし、こっちこそよくわかりませんよ。あなた、今回はずいぶんとここでゆっくりしてたんじゃないですか？ 冬香ちゃんが僕を襲ったのは結構前なのに、まだこの美術館の敷地の中にいたなんて。前回も前々回も、盗んだらすぐに帰ってたのに。今回は何か別な用事でもあったんですか？」

「は？ ん？ へ？」

僕の問いかけに、怪盗『砂時計』は首を右に左に傾げた。シラをきる———というよりかは、本当に悩んでいるような、本当にわけがわかっていないような、そんな所作だった。次いで、わざとらしく手をポンとついて、

「ああ、そうか……。……ふっふふ。君、まだ気づいてないんだね？ 無我夢中だったから」

「……気付いてないって、何にですか？」

「うっふふふ。時計、見てみなよ」

「……時計？」

この時の僕の頭には、もちろん『これは僕の視線を逸らす罠なんじゃないか？』という疑いが巻き起こった。……が、かと言って、『時計を見ないことが罠なんじゃないか』という疑惑も拭いきれないし、見ないままでは話が続かない。少しばかり迷った後、僕は『砂時計』から視線を逸らさないよう腕を持ち上げ、横目でちらりと自分の腕時計を見た。その時計盤は——こちこちと、相変わらず秒針を動かしている。その柄も形も動きも、毎日僕が見ているそれだった。

「……別に、いつも通りの僕の時計ですが？」

「はははは。時間だよ。時間を見てみなよ」

「……時間？」

僕は再度、手首をチラ見した。時刻は、八時九分。別に何ら問題ない——

——……あ、あれ？

僕は思わず、時計を二度見してしまった。

八時？ 九分？ 九分？ 本当に？ あれ？ だって、そんな、

おかしい。手錠を外して立ちあがった時、僕はちゃんと時間を見たんだ。その時が確か、八時六分だったはずだ。あの後、僕は数キロの道のりを走ってきたんだ。あれからたかだか三分しか経ってないなんて、そんな、ありえない。もしかして、時計が壊れているのか？ ……で、でも、秒針はちゃんと動いているし。

僕は慌ててズボンのポケットから携帯を取り出した。

パカリと開き、電源を入れ、その画面に映っているデジタルの時間を見る——やはり、PM八時九分。腕時計とまったく同じ時間を示している。……やはり、この時間が正しいのか？　しかし、そんな、なんで……。

僕は茫然としたまま『砂時計』の方へと視線を上げた——『砂時計』は腕を組み、僕の反応に満足したような仁王立ちで、

「はっははは。いやいや。俺は何もしてないよ。君に対していかなる干渉もしていない。それは純然たる『君の力』だ」

「……僕の、力？」

「そう、君の力。そして、それは俺の力とも同じものだ」

『砂時計』と同じ力？　それって、まさか——

「——そう。時空遡行」

『砂時計』は、白い歯をむき出しにして言ってくる。

「君のレベルでは、まだまだタイムトラベルとまではいかないがね。しかしそれでも、極めて短い時間の間に、おおよそ常人では不可能なくらいの運動をすることはできるはずだ。ここまで来る最中、君も気付いただろ？　もしくは、夢中すぎて気付かなかったからこそ反応か？　君が走っている間、周りの人間はみな止まってるんじゃないかと思うほどにのろろと動いていたように感じたはずだ。君が速く動きすぎてただけなんだがね。他の人たちは、君のことを視認することすらできないのさ。……わかっただろう？　それが、この俺、すなわち怪盗『砂時計』の能力だ。くっくっく。おめでとう！　これで君も一人前だ」

説明に頭が——というより、感覚が、現実感がついていって

いない僕の目の前で、『砂時計』はぱちぱちと乾いた拍手をした。

「よおし、じゃあ、これは祝い代わりだ。今日の戦利品。オーストリアの貴族の指輪だ。多分これが、君が一番『必要としている』ものなんだろう？ ほら、オークションにかければ三千万以上する品なんだから、失くさないように気をつけな」

すたすたと僕の真ん前まで歩を進めた『砂時計』は僕の右手を掴んだ。そして双方の目の前、しっかりと、僕の掌に深い藍色の宝石がついた指輪を握らせた。

「さあ、これで君も一人前。これからは、君の望む通りの生き方をすることだ。応援してるからね」

からからと笑いながら、砂時計は再び屋根の先端に立った。そして、ひゅんと飛び上がると――

――そこから、見えなくなった。

僕はただ、それを見送るばかり。

思考も、言葉も、距離も、すべてに僕はついていけない。

僕が、『砂時計』と同じ能力――超能力の類を発現した？

時空遡行？ タイムトラベル？ ……意味が分からない。どこまで本気なのか分からない。どこから冗談なのか分からない。わからないことだらけだ。

……いやいや、そうだ。呆氣にとられ過ぎて『砂時計』の説明に聞き入ってしまったが、そもそも、その説明自体が奴のペテンである可能性も否定できないんだ。僕が冬香ちゃんに拘束された時点から、何かのトラップが発動していた可能性もあるのだ。

確かに、時空遡行なんて能力があるのなら、怪盗『砂時計』の盗みの手口にも説明がつく。数年後の冬香ちゃんがこの時代に存在し

ている理由も説明できる。納得できる。けれど……。

僕はそろりと掌をひらいた。

そして、そこで輝いている指輪を見つめる。

これを遠野岩美術館に返さなくてもいいのか——と迷わなかったと言えは嘘になる。貰ったものとはいえ、これは盗品。倫理にのつとれば、僕が持つべきものではないのだ。

しかし、これを返した場合、必然的に僕はこれを手に入れたいきさつを聞かれる。そして、ここで奴と出会ったことを警察なんかには言わなければならなくなる。それはつまり、冬香ちゃんやそのおにいさんについても話さなければならぬということだ。

少なくとも僕は、今の段階でそんなことをしたくない。一応のところ冬香ちゃんは、僕にとって少なからず関わりがある人だ。この時代においても、お互い顔も名前も知りあっている人だ。事情もよくわかってないのに、そんな人のことを警察に売るなんて、とてもじゃないができない。したくない。……というか、数年後の人間がタイムトラベルしてきただなんて、説明して信じてもらえらると思えないし。それじゃ、僕が妄言者扱いを受けるだけだ。

やはり、この指輪は僕が持つてなくちゃならない。

……まあ、いいか。元々、怪盗『砂時計』を捕まえた者には一つ好きなものを与えるというおふれが出ていたんだ。この指輪をその対価としてもいいだろう。僕が好きなように扱ってもいいだろう。

そう——

——いつか、僕が怪盗『砂時計』を捕まえれば。

僕は自身の心の中に、はっきりと、そんな物語を描いた。そんな決意を描いた。そしてもう一度右手を握りしめ、屋上の入り口へと歩いて行く。

最終話

商店街の大通り、彩さんの後ろをついて歩く僕の足取りは、この上なく重かった。

トボトボとズルズルと、一步一步の歩幅は猫よりも短く、頭は枯れたヒマワリのようにひしゃげ、脱臼でもしたかのように両肩はだらんと地面に垂れている。この様を見た他の通行人の九割九分は、恐らく僕のことを、手錠に紐を繋がり引っ張られていく捕虜のようだと形容することだろう——いや、事実、僕は敗軍の兵なのである。

今日、僕は彩さんに再戦を申し込んだのだ。

発端はもちろん、四か月前のあの敗北。遊園地のゲーセンでパーフェクト負けを喫したあの試合だ。百三十六日と三時間四十三分も前のことはとはいえ、僕にとっては昨日の出来事のように思い出される鮮明で克明な雪辱。思い返すたびに頭に血が上り、わなわなと全身が震えるほどのスピリチュアルダメージを負ったのである。

僕は、自分の力でこの悪夢を乗り越えようとした。

自身の力でこの悪夢に打ち勝とうとした——のだが、やはりというか、何というか。

僕だって、あれから幾重もの鍛錬を積み重ねてきた。血の滲むような試練を超えてきた。日々ゲーセンに通い、精進に精進を重ねてきた——はずなのに、それだけでは彩さんとの距離はまったくと言っていいほど縮まらなかったのだ。まるでただのリプレイのように、画面上では前回と同じアクションが繰り返されただけだった。

「……はあ」

僕の今までの努力は何だったのだろうか？ 投じたお金は何だったんだろうか？ かけた時間は何だったんだろうか？ さっきから、

溜息ばかりが口を衝いて出てくる。自然と肩が落ちてしまう。僕にはもはや、自宅まで帰る気力もありはしない……。

って、いやいや、違う。

そうじゃない。そうじゃなかった。僕が今日、彩さんと二人で連れ立つ機会を伺ったのは、こんな目に会うためだけじゃないんだ。再戦を申し込んだのだって、単なる名目的なことだったんだ。

僕は気を入れ替えるように、ぶんぶんと首を横に振った。そして顔を上げ、目の前で鼻を高々と上げながら通りを闊歩していく彩さんに、

「あ、あの、ちょっと待って、彩さん」

と声をかけた。

彩さんは一つ縛りの後ろ髪をたなびかせ、スカートの裾をふわりと浮かしながらフィギアスケートのようなターンを決めて、

「ん？　なんだ、元？　……………というか、あんた、『ちょっと待って』だなんて、その言葉使い。少しばかり、あたしに馴れ馴れしすぎるんじゃないのかい？　あたしに対して称すべき『敬意』っていうものがあるんじゃないのかい？　まったく、そんなこともわかっていない輩に、あたしがわざわざ声をかけてやる義理なんてあるのかなあ？　ない気がするんだよなあ？　なあ、この———敗北者ッ」

「ぐっ……」

僕の胸にメラッと激情が巻き起こる。思わず肩がわななく。ぎりと歯が軋む。……しかし僕は何とかそれを堪え、無理矢理ニコリと笑みを作って、

「……あ、あの、彩、さん………あ、彩、様。時間を取らせてしまうのは、まことに、申し訳、ないのです、が、す、少しばかり僕の話聞いてく………聞いていただけませんか？」

「はっはっは、あっはっはっはっは。しょうがない。しょうがないなあ、聞いてやろう」

胸を張り、肩を揺らして尊大に笑う彩さん。

僕はジャケットのポケットから小箱を取り出すと、彩さんの目の前に歩み寄った。そしてお辞儀するように上半身を傾け、さも召使いのように彩さんの眼前にその小箱を差し出す。

彩さんはそれを見降ろし、こくりと首を傾げて、

「……？ 何、これ？」

「いや、あの………これは、こういうもんです」

言いながら、僕はばかりとその小箱を開いた———その中から、黄金色のリングに、藍色の宝石がついた指輪が現れる。その光沢が夕日を反射し、彩さんの顔を僅かに橙色に染め上げた。

少しばかり眩しそうに目を細めた彩さんは、

「……へ？」

と呆けたような声を上げた。そしてぱちくりと瞬きをし、ぽかんとそれを見降ろして、アホウドリが一頻り鳴き終えるくらいの間を開けた後、

「な、なに、これ？ え、と………くれるの？」

「う、うん」

僕が頷くと、彩さんは戸惑ったように、僕の顔とその指輪を交互に見てきた。そして恐る恐るとその指輪を手に取り、目の前にかざし、その宝石やリングをしげしげと眺める。

「……いや、これ、何だかすごい高そうな指輪だけど。一体何でこんなものを、急にあたしに——ああ、なるほどっ！ わかった！ あんた、あたしに弟子入りたいのねっ！ これは弟子入りするための対価、いわゆる授業料ってことねっ！ あたしの才能に魅入られたあんたは、ついにあたしに師事することを心に決めたと！ そのくだらない一生を、ワトスン博士よろしく、あたしの伝説を隣で語るために費やす決心をしたと！ つまりはそういうことねっ！」

「——い、いや、あの、ち、ちが………というか、ワトスン博士をくだらないとか言うな——」

「そうね。そりゃそうね。あんな試合の後じゃあ、そんな心境になるのも無理からぬことだよ。うんうん。……しかし、あたしの弟子を名乗るからには、あんたもそれなりの実力を有してもらわなきゃ困るよ？ あたしまで恥かしいちゃうから。……よし！ しょうがない。明日からみっちりあたしが直々に特訓をしてあげるから！ 喜びなさい！ とりあえず毎日、学校が終わったらすぐにあたしの家に直行するように！ 夕飯までみっちり鍛えてあげるから！ 一度でもすっぽかしようものなら即破門だ！」

「——だ、だから、違、そうじゃな——」

「……ふん？ そうだ、そう言えば、来週、にぃさんがサークルの合宿に行くって言ってたな……。ふふふん。つまり、冬香さえ口止めしておけば、その間邪魔者はいないというわけだ。ふーむ。………よーし。その間、こっちも合宿を敢行するか！ 泊まり込みで、朝から晩まで、晩から朝まで、徹夜で徹底的に鍛えてやる！」

「——ちょ、ちょっと、僕の話を——」

「そいじゃ、そういうことだから！ それまでにちゃんと実力をつ

けてくるのよ？ あたしのハードペースについてこれるようにね！
覚悟しておきなさい！」

完全に僕の反論を無視しながら、彩さんは自分の提案を自画自賛するように頷いて、そのまますたすたと前へ行ってしまった。

僕はずっしりと肩を落とし、溜息を一つつく。

……しかしまあ、どこまで本気か知らないが、話通りにいけば、あと数回彩さんの家にお邪魔できるってことか。これはこれで好結果は好結果だろう。もうしばらくは一緒にいられるということなんだ。この間にもう少し彩さんとの距離をつめて、あともう一度何かしらのチャンスがあれば、きっと――

「――じゃ、なくて！」

自省する――というより、もはやノリツツコミのような体で、僕は声を上げた。……悲しいかな、知らないうちに、僕の右手も自然にツツコミのジェスチャーをしていた。……誰の影響だろう、これは？

彩さんはくるりとこつちを振り返り、

「ん？ 何？」

と、小首を傾げながら問うてくる。

僕はこほんと咳ばらいをしながら、

「そうじゃなくて、僕が君にしたいお願いは、そういうことじゃないんだ」

「へ？ 違うの？ じゃあ、何？ あたしに教本を書いて売ってください？」

「違う」

「あたしの爪の垢を煎じたお茶を売ってください？」

「違う」

「一日五回あたしに向かって祈らせてください？」

「違うって……」

僕は疲れたような溜息をつき、

「だから、僕がその指輪と共に君にしたいお願いというのは、つまり、ええと、何というか……」

さっきのノリツツコミのおかげで、僕の心情にも勢いがついていたはず——はずなのに、言っているうちに、僕の声はまた段々とトーンダウンしてしまう。

伝えるべき言葉はしつかりとあるのに、それを口に出すことに戸惑いやら不安やら恐怖やら、そんな負の感情が入り混じってしまう。少しでも気を許せば、そのまま曖昧にして逃げてしまいそうな、逃げたくなってしまうような、そんな心持になってしまう。元々、それが僕の性格だ。それが、僕の普通なんだ。

だけど、

だけど、だけど、だ。僕にできることなど、しがない怪盗に出会えることくらいなんだ。怪盗から指輪を譲ってもらうことくらいなんだ。これ以上僕に誇れるものなんて、これ以上の機会なんて、僕にありはしないんだ。

それに、たとえここで僕が撃沈したとしても、きっと明日からもまた彩さんは僕に笑いかけてくれるだろう。今までと変わらず接してくれるだろう。そんな確信がある。これもまた、彩さんだからこそその信頼だ。何も怖がることはないんだ。

だから、僕は息を大きく吸い込んで、そして言葉を続けた。

「……ええと、だから、彩さん、その——」

——僕と、付き合ってください」

……………舌が震えて、危うく噛みそうになった。

けれど、一応伝えた。ちゃんと伝えることができた。

視線を上げて、ちらりと彩さんの顔を伺うと——彩さんはきよんとした顔で、

「へ？ 付き合うって……どこに？」

「いや、どことかじゃなくて、彼氏彼女のお付き合いをしてくださいって、こと」

「あんたと？」

「そう」

「あたしが？」

「そう」

「今から？」

「そう」

僕が三度頷くと——彩さんはさらに目を丸くし、ハトが豆鉄砲を食らった——というか、銃弾が羽をかすめたような顔になった。ここまで驚いた彩さんの顔を見たのは初めてだ。

……まあ、無理もない。

友好範囲の広い彩さんだ。男友達の中で僕のことを特別視なんてしていなかっただろうし、僕のことを異性として見ていたかも疑問だし、僕からこんな告白を受け取るなんて予想の範疇外だっただろう。返事を前もって用意していたなんてまったく考えられない。

予想通り、彩さんは続ける言葉が見つからないように、きよんとしたまま黙ってしまった。

この間が段々居心地悪くなり、いよいよ彩さんのことを困らせてしまったかなと、僕が後悔し始めたところで——ふいに、とい

うより突然に、目の前の現象であるにもかかわらず僕が飛び上がった驚いてしまいそうになるほど突然に、眼前の彩さんが、目をつぶってるんじゃないかと思うほど目を細め、目尻をこれでもかというほど垂らし、ひん曲がるんじゃないかというほどに口を歪め、鰻頭を丸呑みしたかのように頬を丸くし、耳を真っ赤にして、何だかもう――

――気持ち悪いくらい笑顔になった。

僕は思わず一步後ずさった。

引いてしまった。

ヒいてしまった。

位置的にも、心情的にも。

しかし彩さんは「ふへへ」という不気味で気味悪い笑みをこぼして、

「へー、なるほど、へー、へー、へー」

と、あからさまにわざとらしく呟いた。

「なるほど、あんたが、あたしと、このあたしと、付き合いたいと、今、今すぐに、あたしと、付き合いたいと、ほー、ほー、へー、ふーん、なるほど、ふふ、まあ、そりゃそうだよねえ」

彩さんは腕を組み、後ろ髪を揺らしながら、うんうんと顎を縦に振る。

「そりゃまあ、あたしみたいな美しく麗しく、それでいて優しくしおらしい、女性の鑑のような女の子が近くにいれば、そりゃああんただって告白しないではいられないよね。付き合いたいと思わずに

はいられないよねえ。うんうん、それは当然だ。当然で自然だ。自然で当たり前だ」

鼻を高々と天に向け、神様にでも自慢するかのよう言う彩さん。次いで、僕の目の前に人差し指と中指を立てた手を差し出して、

「——しようがない、二年間だけだよ？」

と言ってきた。

………二年？

最初、僕は言われた意味が分からなかった。

二年？ 二年？ ……何でだ？ 何で彩さんは、いきなりそんな期限を設けてくるんだ？ 何の前提があつての時間制限なんだ？ どんな意図があるリミットなんだ？

男女の関係なんて、それ以上続く可能性だってあるし、はたまたその前に終わってしまう可能性だって十分ある（そもそも僕としては、彩さんと半年以上付き合っている自信もあんまりないくらいだ。数時間、あるいは数分で振られやしないかと戦々恐々としているほどである）。それなのに、どうしてそんなリミットがあるんだろう？

少し考えて、僕は思い至った。

……そうか、今現在僕らは高校二年生。そして、今年度が始まったばかりという時期——つまり、僕らは約二年後に高校を卒業するのだ。僕と彩さんは、同じ高校の同級生という範疇から出てしまうのだ。毎日同じ学校に通い、毎日顔を合わせ、言葉を交わすという習慣が無くなってしまふのだ。日々一緒にいられるという確約がなくなってしまうのだ。

つまり、高校の間だけ付き合おうということだ。

……まあ、僕と彩さんが同じ大学に進む可能性なんてほとんどないだろう。試験結果もだいぶ違うし（どちらが上かという話はあえ

てするまい）、性格が違いすぎる分、進路がダブるなんてことも考えにくい。

加えて、彩さんには、遠距離になってまで僕との関係を持続させるモチベーションはないということだ。残念ながら、彩さんはそこまで本気ではないということだ。僕に対して、そこまでの執着心はないということだ。

僕は肩を落とした。

これは落胆ではなく、ただの単純なる納得だ。

今のやり取りからして、彩さんの好意に甘えて僕がへ付きあわさせてもらうようなもの。主導権は彩さんにある。決定権は彩さんにある。僕は彩さんに従う他ない。

目の前の彩さんは、どんどん前へと進みながら、

「さて、二年しかないとなると、時間がないな。どんどんカレカノ的なイベントをこなしていかなければ。ふーむ、これから忙しくなるな。とりあえず当面の問題は、初ちゅーのシチュをどうするかということになるが……」

と、ぶつぶつ呟いている。

……まあ、たった二年だけでも、一緒にいられるだけで、僕は幸せ者だ。

僕は微笑のような苦笑のような顔になりながら、彩さんの後を追おうとした、ところで――

「――ふふ、おめでとう」

いきなり、肩の後ろから声がした。

半年前のお化け屋敷でもなかったくらいにびくついた僕は、飛び上がり後ずさり振り返り、その声の主を見た。

……いや、見る前に、その声からそれが誰なのかはわかっていて。

昨日の夜、美術館の屋根の上で少しばかり話した男の声だ。そこで僕のことを褒めてきた男の声だ。僕に指輪を渡した男の声だ。すなわち——怪盗『砂時計』の声だ。

しかし、僕が驚いたのはそれだけじゃなかった。

僕は今まで、こいつと夜にばかり出会っていた。さらに逆光やら帽子やらの影になっていたせいで、僕はこの顔を見たことがなく、今この瞬間に初めてこいつの顔を見たのだが——その顔の造りは、とてもとても見覚えがあった。細目にややとがった鼻、少し角ばった輪郭、そして右耳の上の癖っ毛——それは、僕が毎日見ている顔、毎日鏡に映している顔、つまり——

——僕だ。

僕の目の前、ポロシャツにジーンズというラフな格好をした『僕』が、僕に対してにんまりと笑いかけている。

……いや、まんま僕というわけではない。僕の顔にしては少し丸くなってるし、顎のあたりの髭も濃い気がする。今の僕の顔とは少しばかりかけ離れていて、まるで——〈数年後の僕はこんな感じだろうという顔〉だ。

……そうだ。僕はすでに数年後の彩さん——ではなく、冬香ちゃんにも出会ってるんだ。だから、数年後の僕が〈ここ〉にいることに、今更驚くこともないんだ。数年後の僕がこの時代にいることだって、ありえる話ではあるのだ。

しかし、それでも驚愕を禁じえないのは——怪盗『砂時計』の声の主が僕であること。

だって、この声は今まで何度も聞いているが、日々発している僕自身のものとは印象が全然違う……い、いや、そうだ。そもそも僕は客観的な自分の声というものをこしばらくまったく聞いていなかった。聞く機会がなかった。小学一年の頃、父親が撮った運動会のビデオが最後だった。

これが客観的に聞いた僕の声だというなら、それはそうなのかもしれない。

……しかし、だからと言って、何で数年後の僕が怪盗『砂時計』なんだ？ 何で僕は数年後に怪盗『砂時計』なんてものになるんだ？ 確かに、南川と違い、僕自身が彼に対し嫌悪感を抱いていないのは確かだけれど……。イービルガーネットの音色や、オランダ貴族の指輪に魅入られてしまったりと、そういう兆候がなかったかという、否定はできないけれど……。でも、だからって何で僕が怪盗にならないければならない？ そこにどういう理由があったんだ？ どういう経緯があったんだ？

そんな疑問が、次々と浮かんでくる。

浮び続け、僕の胸の内が押しつぶされそうになる。

けれど『砂時計』はあくまでにこやかに、

「ふっふっふ、前も思ってたけど、やはりというかなんというか、俺の場合と少しばかり違うねえ。俺がたどってきた過去とは場面やタイミングが違う。おかげで、ちよくちよく驚かされて、楽しいもなさ……。それに、違うと言っても、前提は変わらない。そして結果も変わらない。そりゃそうだ、どうであれ、君は俺なんだから。だからこそ、親近感もわく」

そう言って、『砂時計』は僕の肩をぽんと叩いた。

「じゃあ、まあ、君も君で頑張ってくれ。俺ももう少しここで働いたら、すぐにおいとまするからさ。それじゃ、お元気で」

肩越しに手を振りながら、すたすたと去っていく怪盗『砂時計』

――僕。

僕はただ茫然と、それを見送ることしかできなかった。
そして見送りながら、ぐるぐると考えが巡る。

……そうだ。そもそも、怪盗砂時計の正体を彩さんの「おにいさん」だと勘違いしていたのだって、ようは、彼女が「……まったく、にいさんたら」と呟いたのを聞いたからだ。それだけの根拠にすぎない。

だから、たとえばそれが僕の聞き間違いであるとか、はたまた、彼女がそう僕に誤解させるよう嘘をついたという可能性だってある。これもまた、僕の勘違いに過ぎないんだ。

……いや、違う。そうだ、それを呟いたのは彩さんではなく、あくまで冬香ちゃんなんだ。それもまた僕の誤解だっ——
——ん？

待てよ。確かに、三人兄妹の長女たる彩さんの「おにいさん」っていうのは、ただ一人しかない。養子でも取らない限り、できるわけがない——けれど、それがもし『冬香ちゃんのおにいさん』というなら、もう一つ、もう一つだけ〈別の可能性〉もあったんじゃない……。そうだ。〈お兄さん〉ではなく、『お義兄さん』なら——

「——おーい！ 元え！ 何してるんだあ！」

今まさに繋がりそうになった僕の逡巡は、彩さんの叫び声で霧散した。

声のした方を向くと、数十メートル離れた先で、彩さんがぴよんぴよん飛び跳ねながら僕に手を振っている。

「ほら、早くしろ！ まずはイベント第一弾！ 『吐きそうなくらいに甘ったるい恋愛映画を二人で見る』を敢行するぞ！ ほら、早く映画館に向かうぞ！」

……何でまた、吐きそうとわかってる映画をわざわざ見なきゃならないんだ？

僕は内心で呟きながら、しかし肩をすくめるだけで、あくまで従

うように彩さんの後をついて行った。

その様を見た彩さんは、

「なんだ、そのツツコミを寸でのところで我慢したような顔は！
何か文句あるの！」

「い、いや、何もないよ……」

僕は慌てて顔の前で手を振った。そして愛想笑いを作って、

「ただ、彩さんと二年しか一緒にいられないとなると、これから頑張って楽しまなきゃなあって、そう思っただけだ。二人でいられるのは貴重な時間だからね。大切にしようってね」

と答えた——言い訳のようになってしまったが、しかしこれも僕の本心だ。彩さんと一緒にいられるとも期待していなかった僕にとって、これは天国のような時間なのだ。もしかしたら、僕にとって一生で一番大切な二年間かもしれないのだ。だから、僕は何よりも大切にしたい。大切にしなければ。僕はそう思ったのだ。心の底から。

しかし彩さんは、この僕の発言に、きょとんとした顔になった。そして口元に手を当て、考え込むような顔になった後——ああ、と納得したような表情をして、

「そうか、あんた、忘れてんね」

「忘れてる？ ……何を？」

僕の問いに、彩さんは再びにんまり笑顔になった。そして右肩に掛けたかばんをおもむろに開くと、そこから一枚の紙切れを取り出す。

「これ、忘れたの？」

そう言って、彩さんは僕の目の前に、それをひらひらとたなびかせる。

僕は、その紙切れをよく見た——よく見ると、それは数週間前、僕が強制的に描かされた——

——婚姻届だ。

……いや、確かに、僕はこれの存在をすっかり忘れていたけど。……でも、何で彩さんはこのタイミングでこれを取り出したんだ？ という話のつながりだ？ 婚姻届と『二年』という期限。そこにどんな関係が？ ——と数秒考えたが、それは考えるまでもなく、すぐにわかることだ。

……そうだ。今日から二年後には、三月二十日が誕生日たる僕は十八になるんだ。

その婚姻届が、やっと効力を発揮するようになるんだ。

そうか、そういう意味での二年だったのか。

やっとわかった。

合点がいった。

すべてを納得できた。

「ほら、わかったら、さっさと行くよ！」

叫ぶように言いながら、彩さんは半ば照れたような、半ば恥ずかしがっているような、やたらと眩しい笑顔になる。眩しすぎて、目が眩みそうになって、僕はしばし言葉を失ってしまった。

僕といることで、彩さんが嬉しそうにする。楽しそうにする。そ

んな感覚だけで、僕は生まれて初めてともいえるくらいの、〈幸せ〉という感情に浸る。これが〈幸せ〉ってものかと、生まれて初めて理解する。何だかもう、うじうじと悩み続けて生きてきたこの十六年間で、今この瞬間に、今この一瞬だけで、一気に、綺麗に、さっぱりと、完全に報われてしまったような、そんな感覚になる。そんな感覚に浸る。

僕は何も言えない。何も言えなくなる。ただただ、顔がにやけてしまうのを懸命に押し殺しながら、彩さんの後ろについて歩くだけ。飛び跳ねるのを我慢するだけで精一杯だった。

おかげで、

「あんた、それ、いつも持ち歩いてたのかよっ！」

という、できれば今聞いておきたかった僕の疑問は、しばらくの間、彩さんに伝わる機会を失ってしまったのだった。

〈怪盗『砂時計』と僕 E N D〉

最終話（後書き）

というわけで、「怪盗『砂時計』と僕」でした。お読みいただきありがとうございます！

この作品を書き始めたきっかけというのは、実は——ラブコメ、というものを書いてみたかったのです。

しかし、一体何をどうすればラブコメというジャンルたるのかよくわからず、さらに今の主流である「主人公がたくさんのヒロインにもてはやされる」という形式も式織が書いてもなんだかなーと思って、考え直し。結果として、今回のような「主人公の恋愛感情を主軸にした話」を書いてみました。

これがラブコメなのかまったくもって自信が無かったので、ジャンルもファンタジーとなっております（汗）。

元々は連載中の拙作「つくみフェイズ移動論」よりも書き始めたのは早かったのですが、「つくみ」の方がおもしろいんじゃないかと思い、先に向こうをこちらのサイトに乗せた経緯があります。しかし、書いてみるとこちらの方が筆が進んだので、「怪盗」の方が先に完結することに……。行き当たりばったり出すいません（滝汗）

「つくみ」はもうしばらく時間がかかると思うので、気長に待っていただけだと思います。

ではでは、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1396n/>

怪盗『砂時計』と僕

2010年10月19日10時28分発行